



文化財愛護
シンボルマーク

郡家町文化財報告書25

鳥取県八頭郡郡家町

KUNŌJI KITSUNEDUKA ISEKI

久能寺狐塚遺跡

八頭高等学校運動場造成工事に伴なう
埋蔵文化財事前調査報告書

2002・3

郡家町教育委員会



久能寺狐塚遺跡発掘調査会場

序 文

この久能寺狐塚遺跡発掘調査は、鳥取県立八頭高等学校運動場造成工事に伴うもので、その予定地内にある埋蔵文化財を記録保存するため緊急に発掘調査をしたものです。

八頭高等学校周辺の丘陵地帯は以前から遺物や遺構の存在が確認されており、試掘調査において遺構が確認されたため、運動場造成面積3万平方メートルのうち掘削部分の2箇所5千平方メートルを調査しました。

このたびの調査実施にあたり、直接調査に参画していただいた方々、また、適切なご指導をいただきました県教委文化課、県埋蔵文化財センターの職員の方々に対しまして深く感謝と敬意を表するものであります。

平成14年3月

郡家町教育委員会教育長 田 中 省 吾

例　　言

1. 本報告書は、鳥取県八頭郡郡家町教育委員会が、鳥取県立八頭高等学校運動場造成計画にともなって2001年度実施した、郡家町久能寺狐塚遺跡の発掘調査記録である。
2. 郡家町久能寺狐塚遺跡は、郡家町久能寺字狐塚・練塚に所在する。

国土座標はV系を基に、

A調査区 X=-66170.6 ~ -66253.8

Y=-7673.6 ~ -7776.8

B調査区 X=-66125.8 ~ -66196.5

Y=-7630.8 ~ -7676.1

である。

3. 本報告書で使用した方位は座標北であり、標高はすべて海拔標高である。
4. 本報告書記載の位置図は、昭和61年9月、八頭中央都市計画計画図(郡家町)、修正、平成3年12月町役場建設課所有、2,500分の1の地図による。
5. 本報告書の執筆・編集は、道谷富士夫が当たった。
6. 発掘調査によって作成された記録、出土遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査、整理作業にあたっては、下記に便宜をはかっていただいた。

県立八頭高等学校　富山建設　蓮佛組　フジテクノ

凡　　例

1. 本報告書における遺構記号は次の通りである。
S I : 壺穴住居跡 S K : 土坑 S X : 土壙墓 S B : 掘立柱建物跡 P : 柱穴
2. 本報告書における実測図は、図に表わされた縮尺による。
3. 遺物には遺跡名(郡家・久能寺狐塚・遺跡 K・K・I)、A・B調査区名、グリッド名、取上げ番号を基本的に記載した。
4. 遺物実測図の番号は、遺物番号である。
5. 図版中の()、東・西・南・北は被写体に対するカメラ位置である。
6. 壺穴住居、土坑、土壙、ピットの規模は、(長径×短径×深さ)で表わした。但し、長径、短径は、上縁部での規模である。

目 次

序文

例言・凡例

日次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 歴史的環境	3
第2節 地理的環境	4
第Ⅲ章 調査の概要	5
第1節 A調査区の概要	5
第2節 B調査区の概要	6
第Ⅳ章 遺構と遺物	9
第1節 A調査区の遺構と遺物	9
1. 堅穴住居跡	10
2. 土坑 (1)土壙墓 (2)土坑 (3)落し穴	20
3. 柱穴	26
4. 石材	26
第2節 B調査区の遺構と遺物	28
1. 堅穴住居跡	29
2. 掘立柱建物跡	33
3. 土坑 (1)落し穴 (2)土坑 (3)土壙墓 (4)落ち込み (5)柱穴	33
第Ⅴ章 小結	45
土器・石器観察表	47
観察表1 A区出土土器観察表	48
観察表2 B区出土土器観察表	53
観察表3 A・B区出土石器観察表	58
遺物実測図	59
図版	75
報告書抄録	96

挿 図 目 次

- 第1図 グリッド杭設置図
第2図 郡家町遺跡分布図<調査地関連区域>
第3図 調査位置図
第4図 久能寺狐塚遺跡調査区平面図
第5図 A調査区平面図
第6図 S I - 1 遺構図
第7図 S I - 2 遺構図
第8図 S I - 3・4・5・6 遺構図
第9図 S I - 7 遺構図
第10図 S I - 8 遺構図
第11図 S I - 9 遺構図
第12図 S I - 10 遺構図
第13図 S K - 1～5・7 遺構図
第14図 S K - 8～10・13・15・16 遺構図
第15図 S K - 17・18・20～23 遺構図
第16図 S K - 24～29 遺構図
第17図 S K - 6・11・12・14 遺構図
第18図 E - 9 G 遺物集中部平面図
第19図 F - 11 G 遺物集中部遺構図
第20図 G - 9 G 遺物集中部平面図
第21図 B調査区平面図
第22図 S I - 1 ピット図
第23図 S I - 2 平面図
第24図 S I - 3 推定住居跡
第25図 S I - 1 遺構図
第26図 S I - 2 遺構図
第27図 S I - 3 遺構図
第28図 S B - 1 遺構図
第29図 S B - 2 遺構図
第30図 S B - 3 遺構図
第31図 S B - 4 遺構図
第32図 S K - 1・2・5・7・12・18 遺構図
第33図 S K - 23・25・29・32・34 遺構図
第34図 S K - 6・8・9・11・13 遺構図
第35図 S K - 14～17・19～21 遺構図
第36図 S K - 26～28・30・31・35・36 遺構図
第37図 落ち込みNo1 遺構図
第38図 落ち込みNo2 遺構図
第39図 S K - 4・37 遺構図
第40図 S K - 22 遺構図
第41図 S K - 24 遺構図
第42図 S K - 33 遺構図
第43図 S K - 3 遺構図
第44図 Q - 4 G 遺物集中部平面図
第45図 A区出土遺物実測図 (1)
第46図 A区出土遺物実測図 (2)
第47図 A区出土遺物実測図 (3)
第48図 A区出土遺物実測図 (4)
第49図 A区出土遺物実測図 (5)
第50図 A区出土遺物実測図 (6)
第51図 B区出土遺物実測図 (1)
第52図 B区出土遺物実測図 (2)
第53図 B区出土遺物実測図 (3)
第54図 B区出土遺物実測図 (4)
第55図 B区出土遺物実測図 (5)
第56図 B区出土遺物実測図 (6)
第57図 B区出土遺物実測図 (7)
第58図 A区・B区出土石製品実測図 (1)
第59図 A区・B区出土石製品実測図 (2)

挿 表 目 次

- 表1 A区出土土器観察表
表2 B区出土土器観察表
表3 A・B区出土石器観察表

図 版 目 次

- | | |
|-------------------------------|--|
| 図版 1 調査後全景 (南東より) | 図版 9 (7) B区 S I - 2 完掘状況 |
| 図版 2 A区調査後全景 (南東より) | (8) ↗ S I - 3 全景 |
| 図版 3 B区調査後全景 (南より) | 図版10 (1) B区 S I - 3 東西sec東側断面 |
| 図版 4 (1) A区遺跡調査前全景 | (2) ↗ S I - 3 P 6 内遺物出土状況 |
| (2) A区表土除去後全景 | (3) ↗ S I - 3 完掘状況 |
| 図版 5 (1) A区 S I - 1 遺物出土状況 | (4) ↗ S B - 1 完掘状況 |
| (2) ↗ S I - 1 完掘状況 | (5) ↗ S B - 2 完掘状況 |
| (3) ↗ S I - 2 南北sec南側断面 | (6) ↗ S B - 3 完掘状況 |
| (4) ↗ S I - 2 東西sec西側断面 | (7) ↗ S K - 3 遺物出土状況 |
| (5) ↗ S I - 2 南東隅遺物出土状況 | (8) ↗ S K - 33 土層断面 |
| (6) ↗ S I - 2 遺物出土状況 | 図版11 (1) B区 S K - 33 遺物出土状況 |
| (7) ↗ S I - 2 完掘状況 | (2) ↗ S K - 1 完掘状況 |
| (8) ↗ S I - 3 完掘状況 | (3) ↗ S K - 2 完掘状況 |
| 図版 6 (1) A区 S I - 3・4・5 重複状況 | (4) ↗ S K - 7 完掘状況 |
| (2) ↗ S I - 5 完掘状況 | (5) ↗ S K - 23 完掘状況 |
| (3) ↗ S I - 6 完掘状況 | (6) ↗ S K - 25 完掘状況 |
| (4) ↗ S I - 7 北西土壤断面 | (7) ↗ S K - 29 完掘状況 |
| (5) ↗ S I - 7 北西土壤遺物出土状況 | (8) ↗ S K - 32 完掘状況 |
| (6) ↗ S I - 7 北西土壤遺物出土状況 | 図版12 A区出土遺物 S I - 1 (Po 1、3)
S I - 2 (Po 6~14) |
| (7) ↗ S I - 7 完掘状況 | 図版13 A区出土遺物 S I - 2 (Po 15~21)
S I - 3・4 (Po 22~29) |
| (8) ↗ S I - 8 全景 | 図版14 A区出土遺物 S I - 3・4 (Po 30・31)
S I - 5 (Po 32~35)、S I - 6 (Po 36)
S I - 7 (Po 37~41) |
| 図版 7 (1) A区 S I - 8 遺物出土状況 | 図版15 A区出土遺物 S I - 7 (Po 42)
S I - 8 (Po 45・46)、S K - 19 (Po 49・50)
遺構外 (Po 61~68) |
| (2) ↗ S I - 8 完掘状況 | 図版16 B区出土遺物 S I - 1 (Po 1~10・12) |
| (3) ↗ S I - 9 完掘状況 | 図版17 B区出土遺物 S I - 1 (Po 11・13・14)
S I - 3 (Po 17~20・24)、S K - 3 (Po
26~29) |
| (4) ↗ S I - 10 完掘状況 | 図版18 B区出土遺物 S K - 33 (Po 37~40)
おちこみ No 2 (Po 52)、P - 59 (Po 57)
遺構外 (Po 60~77) |
| (5) ↗ S K - 19 遺物出土状況 | 図版19 A区・B区出土石製品 |
| (6) ↗ E - 9 G 遺物出土状況 | |
| (7) ↗ G - 9 G 遺物出土状況 | |
| (8) ↗ F - 11 G 遺物出土状況 | |
| 図版 8 (1) B区遺跡調査前全景 | |
| (2) ↗ S I - 1 検出状況 | |
| 図版 9 (1) B区 S I - 1 東西sec東側断面 | |
| (2) ↗ S I - 1 東西sec西側断面 | |
| (3) ↗ S I - 1 南北sec北側断面 | |
| (4) ↗ S I - 1 西側土壤遺物出土状況 | |
| (5) ↗ S I - 1 完掘状況 | |
| (6) ↗ S I - 2 全景 | |

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

久能寺狐塚遺跡は、町の北側を西流する私都川と南側を西流する八東川の中間点に位置する郡家町大字久能寺字狐塚・谷田・稟塚・上沖代・中沖代に所在する。

県立八頭高等学校の東側、若桜鉄道とJR因美線両鉄道に挟まれた約30,000m²の田園地帯が本年度から来年度にかけて、八頭高等学校のサッカー場、ホッケー場として整備される事となった。

建設地は、郡家沢田山古墳群・御建山古墳群・久能寺古墳群・万代寺遺跡・八上郡都街跡等、まわりを遺跡群に囲まれた地帯であるため遺跡を確認する作業が必要となり、町教育委員会では、平成12年10月17日より、同年12月23日まで現地試掘調査を実施した。

その結果、住居跡2基、ピット状遺構2か所が確認され、遺物も数十個検出された。

この結果を受けて、県教育委員会総務課、文化課、郡家土木出張所、県立八頭高等学校、郡家町教育委員会と五者の協議がもたれ、郡家町教育委員会に記録保存のための事前発掘調査が委託された。

第2節 調査の経過と方法

調査位置は、グラウンド開発計画上削平される部分に限定し、住居跡の遺構が確認された予定地南西部分と、中央部南寄りの高台(若桜鉄道寄り)に決定した。そして、調査の都合上、南西部分をA調査区、中央部分をB調査区と呼称することとした。

面積はA調査区、約3,200m²、B調査区、約1,800m²、合計約5,000m²である。

A調査区・B調査区共に原形は畑・果樹園であり段差がはげしく面積も広範囲にわたるため、平成13年3月中旬ごろより1か月かかって、調査員立ち会いのもとに表土(耕作土)を重機で除去した。

表土除去後、K・Kフジテクノに次の項を委託した。

グリッド杭設置・基準点測量・遺構測量・平面図作成作業・遺構空中写真等。

グリッド杭設置後、3日間の準備期間を経て、4月23日より、調査員1名、調査補助員1名、作業員17名、合計19名の体制で発掘調査作業にはいった。

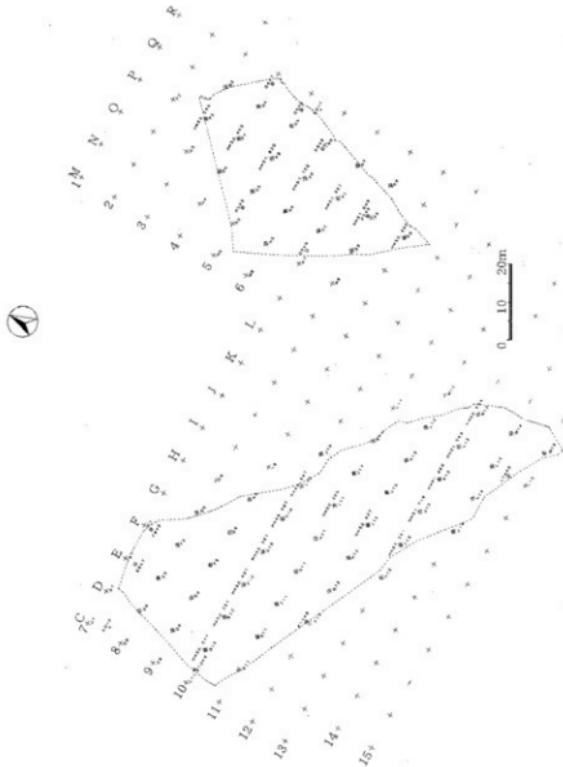
作業は、A調査区北東部分(D-7G)より開始、A調査区終了後B調査区は、P-3G・Q-3Gあたりより始め、10月末日をもって現地調査を終了した。

グリッドの呼称は、Y=-7800を南北基線としてAとし漸次東向きにB・C・・・とした。また、東西は、X=-66110を東西基線として1とし、漸次南向きに2・3・・・とした。そして、調査区全体を10m方眼に区割りし、グリッドの呼称はグリッド北西の杭番号で呼ぶ事とした。

(例、D-8G P-3G等)

11月より整理作業、報告書作成作業開始、平成14年3月末日をもって、久能寺狐塚遺跡発掘調査を終了した。

第1図 プリット査設置図



第3節 調査体制

調査の体制は次の通りである。

調査主体	郡家町教育委員会	教育長	田中省吾	
事務局	郡家町教育委員会	教育課長	衣笠泰博	
課長補佐 安藤博昭（文化財担当）				
調査指導	鳥取県教育委員会 文化課	埋蔵文化財センター		
調査担当	調査員 道谷 富士夫	調査補助員 中野修 次	（4月～10月）	
調査協力	大野昌之 林 賢 今嶋巳和子 平木葉子	大野美佐栄 安部孝子 井上松治 石破智恵子	福本司 和田政子 中島正太郎 矢部みどり	福本弘江 今嶋芳一 上田哲夫 衣笠久弘

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 歴史的環境

郡家町は、鳥取県東部の最大河川である千代川に流入する八東川と、私都川に挟まれた流域に所在し、北側は鳥取市と国府町、西側は河原町、南側は船岡町と八東町、東側は扇の山を県境として兵庫県美方町に接している。

郡家町の歴史的環境は、遺跡の密集度の高い地域として知られている。

縄文時代後期の遺跡として、町南部八東川下流域の北岸に位置する西御門遺跡、私都川と八東川に挟まれた段丘に立地する万代寺遺跡が存在している。

弥生時代の遺跡としては、万代寺遺跡の木棺墓群、下坂より出土した銅鐸の存在が知られているが、これらの遺跡は段丘上あるいは丘陵斜面に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地を生産基盤とした、農業集落の広がりを推察することができる。

古墳時代中期後半以降になると、私都川流域を中心として丘陵斜面に飛躍的に古墳の数が増加する。

久能寺の北方、今回の調査地である八頭高等学校の東側丘陵に埴輪を囲繞させた御建山古墳群、出土遺物から5世紀末葉から6世紀初頭ごろの盟主墳と考えられる稻荷古墳群、6世紀後期ごろ築造されたといわれる寺谷古墳・宮谷1号墳はいずれも前方後円墳であり、当時の盟主墳と考えられる。

またこの時期になると、私都川、中・下流域を望む丘陵斜面には、径10m前後の横穴式石室を主体とした群集墳、石棺を主体とした群集墳が造られ、これ等のもっとも密集した地域は、郡家町北東部の山田地域、北西部の靈石山山麓、南部の久能寺地域である。

これ等の地域は寺院跡や官衙跡、ならびにこれ等に関連の深い窓跡群なども見られる地域である。

靈石山山麓では、白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井庵寺の存在が知られており、万代寺遺跡では、八上郡衙跡と考えられている掘立柱建物跡を検出している。



第2図 郡家町遺跡分布図(調査地間違区域)

第2節 地理的環境

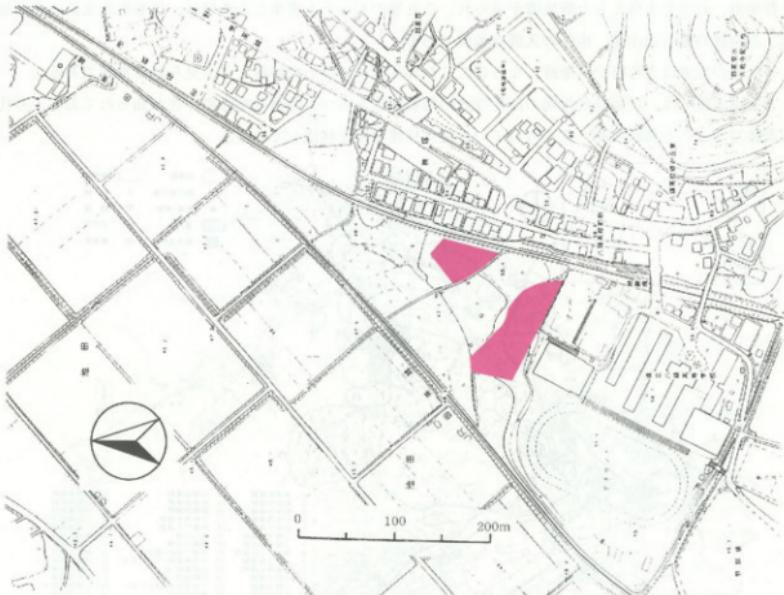
町内には二つの河川、私都川・八東川が流れ町内西部に広がる国中平野を形成している。私都川は、町東端に立地する扇ノ山に源を発し流長27km、町内を西流している八東川は若桜町に源をなして町南部を西流する。そして両河川は町内西端で合流しさらにその下流で千代川に合流し日本海に注いでいる。

今回の調査地はこの国中平野の東南端に位置し、JR郡家駅より西方約800m、郡家駅を基点として八頭高等学校の南側を通る若桜鉄道、北側を通るJR因美線に挟まれた郡家町久能寺字孤塚、練塹に所在し畑・果樹園に利用されていた約5000m²の土地である。また、沢田山古墳群からは北西に約400m、久能寺古墳群からは北へ600m、御建山古墳群からは北東へ約200m、郡衙跡・万代寺遺跡からは東へ700mと、四方を古墳群に囲まれ、御建山古墳群が存在する尾根がなだらかな裾野から平地に移る境界点であるとともに、大正末期の学校建築、昭和初期の鉄道建設により相当の土地変動が意図的に行なわれたところもある。

また、両側を鉄道が通っているため、畑・果樹園の世話等は時間的にも農作業の利用機器等でも相当困難を来たす土地であったと推察できる。

調査地はその中でも比較的高い土地であったが、A調査区とB調査区の中間に位置する字谷田地区は大変水捌けが悪く湿田であり、0.5m程度掘下げると水が湧出し、やや白味がかった粘土状の層に行きあたる。

「因幡誌」久能寺村の中に、「當所、樂焼土を出す。色赤白なり。往古は久能寺燒とて・・・」というのが見える。以前から湿田・粘土の地帯であったと思われる。



第3図 調査位置図

第三章 調査の概要

第1節 A調査区の概要

本調査区は、久能寺古墳群、御建山古墳群が所在する通称「アタゴ山」(147.2m)の尾根が北側にのび裾野でなだらかになり、平地に移る境界点であると共に、前述の通り周囲を遺跡に囲まれた土地でもある。

大正15年3月15日認可された「県立鳥取女子師範学校、併設高等女学校」の校舎、グラウンド建設、また昭和初期に建設された、国鉄因美線・若桜線・削平開発による畑つくり等々、相当の土地変動が意図的に行なわれたところでもある。

A調査区は八頭高等学校の東側に隣接し、校舎面より約4m~7mと段差のある低い畑地である。調査区はこの畑地の中で、南東から北西へ山35~40m、長さ約120mと長く伸び、標高は南東寄り52.25m、北西寄り49.48m、高低差約3m、なだらかに南東から北西へ傾斜を見せるところである。

A調査区には畑が9区画含まれており、耕作土は、ほとんど黒褐色土であった。

本調査区では、竪穴住居跡10基、土坑墓29基が検出されており、柱穴跡は最初248穴を教えたが、その中には、楓とか肥料穴らしきものもあり、最終的に180穴に限定した。

遺構は調査地の半分、北西方向に集中しており、南東部分の半分は、北側の低い部分に数点見られるようである。

竪穴住居跡は、最北西にSI-1、その南にSI-2、SI-1の東隣りにSI-3・SI-4・SI-5の複合住居跡が見られ、作られた順位は、5→4→3ではないかと考えられる。SI-5の北側に、5の1部分を取り込んだSI-6が見られ、少しあなれでSI-7が作られている。SI-7は方形であるが西角に径2mの円形の穴が周溝に接して掘られており、遺物も多数検出されているので土壙墓の可能性を伺わせるものである。

SI-5の真南、2mに、SI-8を検出している。試掘時掘ったトレンチ12の位置である。ここではA調査区で唯一、ほとんど原型に近い破損度の少ない土師器、KA-045(壺)、KA-046(瓶)を検出している。

SI-8から3m南にSI-9を、SI-9からやや西寄りに約6m、SI-10を検出している。SI-10のあたりは調査区中では一番低地であり、降雨があると高台の雨水・八頭高のグラウンドの雨水等々が集まり浸透しにくい土層と相まって、調査には困難を来たした。

土坑墓は29基検出されている。

そのうち、SK-15、SK-19、SK-26は土壙墓ではないかと推察され、SK-15をSX-1に、SK-26をSX-2に、SK-19をSX-3に変更した。

また落し穴ではないかと推察される土坑が4基検出されている。即ち、SK-6、SK-11、SK-12、SK-14である。南東部分の低地に見られ、いずれも穴の中央部分に一段と深い径0.25mほどの穴を穿っている。この穴に先を尖らせた槍状の木材を立て、動物を捕っていたと考えられる。中心に木材を固定するための穴がこれではないかと思われる。

ピットは180穴検出されている。

然し、掘立柱建物跡とか樹跡と考えられるピットを想定し検討を加えたが、検出することはできなかつた。いずれも、まとまりのないピットであった。

住居跡内のピットはこの数には含まれていない。

第2節 B調査区の概要

B調査区は久能寺字練塚に所在し、A調査区より北東方向に約50m、若桜鉄道に沿って設定された、約2000m²の調査区である。

久能寺部落の裏山「アタゴリ」から北方に伸びる尾根は、3本あると考えられる。1本は現八頭高等学校的校地がある最西寄りの尾根、A調査区はその尾根に所属しており、次に谷をへだててB調査区の高台がみられる中の尾根、また谷があり、建設されるグラウンドの最東部のあたりが3本目の尾根とおもわれ、北側から見ると西から東にかけて、尾根(A調査区がある)・谷・尾根(B調査区がある)・谷・尾根、となり、調査区はその尾根が平地に移る境界部分にあるようだ。

B調査区は、真中の尾根に属しており、両側は谷部、南西からなだらかな傾斜で高台に至り、北側は次の谷へ向かってやや急斜面となり下っている。

この調査区-帯の以前は畑であったと思われる最高部の畑には栗が植わっていたと考えられる。それもかなり大木であった事が残っていた幹・根から推察される。

ここでは、竪穴住居跡3基、土坑墓38基、掘立柱建物跡3棟(平面図より、S I-2の北側のピットから考えられるものを入れると4棟)、ピット120穴、(実際には約200穴ほどあったが種々検討を加え、120穴とした)、落ち込み2を検出した。特にこの調査区では落し穴と推測される土坑が12基あったことである。

竪穴住居跡は高台に2棟、中に1棟検出されS I-1は住居跡にかなりの大きさをもつ土坑が4基掘られている。また、S I-3は、畑を開拓するため削平された畑と畑の境界点にあり、東側半分しか残っていないかった。

土坑墓は37基検出されている。そのうち穴の中心に穴を穿った落し穴と思われる土坑(S K-1・2・4・5・7・12・18・23・25・29・32・34)を12基数えることができる。

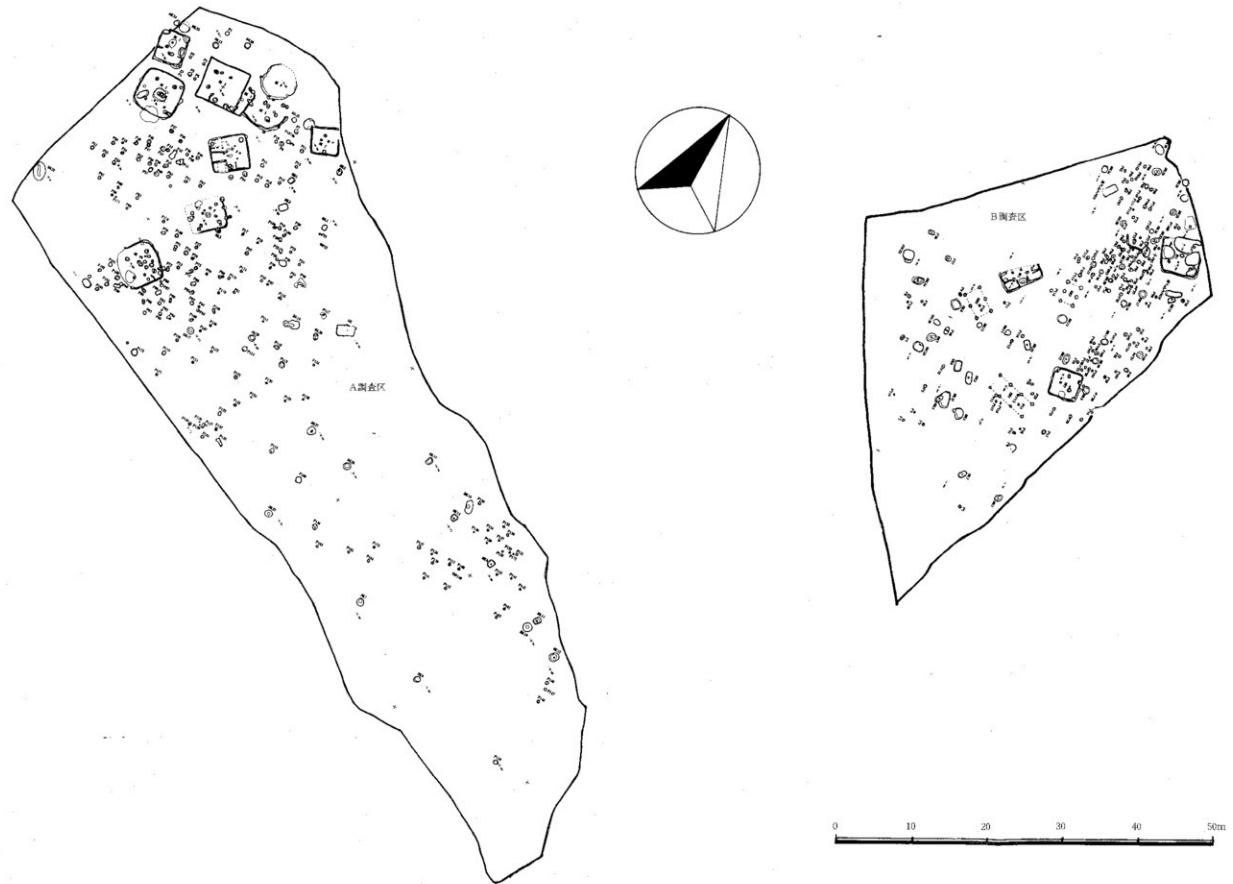
掘立柱建物跡は4棟検出することができた。4棟とも規模は小さなものであったようだ。

ピットも200をこえる数を検出しだか深さ10cm程度のピットもあり、また栗畠等であった関係で整理をし、120穴にしほった。

落ち込みは2つ検出している。

B調査区を見るに、遺構は高台のあたりに集中しており南のなだらかな谷に近いあたりに落し穴が多く見受けられた。

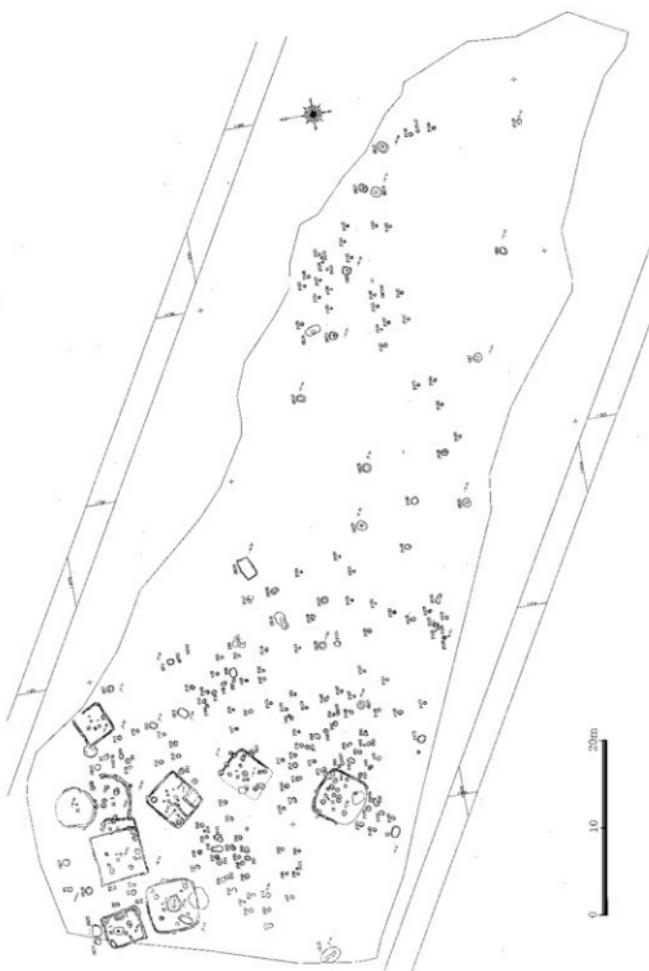
昭和初期に若桜鉄道の前身、国鉄若桜線が施設されたのだが、鉄道からかけて現在の練塚の住宅街のあたり一帯に、弥生後期ごろから古墳時代にかけてこのあたりに生活していた人々の住居があり、少し奥部の沢田山古墳群・御建山古墳群・久能寺古墳群等とあわせて、当時この辺りには、生活基盤のしっかりした古代人が住んでいたと推測される。



第4図 久能寺狐塚遺跡調査区平面図

第IV章 遺構と遺物

第1節 A調査区の遺構と遺物



第5図 A調査区平面図

1. 積穴住居跡

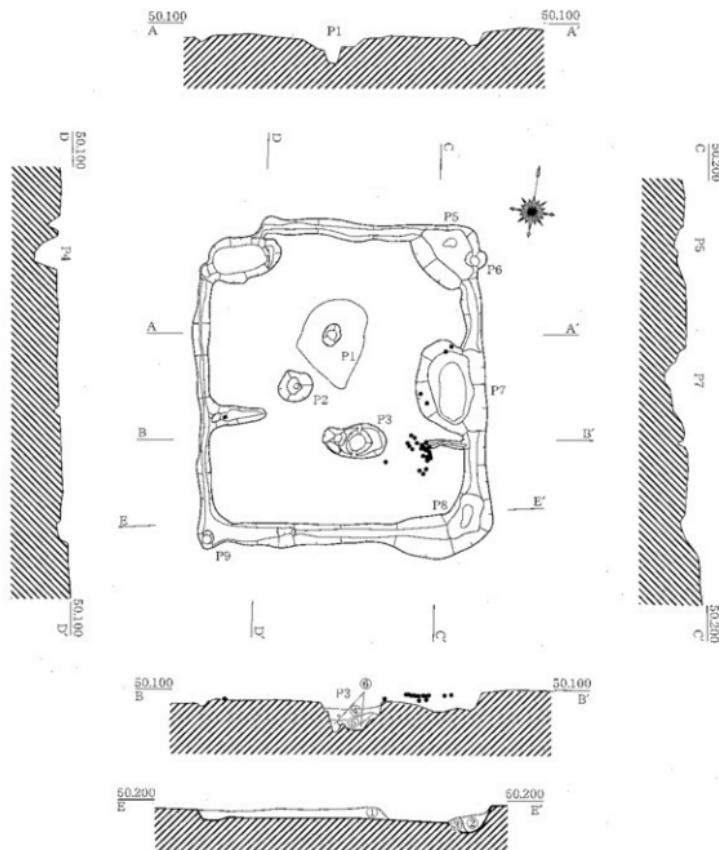
(1) S I - 1 (第6図)

D-7・8Gの境界西側に検出された住居跡である。

長径4.4m、短径3.8m、ほぼ正方形に近い面積約17m²の住居跡である。周囲の地山面より約0.2m掘込まれて床面が造られ、周溝は完全に残っており、床面より0.05~0.1m内外掘込まれている。また、深さ0.4mという土坑も見られる。

出土遺物は土器器数点が取上げられているが赤彩の土器片も見受けられ、主として、壺・壺・楕円形であつた。

検出された遺物から、古墳中期ごろの住居跡と考えられる。



- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|------|---|----|---|-----|---|----------|------|---|----|---|-----|---|---|---|----|
| ①黒褐色3/2 | ローム粒 | 少 | 粘性 | 小 | しまり | 小 | ④黒褐色3/2 | ローム粒 | 中 | 粘性 | 中 | しまり | 中 | 横 | 少 | 0 |
| ②黒褐色3/3 | " | 少 | " | 中 | " | 中 | ⑤黒 | 色2/1 | " | 中 | " | 大 | " | 中 | " | 中 |
| ③にじ褐色4/3 | " | 多 | " | 大 | " | 中 | ⑥灰黃褐色3/2 | " | 多 | " | 大 | " | 大 | " | 少 | 2m |

第6図 S I - 1 造構図

(2) S I - 2 (第7図)

D-8 G西側に検出された住居跡である。

長径・短径共に約6m、床面積約36m²、周囲地山面より約0.2m低い床面であり、周溝、中心の柱跡、四方の柱跡が鮮明に残存している。

中心のPは床面より約0.55m、四方のPは床面より約0.3~0.6m内外の深さである。また四隅は半円状に丸く作られている。

出土遺物は約10個体に及んでいるが、その中で土師器の壺・甕の口縁部分がある程度原形を残して検出されている。また、高杯の裾部が2個体検出されているが、この裾部に径10mm~13mmぐらいの穴が穿かれており、完全な形の場合、3~4個穿かれていたと考えられる。出土遺物番号14は、壺の一部分と推察される。出土遺物より、弥生後期の住居跡と推測される。

(3) S I - 3・S I - 4・S I - 5 (第8図)

平面図でも分るように複雑になっている住居跡である。

図面上で推察するに、S I - 5の住居が何等かの理由で不要になりその一部分を利用してS I - 4が造られ、後、S I - 4の約3/4を使ってS I - 3が造られたと考えられる。

S I - 3はS I - 1より3m東方にあり、四隅の角はほとんど直角に近く、一辺約5.6m内外では正方形に近い住居跡である。

南側部分の周溝はS I - 4の周溝と重複しており(約3.5m)、S I - 4の周溝の一部分が約1m、S I - 3の床面に残存している。

遺構は、土坑状のもの、ピット状のもの等、7基が検出されている。深さは床面から約0.4~0.5mであり、径は最大のもので約0.7mである。

出土遺物はS I - 3のものかS I - 4のものか不明であるがかなり検出されており、代表的なものとしては、遺物NO-22~NO-31である。甕、壺、高杯の裾部・中央部・蓋のつまみ、等であるが、高杯の杯部の径が0.24mという大型の杯をもったものも見受けられる。

S I - 4はS I - 3にほとんど包含されているが、S I - 5の周溝と重複した周溝が残存している。周溝上に残った土坑等も見受けられる。

周溝の深さは、S I - 5・S I - 4の床面よりやや下がっている。

S I - 5はS I - 4・S I - 3に先んじて一番最初に作られた住居だと考えられる。面積は約13.5m²である。

遺物は土師器片が数片であるが、他に類を見ない大型の個体が1個検出されている。移動式の甕の一部分と推測される。(図版14-Po32)

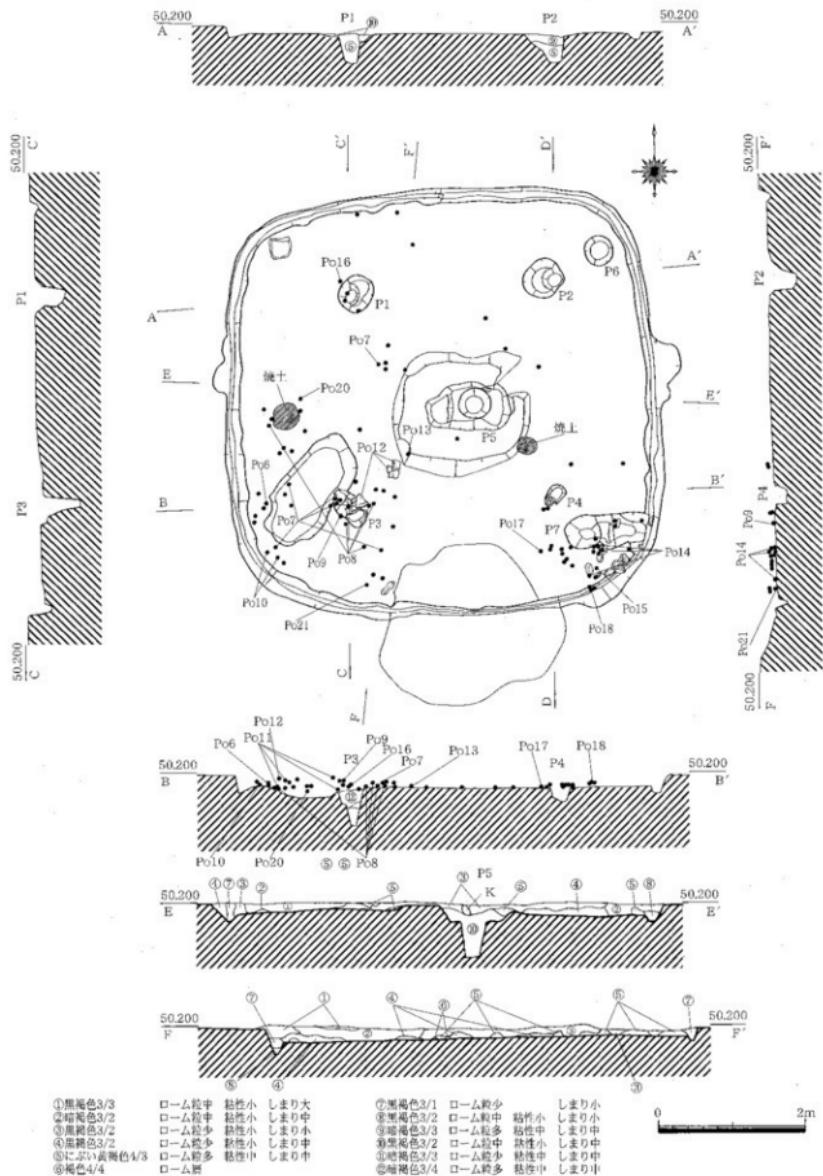
住居構築時期は、S I - 3・S I - 4・S I - 5の三者共に古墳時代中期ごろのものと推測される。

(4) S I - 6 (第8図)

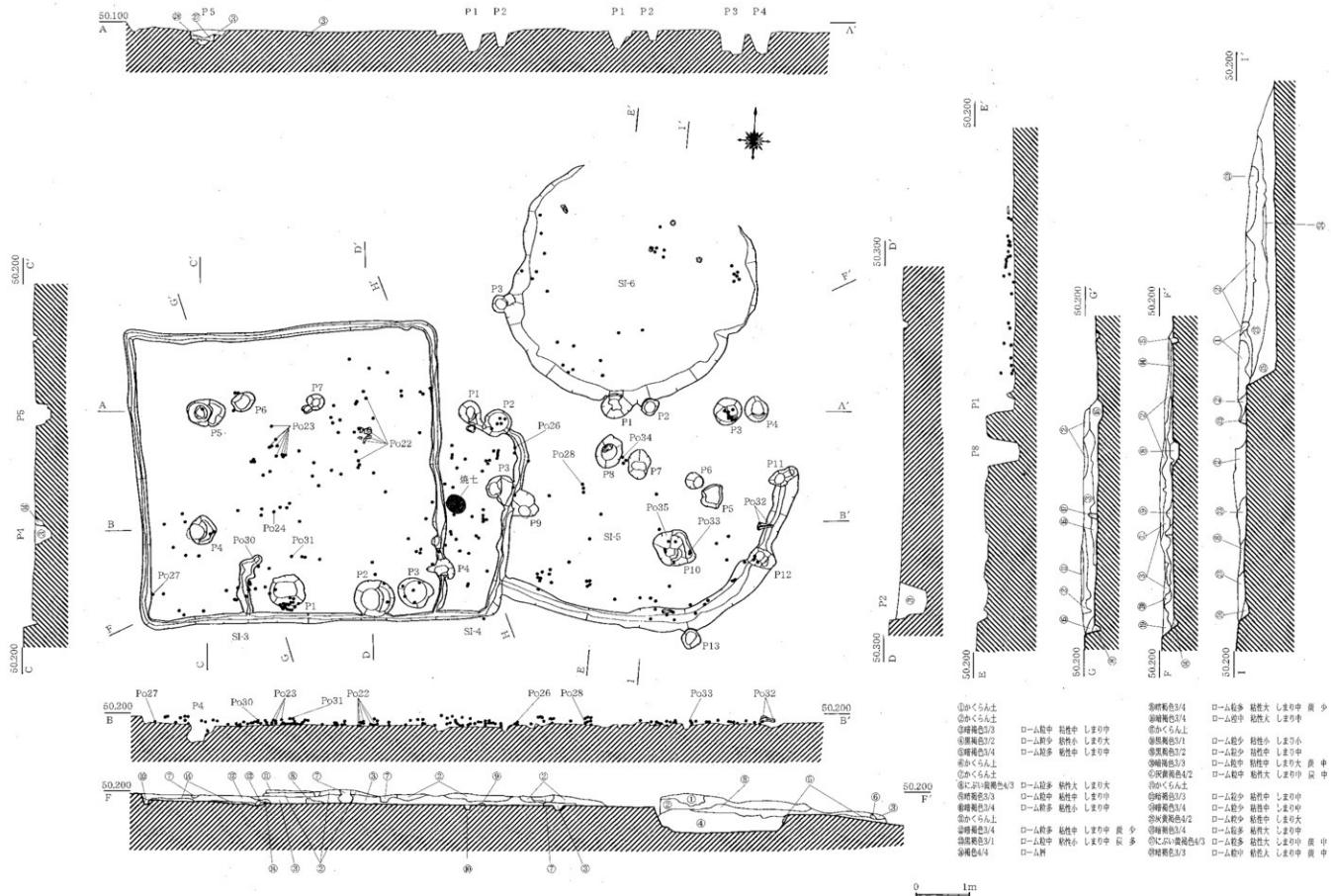
S I - 5の北側に検出されたS I - 5より約0.5mさがった径4.3m程度の円型住居跡である。

土坑、ピットもなく、遺物としては石材が数個と、土器類が数点採取されている。

構築時期は、古墳中期ごろと推測される。



第7図 SI-2構造図



第8図 S1-3・4・5・6遷移図

(5) S I - 7 (第9図)

F - 7・8 G にまたがり S I - 5 の東に検出された 1 辺3.5m約12m²の正方形に近い住居跡である。この住居跡は他と少し異なっていて、西隅に径1.5mを測る土壙墓が接していることである。住居と土壙とは別々の造構と考えるが、土層から考察すると土壙墓が初めて、その後住居が造られたと推測される。住居跡内にはピットを 5 基検出している。土器も数点あったが土師器片であった。
挿図・図版に載せている、N037~42はいずれも土壙墓から検出したものである。
土壙墓の形態は図版 6-(4)(5)に見られる通りであり、深さは住居跡の床面より0.2m程度下っている。遺物は壺の破片が多数であったが、中には煤のかかっている壺の一部分もあった。
時代は土壙墓が弥生後期であり、住居は古墳中期ごろと考えられる。

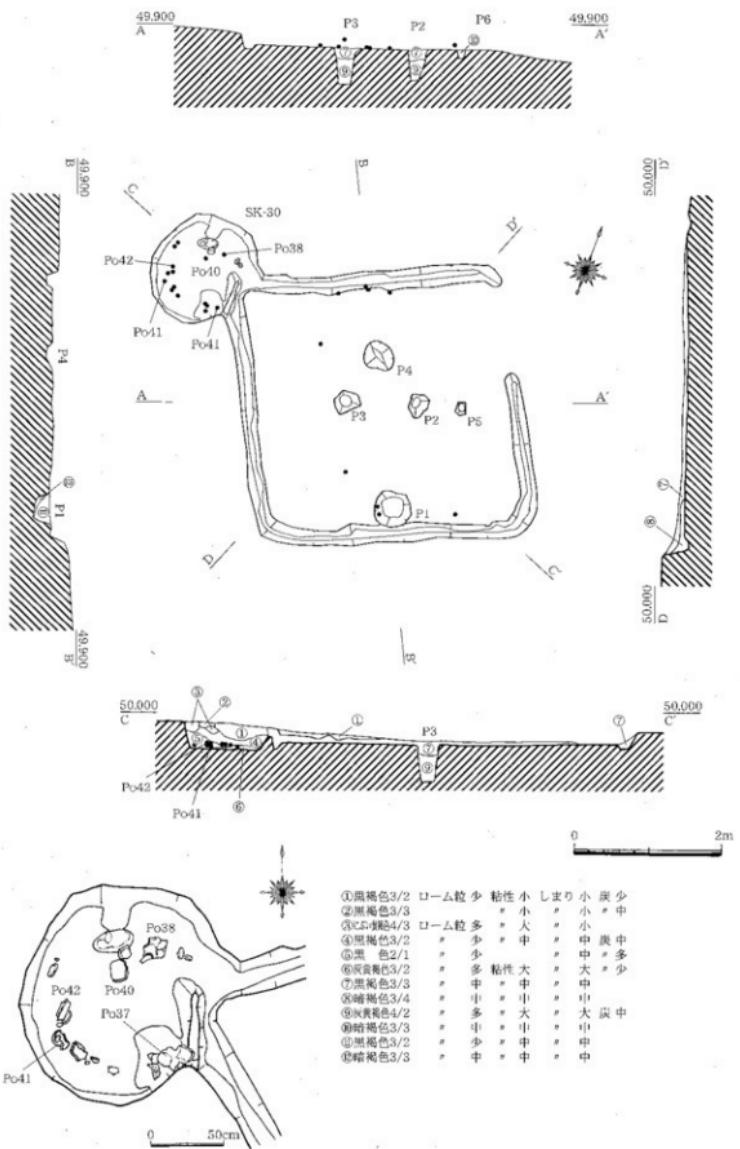
(6) S I - 8 (第10図)

S I - 4・5 の南 2 m、E - 8 G の E - 9 G 寄りに検出された住居跡である。試掘段階では T - 12 の位置に当り、土器片を多数検出したところでもある。

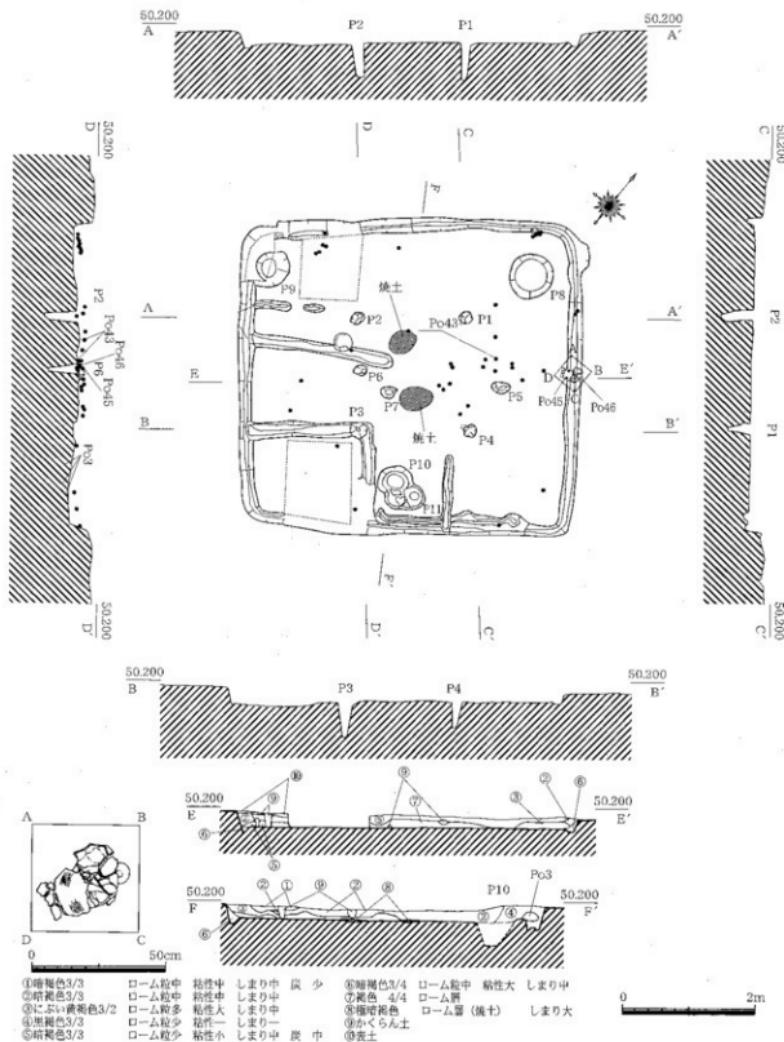
規模は、5×4.5m。22.5m²。床面は地山面より0.3~0.4m下っており周溝も鮮明に残存している。床内には径約0.5mと0.4mの焼土痕が見られ南側壁の中間あたりでほぼ完全な壺(第49-Po45図版15-Po45図)完全な壺(第50-Po46図版15-Po46図)が検出されている。この遺物は同一位置から検出されているため、対として使用した遺物と考えてもよいであろう。

又周溝からかなり複雑に内部に溝がはいり込んでいるのも一つの特徴である。床面には、ピット 8 基、土坑 3 基が残存している。

住居の形態・出土遺物等から古墳中期ごろの住居跡と推測される。



第9図 SI-7構造図



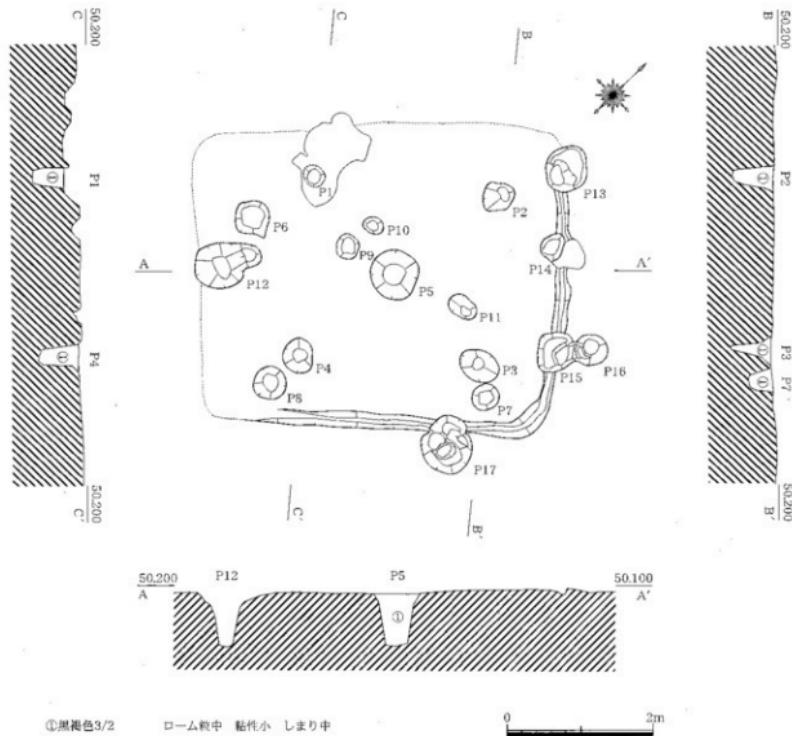
第10図 S I-8 遺構図

(7) S I - 9 (第11図)

E - 9 G東側に位置しており、西半分が欠けた住居跡である。推定では4m四方あったと思われる。床面と周囲の地山面との差があまりなく東側では地山に周溝の痕跡が見られる程度であり、西半分は削平によって消滅している。

ピット、土杭も数基検出され住居を支えた4本のピット、中心の柱のピットも残存している。

遺物の検出がなかつたためいつの時期か不明であるが、総合的に弥生後期ではないかと考えられる。



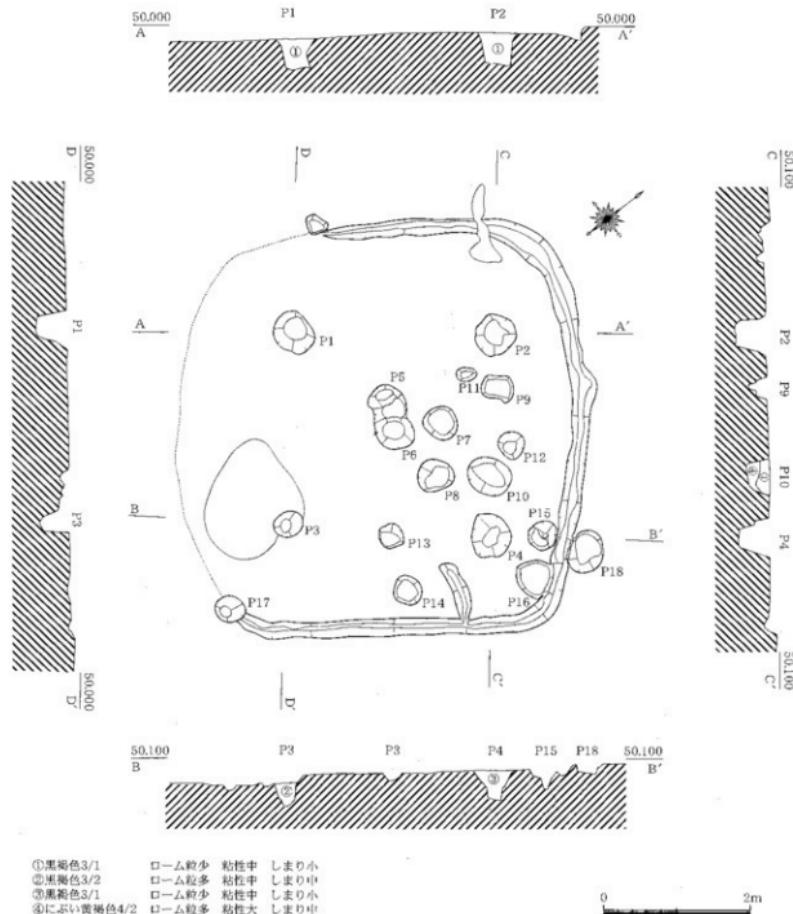
第11図 S I - 9 遺構図

(8) S I - 10 (第12図)

E-10Gに検出された住居跡である。

S I - 10は地山面と床面の差がほとんどなく、わずかに落込んだ周溝が見えるのみである。

中心の柱跡、四隅の柱跡等総合的に考察して弥生後期ごろの住居跡と推測される。



第12図 S I - 10構造図

2. 土坑

(1) 土壙墓(SK-1・15・19・26)

① SX-1 (SK-1)

SK-1は土壙墓SX-1である。

長径0.9m、短径0.7m、深さ0.55mの規模であり、土器を検出している。

土器は、土器番号47で見られるように、壺の口縁部であり、良く整った形をしている。

② SX-2 (SK-15)

SK-15は土壙墓SX-2である。

長径0.9m、短径0.8m、深さ1.1mを測る。

遺物は土器片が数点であった。

③ SX-3 (SK-19)

SK-19は土壙墓SX-3である。

長径2.4m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。

落込みの様相を呈していたが多数の土器、石材等の遺物も見られ、土壙墓と考えられる。

土器実測図第50-Po49・Po50がSX-3(SK-19)で出土した遺物である。

④ SX-4 (SK-26)

SK-26は土壙墓SX-4である。

A調査区の最北に位置し、隣には、SX-2とかピットN01が並列しており、遺物も検出されたが取上げるほどのものでなかった。

規模は長径0.9m、短径0.7m、深さ約0.6mである。

(2) 土坑

SK-2・3・4・5・7・8・9・10・13・16・17・18・20・21・22・23・24・25・27・28・29と21基を土坑とした。

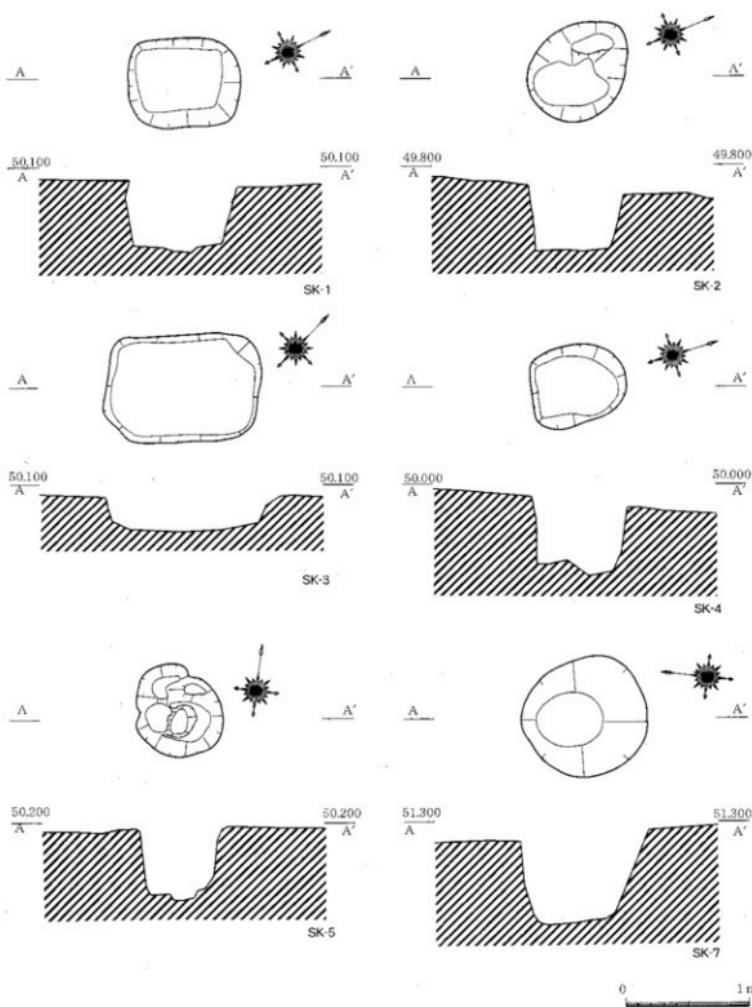
この中には柵柵区が果樹園だったため、根がはいっていた可能性がある土坑も含んでいるかも知れないが、いずれの土坑からも遺物は検出されていない。

長径、短径、深さ等、土坑の規模は次の表の通りである。

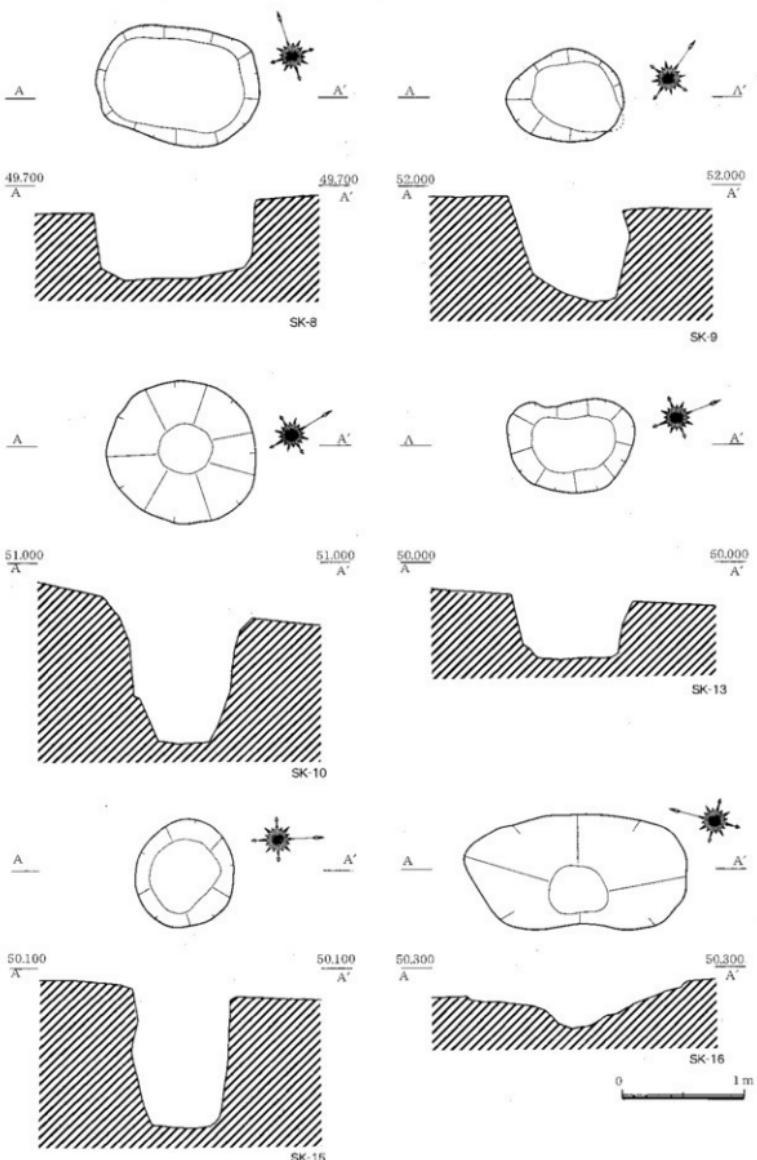
(単位はm)

ピットN0	2	3	4	5	7	8	9	10	13	16	17	18	20	21
長径	0.9	1.25	0.75	0.8	1.0	1.3	0.95	1.2	1.0	1.8	1.05	2.15	0.95	1.0
短径	0.7	0.85	0.6	0.7	1.0	0.95	0.75	1.15	0.7	0.9	0.85	1.1	0.5	0.9
深さ	0.5	0.3	0.6	0.55	0.7	0.6	0.75	1.1	0.5	0.3	0.75	0.2	0.4 0.3	1.2

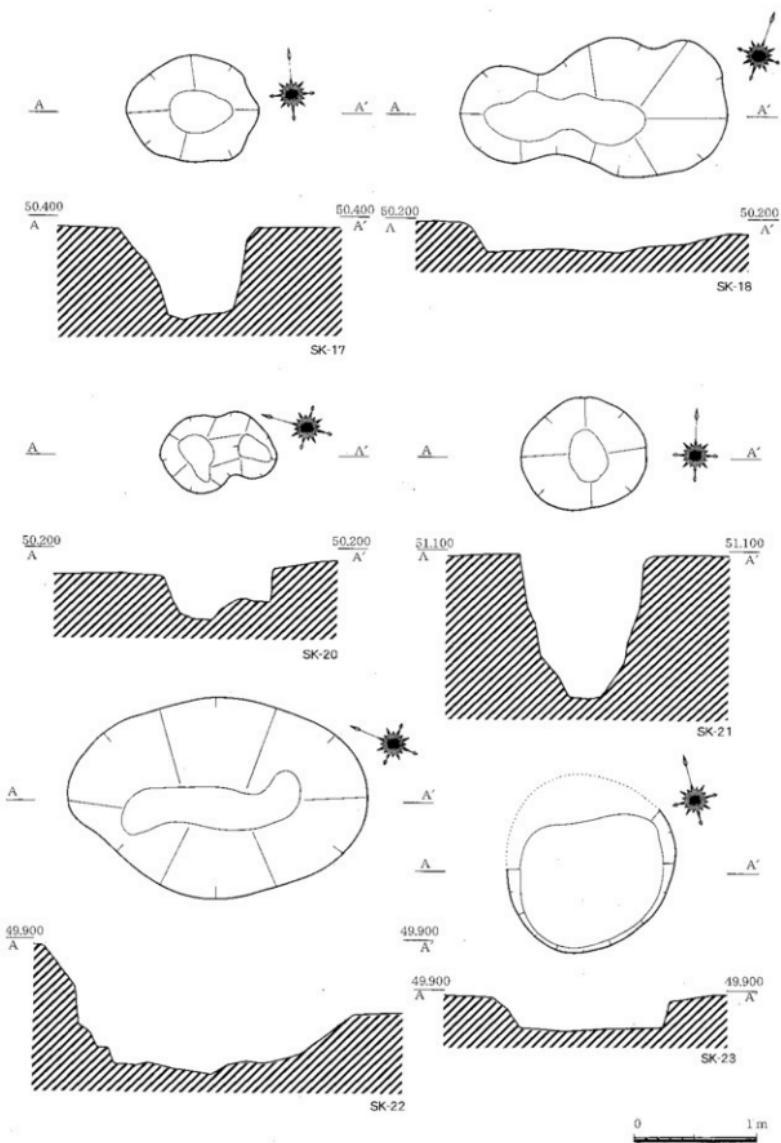
ピットN0	22	23	24	25	27	28	29
長径	2.45	1.4	0.8	0.7	1.15	1.05	0.9
短径	1.65	1.4	0.65	0.65	0.9	0.95	0.9
深さ	0.8	0.3	0.6	0.6	0.75	0.55	0.7



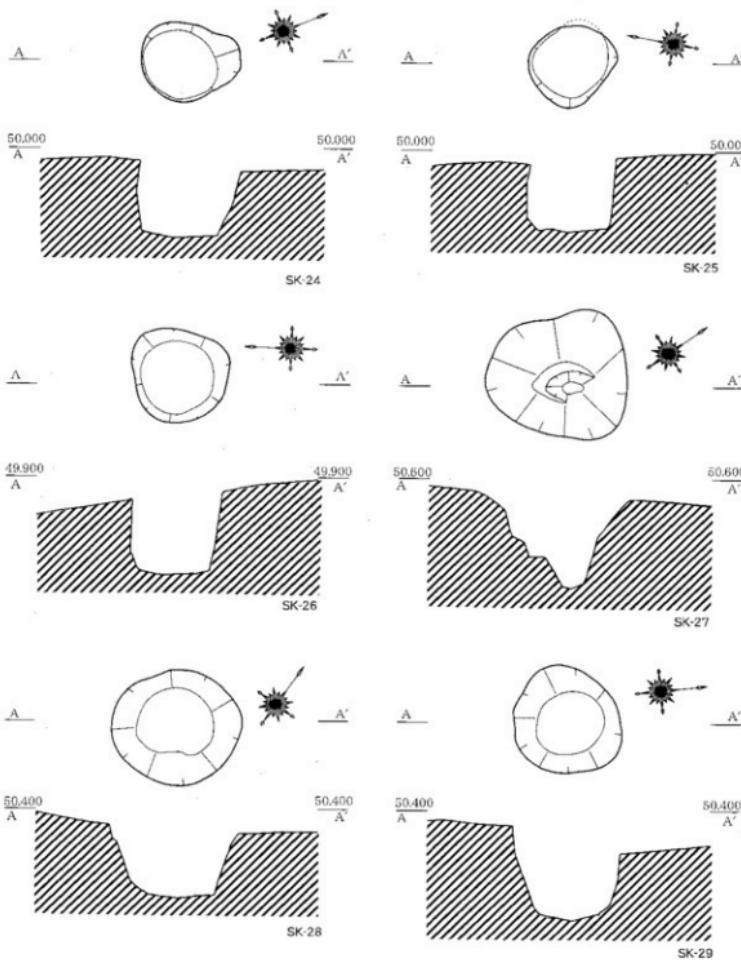
第13図 SK-1～5・7遺構図



第14図 SK-8~10・13・15・16遺構図



第15図 SK-17・18・20～23遺構図



0 1 m

第16図 SK-24~29構造図

(3) 落し穴(SK-6・11・12・14)

土坑の内、中心部に丸太を埋めたと思われる穴を穿った土坑が4基検出されている。遺物はなかった。

① SK-6

長径1m、短径0.85m、穴の底までの深さ0.65mである。

② SK-11

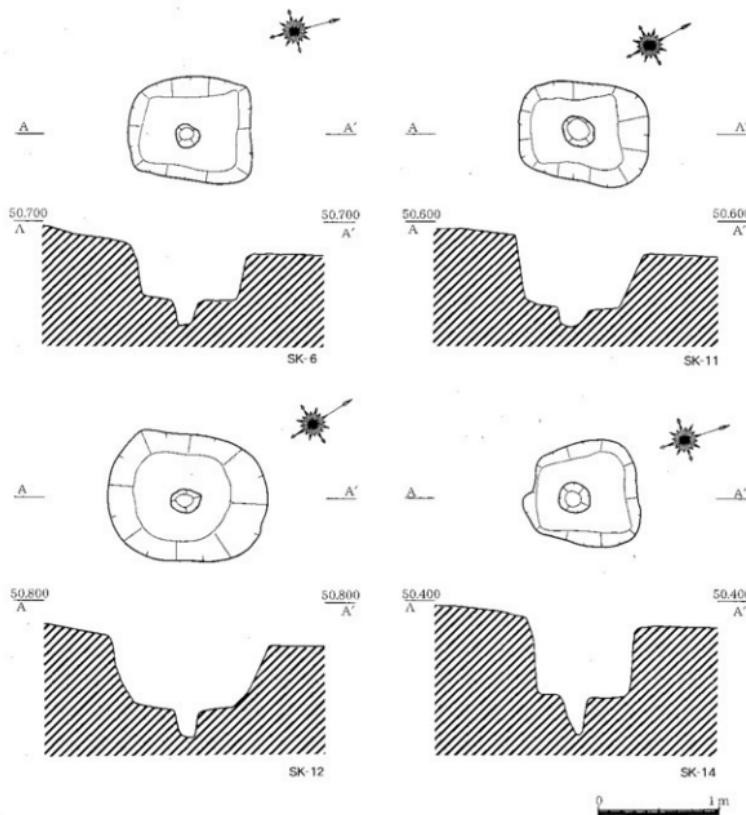
長径1.05m、短径0.8m、穴の底までの深さ0.7mである。

③ SK-12

長径1.3m、短径1m、穴の底までの深さ0.8mである。

④ SK-14

長径0.9m、短径0.8m、穴の底までの深さ1mである。



第17図 SK-6・11・12・14横構図

3. 柱穴

完掘の段階ではピット数は250余を数えたが、種々検討を加え、最終的には180とした。その内遺物を検出したピットは、4・9・23・24・45・55・63・67・70・72・76・77・79・80・81・85・86・89・95・100・101・102・111・118・121・131・133・149・167・168・169・170・171・172・173・174と36のピットである。

出土した遺物はほとんどが土師器片であったが、そのうち形の整ったものは挿図・図版として集録した。

P-80からは一括取上げで瓶の一部分、鉢の底部、鉢の上部分が検出されている。このピットは、2つのピットが1つにまとまったものであり、長径0.75m、短径0.4m、深さ0.4mである。

P-100からは、甕か壺の一部分が検出されている。土師器であり、表面に媒が付着している。ピットの規模は、長径0.65m、短径0.6m、深さ0.4mである。

P-121からは、甕の口縁部分が検出されている。口縁には3本の手書き沈線が描かれている。土師器であり、ピットの規模は、長径0.5m、短径0.45m、深さ0.45mである。

P-167の遺物は、一括取上げであり、実測した遺物は2個体であった。いずれも甕の一部分であり、計測N051には媒が付着している。ピットの規模は、長径1.0m、短径0.35m、深さ約0.5mである。

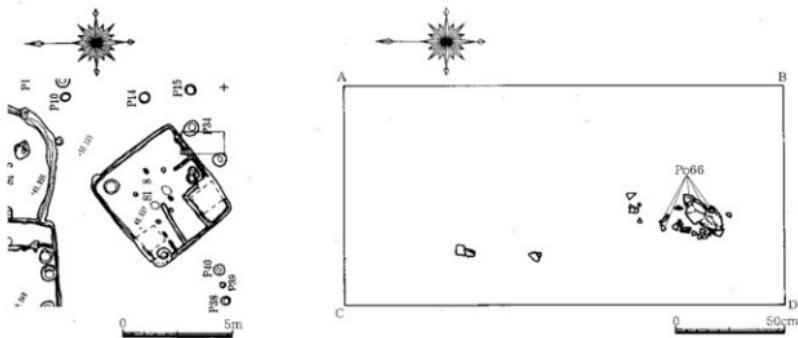
P-169からは甕の口縁部分が検出されている。口縁の外側には、10数本、手書き沈線が描かれている。ピットの規模は、長径0.6m、短径0.5m、深さ約0.26mである。

4. 石材 (石器)

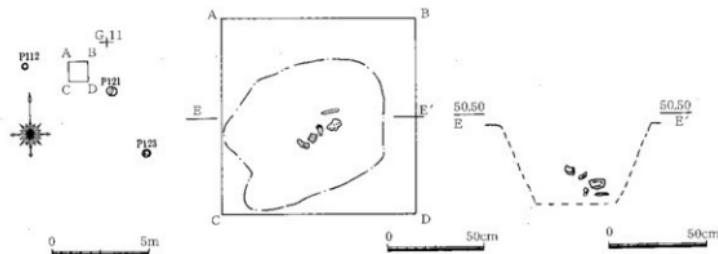
石材は数個検出されている。

中でも、F-11Gの遺物集中部より検出された、スクレイバー(第59図S9 図版19-S-09)は、頁岩であり、色調は、5 Y-5/2 灰オリーブに近く、石包丁の形をしているが、物をはがす作業とか打器として用いたと推察される。また、この石器の製作過程が山陰には見られない瀬戸内地方の手法であるという事で、どんな経路で郡家地方にもたらされたものか今後の課題である。

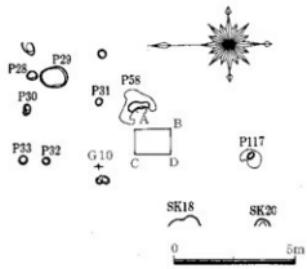
SK-19より検出された石材は打器として使用された形跡があり、橢円形をした石材の片方が扁平になっている。また、同じ様な形をした橢円の石が、SI-2・3・4・8、SK-19からも検出されている。



第18図 E-9 G 遺物集中部平面図

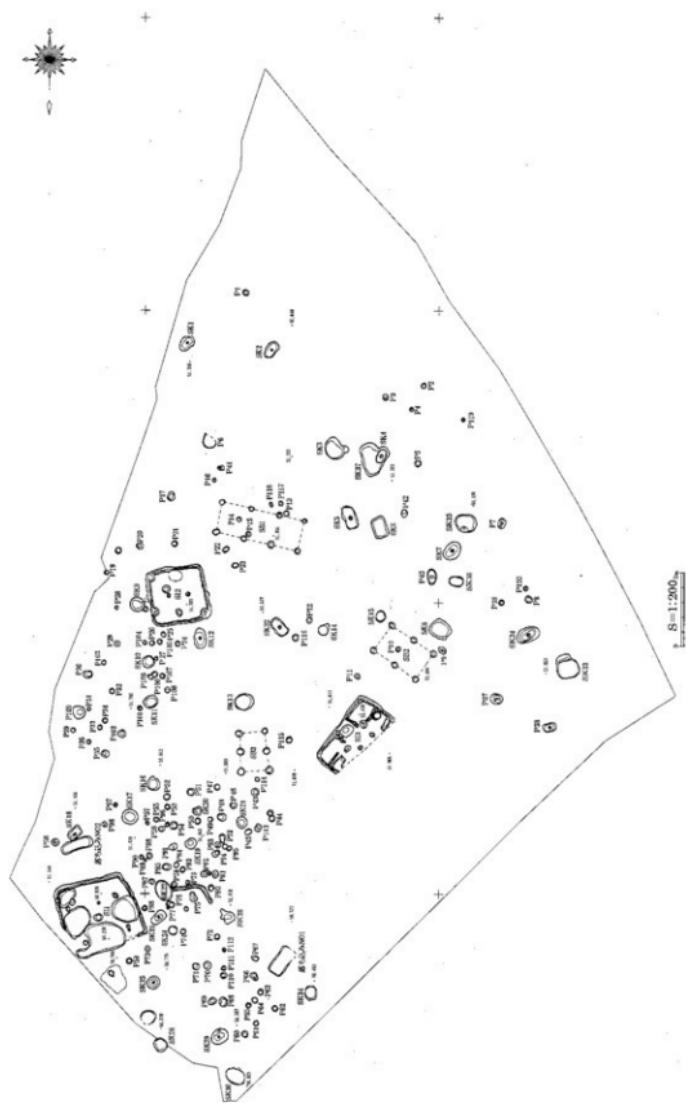


第19図 F-11 G 遺物集中部造構図



第20図 G-9 G 遺物集中部平面図

第2節 B調査区の遺構と遺物



第21図 B調査区平面図

1. 壁穴住居跡

(1) SI-1

Q-3・Q-4Gに検出された住居跡である。(第21図)

長短径共に約5mの正方形状であり、面積は約25m²である。周溝は削平により西側部分が失われているが、他は大体判別できる程度残存している。

柱穴も、中心のピット四隅のピット(第22図)と推察されるものも検出されている。

また、A・B・C・Dの4個の土抗状の落込みも住居跡内に見られる。これは住居が消滅した後で掘られたものと考えられ、Aは長径1.5m、短径1m、深さ0.25m。Bは長径2.3m、短径1.5m、深さ約0.3m。Cは長径2.6m、短径1.9m、深さは床面より約0.5mである。Dは長径1.8m、短径1.7m、深さ0.6mである。

遺物はかなり検出されている。

園版、B区1~15が検出されたものの中でも顕著なものであるが、N0-1の器台は、弥生時代後期後葉ごろのものではないかと推測される。上部径は20.4cm、高さ17.1cmとかなり大型の器台である。

N0-2は壺の口縁部で煤が付着している。N0-3の壺の口縁部、N0-4は器台の一部分であり、幾本かの沈線が明瞭に見られる遺物である。N0-5~N0-7は壺の口縁部、N0-8は壺、N0-9・10・11は口縁部の巾が広く、N0-12・13・14は巾が狭い。N0-15は壺か壺の底の部分であり、煤が付着している。

構築時期は、出土遺物等から弥生時代後期中葉ごろと推察される。

(2) SI-2

B調査区、中央部北側に位置した住居跡である。(第21図)

一辺約4m、ほぼ正方形に近く、周溝もしっかりと残存している。

住居のピットと断定する遺構は確認できなかったが、南西隅のピットから北に伸びる2基のピットと、住居跡西側の、SK-12、P-24、P-26との組合せで、掘立柱建物跡が考えられ、第7図赤印刷のようになり、平面図上よりの追加、SB-4とした。(第23図)

(3) SI-3

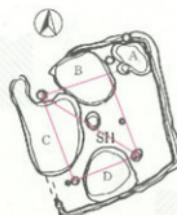
B調査区中央部に検出された住居跡である。(第21図)

この調査区は、久能寺部落裏山の北へ伸びる尾根が、沢田山古墳群、御建山古墳群を経て、裾部が平地に移る境界点であり、昔の人々が田畠の開発のため、削平に削平を重ねたと考えられる。

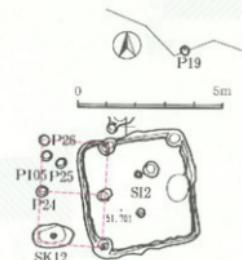
SI-3の東北部分は上段の畠部分であり、半分の南西部分は削平によって失なわれている。

SI-3は、半分しか現存していないが、A調査区のSI-8とよく似た形状である。(周溝とかわらない溝が内部に入り込んでいる。)

また、平面図から失われた部分を想定して線描すると、右の様な住居跡が考えられる。(第24図)



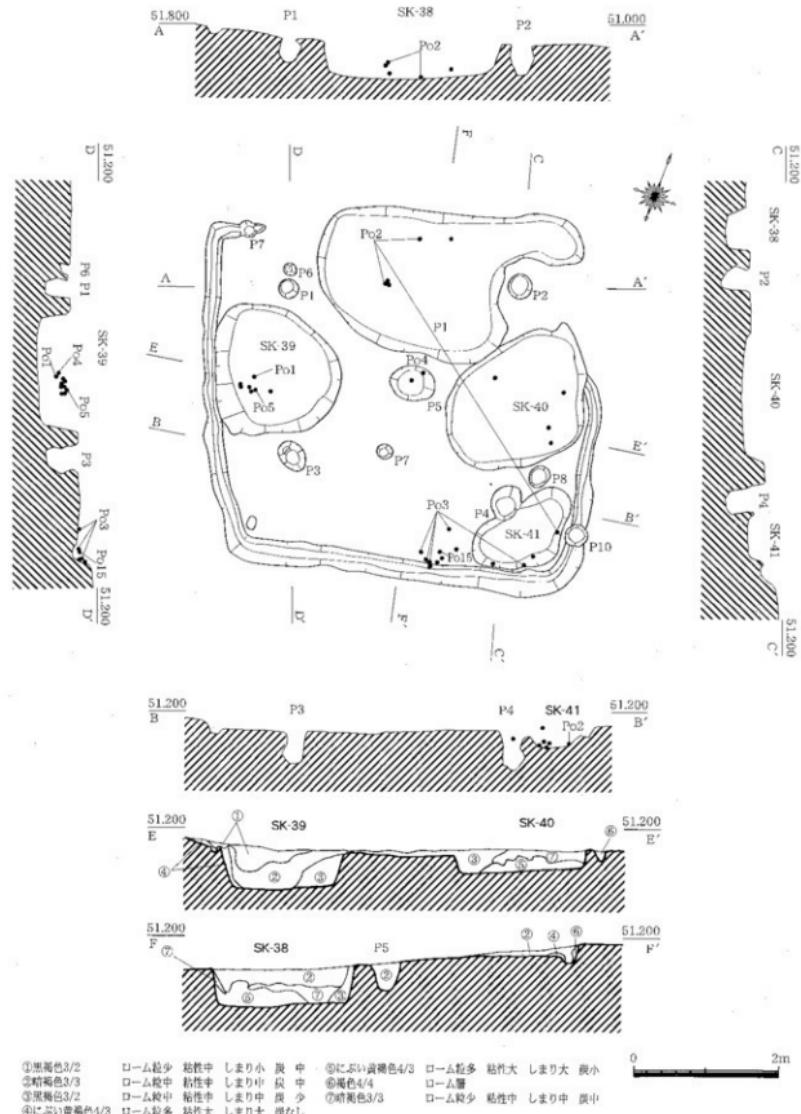
第22図 SI-1 ピット図



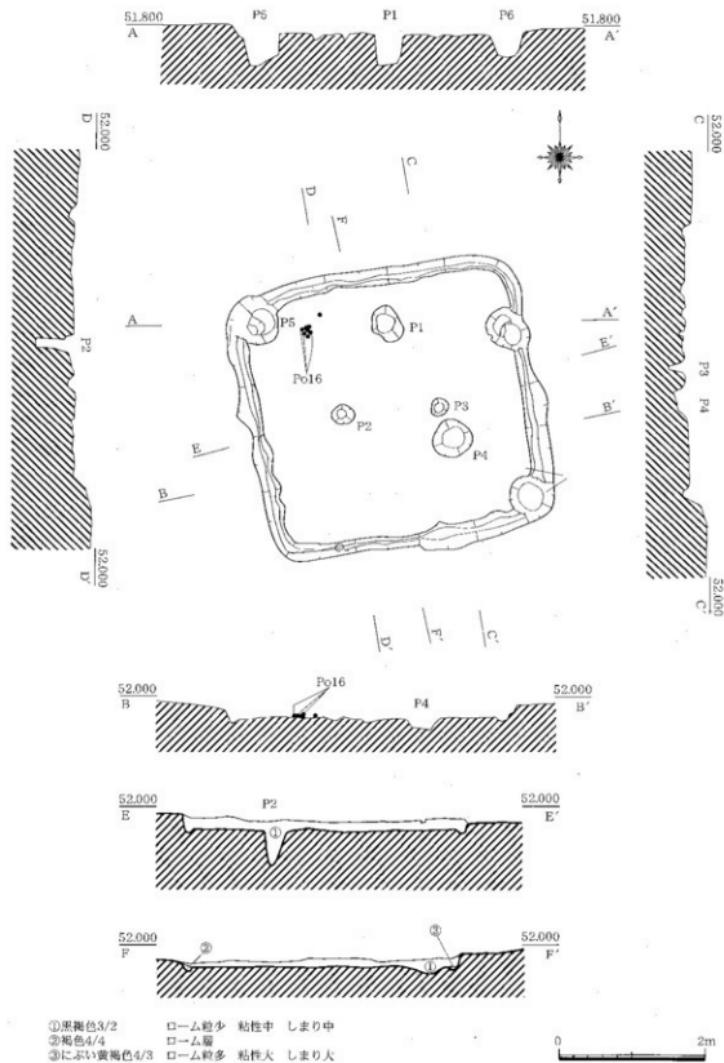
第23図 SI-2 平面図



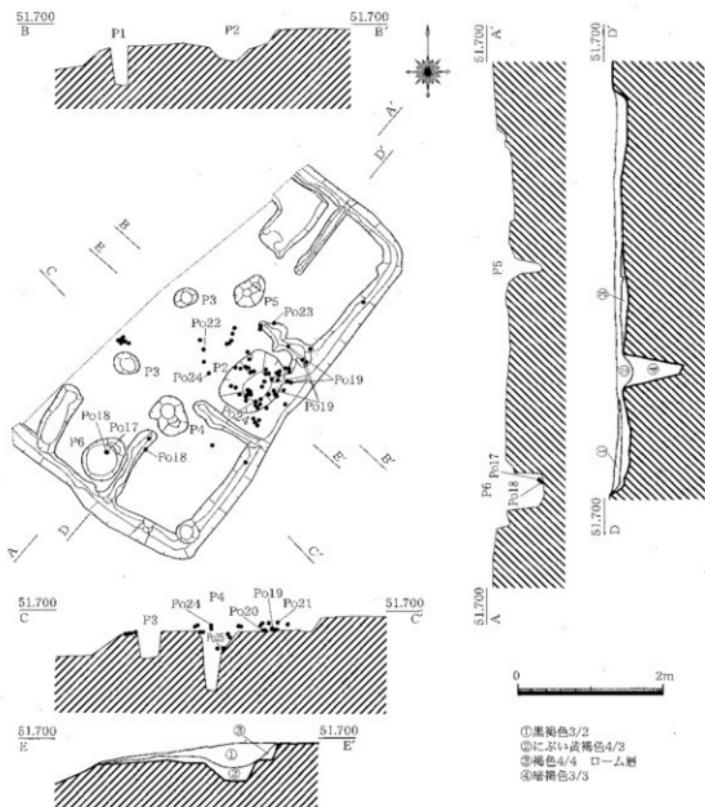
第24図 SI-3 推定住居跡



第25図 S-I-1 造構図



第26図 S I - 2 造構図



第27図 S I - 3 遺構図

S I - 3 で検出された主な遺物は、B区、NO-17~NO-25である。

NO-17・18は高杯の杯部であり、NO18には朱がかかっている。17・18はかなり大型の杯であり、NO-17の口径は、19.2cm、NO-18は、16.4cmを測る。NO-20・21は高杯の脚部であり、NO-20には朱がかかっている。NO-22は器種名不明であるが、梳か高杯の杯部分ではないかと考えられる。NO-23は高杯の杯部であり朱がかかっている。NO-24は甕の口縁部である。NO-25は胴部径9.0cmと非常に小さな甕状遺物であり、胴廻り約28cm、生活用ではなく祭祀用具として供された、ミニチュアの土師器と推察される。

2. 挖立柱建物跡

最初検出されたのは3棟であったが、平面図・航空写真等を検討した結果、S I - 2内のピットと北側のP-26・P-24・SK-12と関連づけて4棟とした。(第21図)

SB-1

S I - 2 の南西方向約5m、P-6GからO-6Gにかけて、東西に巾2m、長さ約6m、柱の数8本、柱間約2mという規模で検出された建物跡である。(第28図)

SB-2

D-5G内に検出された建物跡である。南東から北西方向に巾2m強、長さ3.5m、柱6本で構築された建物跡である。(第29図)

SB-3

調査地中央やや北寄り、P-4・5Gにまたがって南北方向に建てられた掘立柱建物跡である。巾2m、長さ2.7m、6本の柱で構成されている。SB-1・SB-2に比して柱間が非常に狭く、約1.3mあまりである。(第30図)

SB-4

図面・写真等でS I - 2 の北P-5G内に存在する建物跡である。北西隅の柱とSK-12の土坑と複合させることにやや難点があるが、一応成立する建物跡であると考えられる。

方向は東西、巾2m、長さ3.5m、柱間は約1.7mであった。(第31図)

3. 土坑

落し穴・土坑・土塽墓を最初は総て土坑として扱かった。その後整理の段階で3つに分類した。

(1) 落し穴 (第32・33図)

本調査区には、落し穴と思われる土坑が12基あった。それは次のようにある。

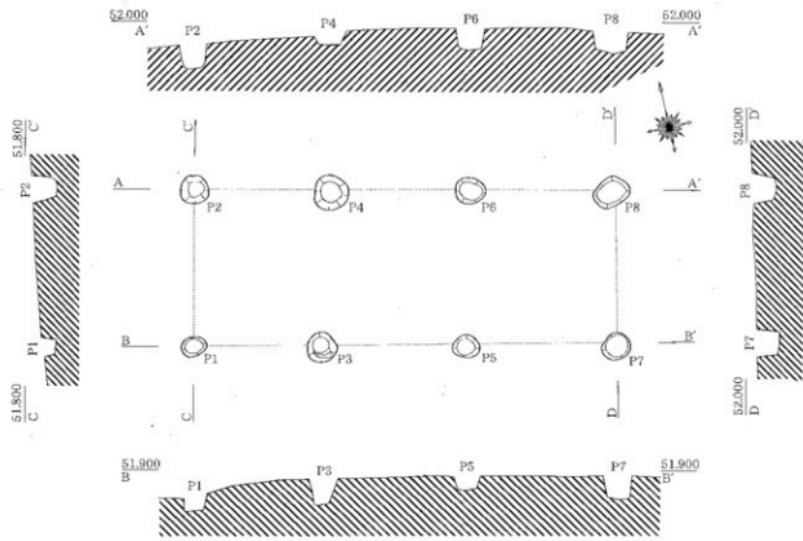
SK-1・2・4・5・7・12・18・23・25・29・32・34の土坑である。いずれの土坑も中心のあたりに杭を立てたと思われる穴が穿かれている。

規模を一覧表にすると次表のようである。

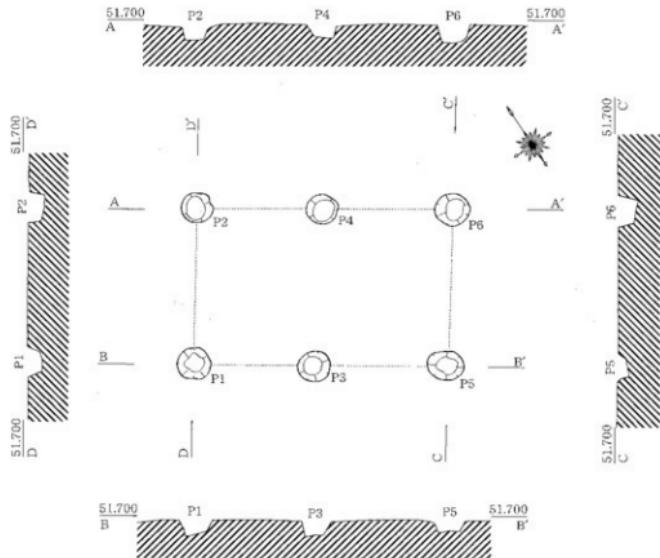
(単位はm)

SK	1	2	4	5	7	12	18	23	25	29	32	34
長径	1.2	1.2	1.2	1.6	1.4	1.4	1.0	1.1	0.9	1.3	1.4	1.6
短径	0.7	0.7	0.7	0.8	1.0	0.8	0.6	0.6	0.8	1.0	0.8	1.0
深さ	1.2	0.7	0.7	0.7	1.3	1.0	1.5	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2

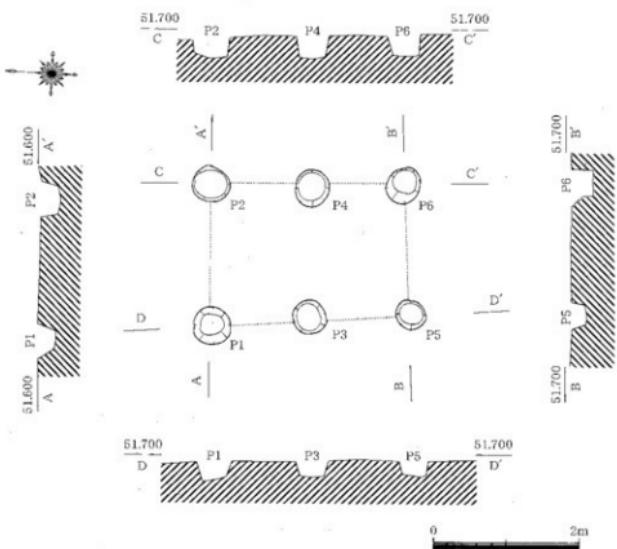
SK(落し穴)一覧表



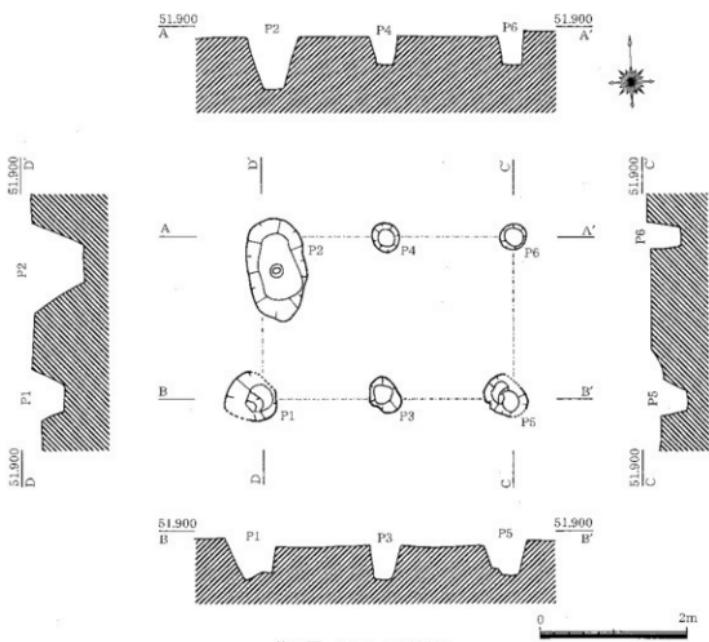
第28図 SB-1 造構図



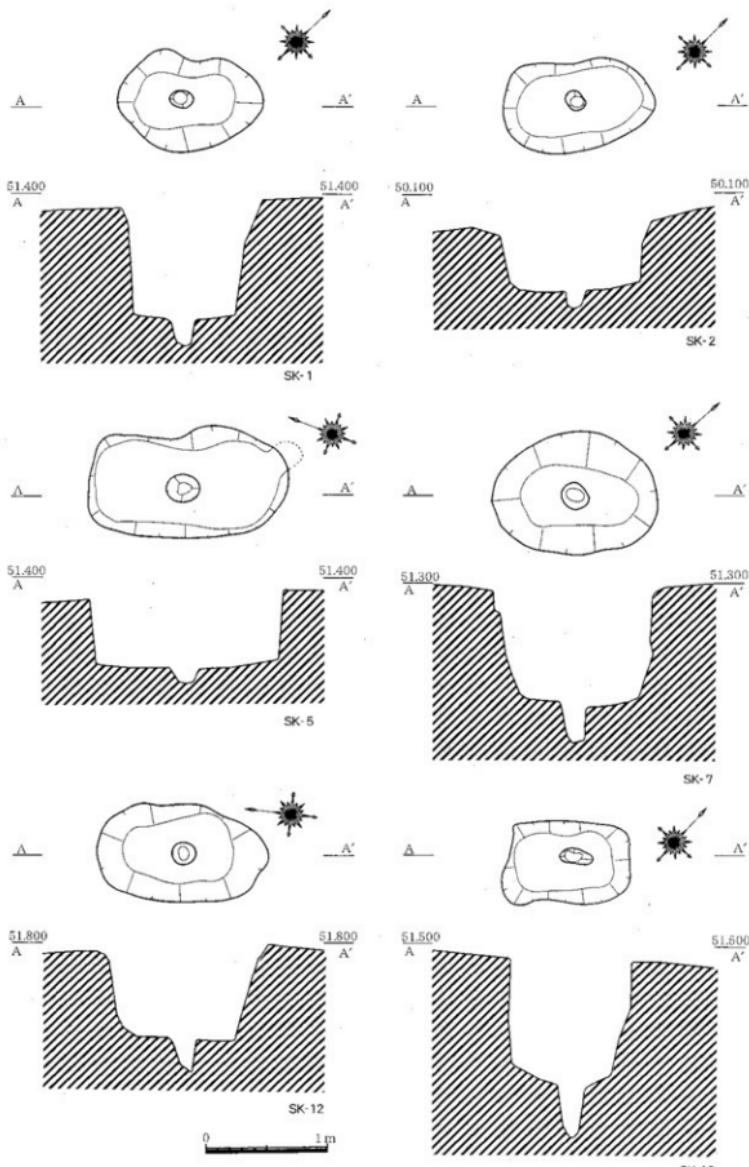
第29図 SB-2 造構図



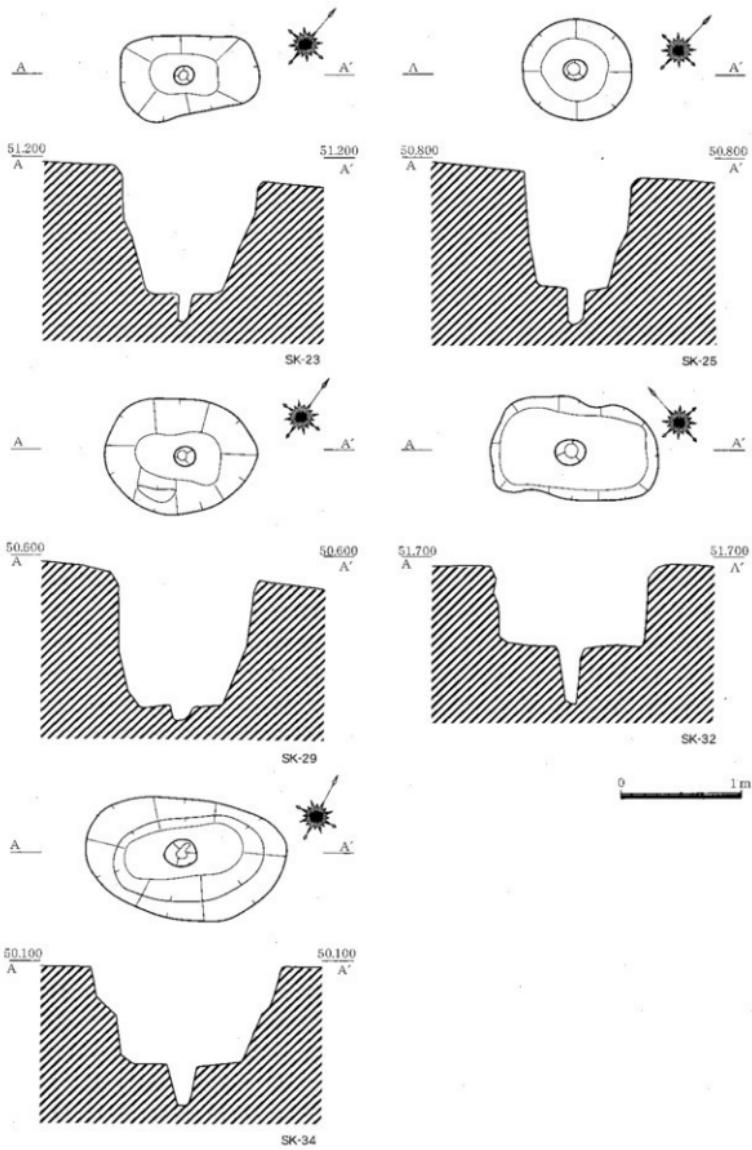
第30図 SB-3 遺構図



第31図 SB-4 遺構図



第32図 SK-1・2・5・7・12・18縦構図



第33図 S K - 23・25・29・32・34造構図

(2) 土坑

土坑は20基にのぼっている。即ち、6・8・9・10・11・13・14・15・16・17・19・20・21・24・26・27・28・31・36・37である。

長径は大きなものでSK-6の約1.5m、深さの最大は、SK-16の約1.2mである。

調査地の以前は果樹園地帯であり、中には肥料穴が含まれている可能性もあると推察される。

(3) 土壙墓

土坑のうち、遺物を伴って検出された土坑を、土壙墓として扱った。

SK-3(SX-1)、SK-22(SX-2)、SK-30(SX-3)、SK-33(SX-4)、SK-35(SX-4)とした。

SX-1(SK-3)O-7Gに検出された土壙墓である。規模は長径1.5m、短径1.2m、深さ0.5m、である。検出された遺物は甕の口縁部数種と底部片、低脚杯の脚部等であった。

SX-2(SK-22)P-4G北東部分に検出された土壙墓である。長径1.5m、短径1m、深さ0.4mの規模である。遺物は甕の口縁部・底部分、浅鉢の口縁部分が検出されている。

SX-3(SK-30)は、本調査地最北部P-2Gで検出された土壙墓である。規模は、長径1.4m、短径1m、深さ0.5m。検出された遺物は、甕の口縁部分が数種であった。

SX-4(SK-33)は、本調査区の最西部、平地に近いN-5Gに検出された土壙墓である。規模は、長径1.6m、短径1.5m、深さ0.3mである。深さが浅いようだが削平によって上部が削り取られた可能性が伺える。遺物は、形のよく整った甕の口縁部、破碎された甕の口縁部、鉢の部分等であった。

SX-5(SK-35)は、N-6Gに検出された土壙墓である。

規模は、長径1.5m、短径1.2m、深さ0.5m。検出された遺物は甕の口縁破片が数種類であった。

4. 落ち込み

N-1 (第37図)

調査地北寄り、P-3Gに検出された落ち込みである。北東から南西方向に巾1m、長さ2m、深さ0.2mである。遺物も出土している。

N-2 (第38図)

Q-4Gの真中にあたり、SK-18のすぐ北側に検出された落ち込みである。

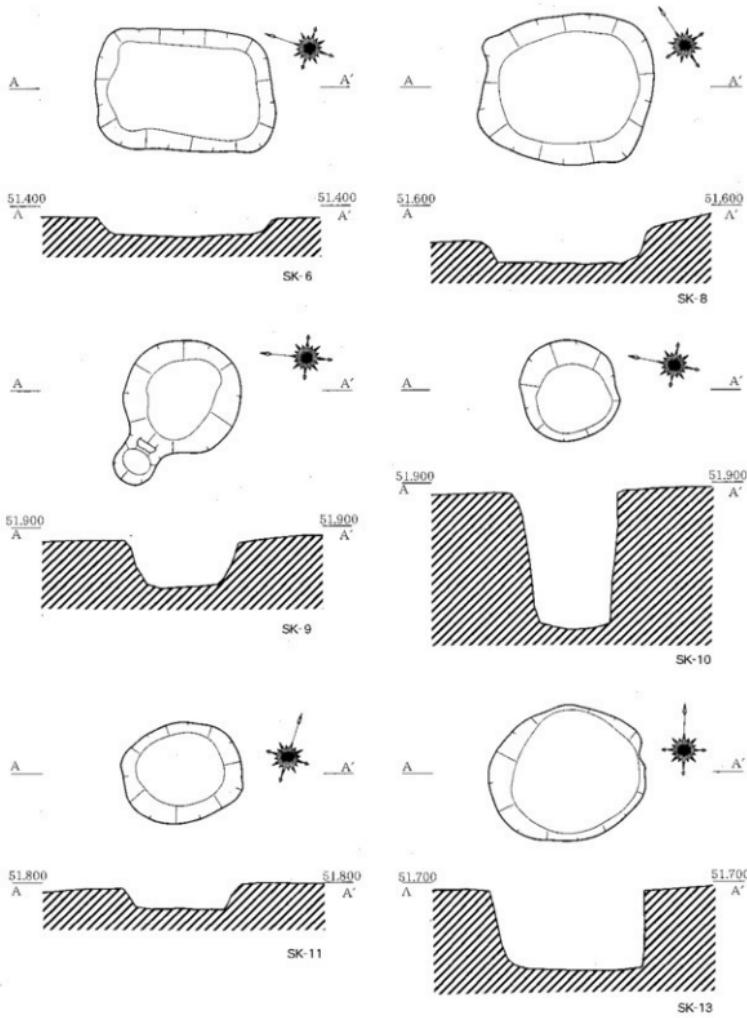
東西方向に巾0.5m、長さ2m、深さ0.2~0.3m、遺物も多数出土しており、削平され浅くなつた土壙墓ではないかと考えられる。

5. 柱穴

本調査区では最初200余のピットを検出していたが、最終的には、120穴にしほった。

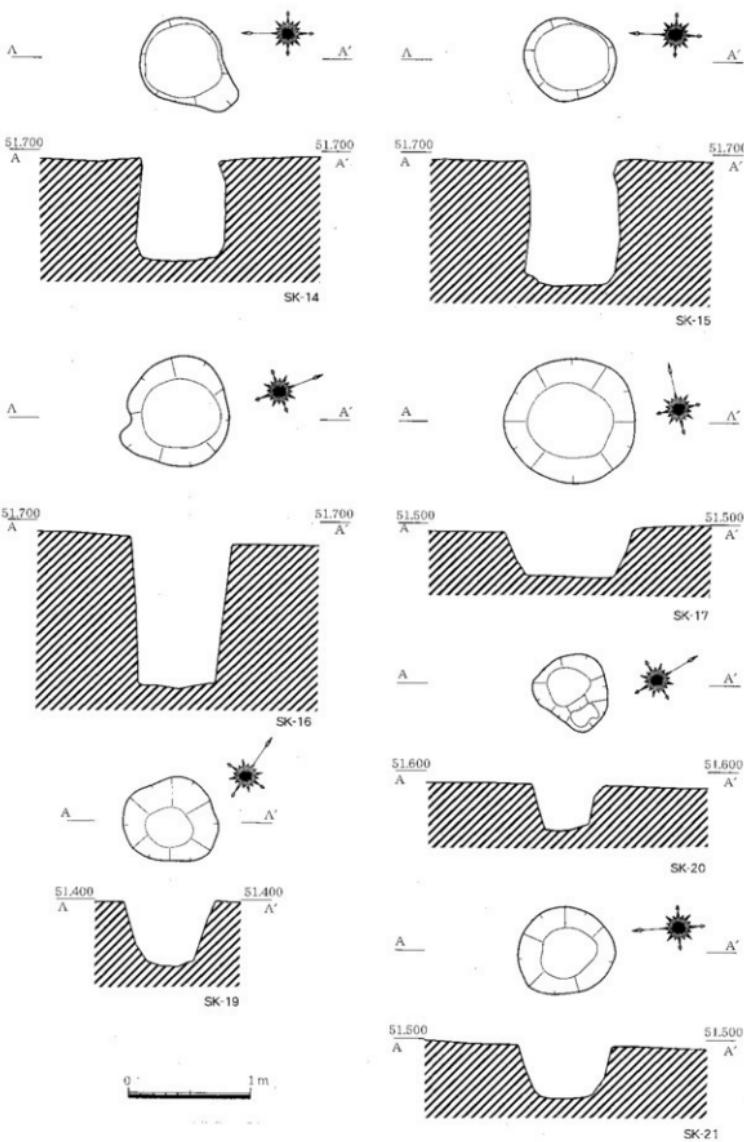
ピットは調査地の東半分北寄りに集中しており、西半分には、17穴程度を数えるにすぎない。

N-5GのP-38は、底の中心に穴が穿かれており落し穴の様相を呈していたが、やや規模が小さいため、ピットとして扱かった。

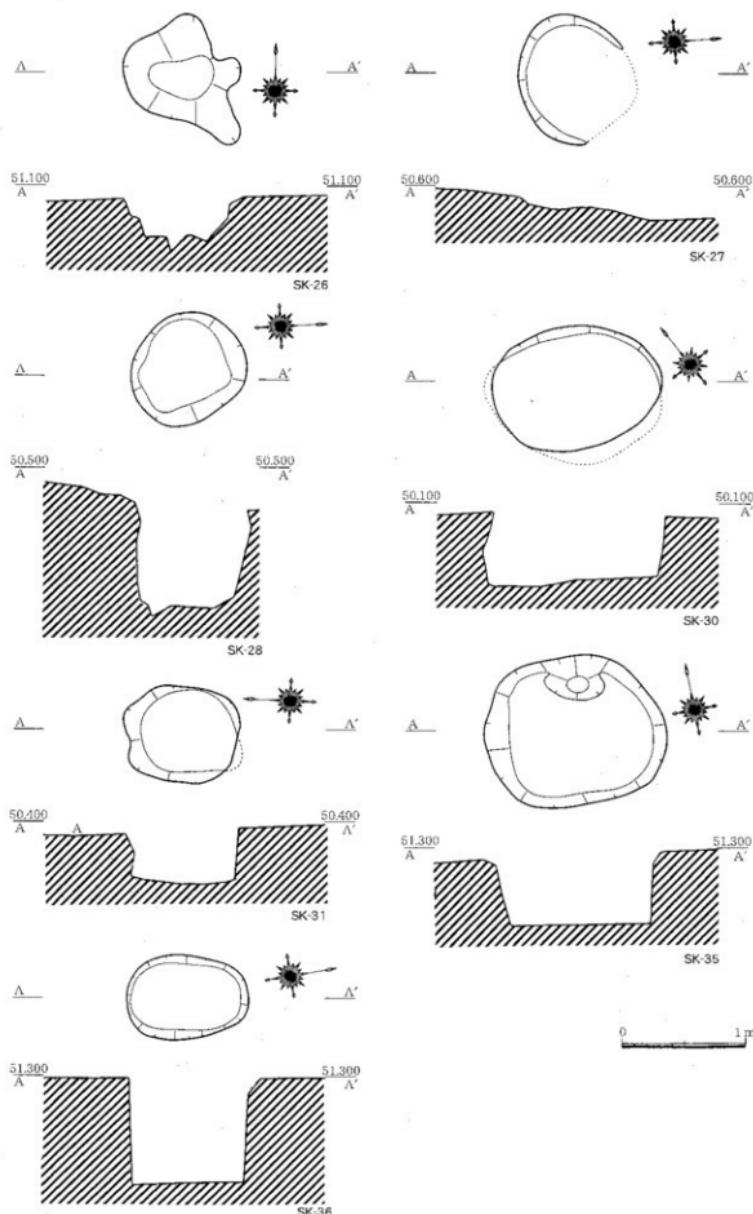


第34図 SK-6・8・9~11・13構造図

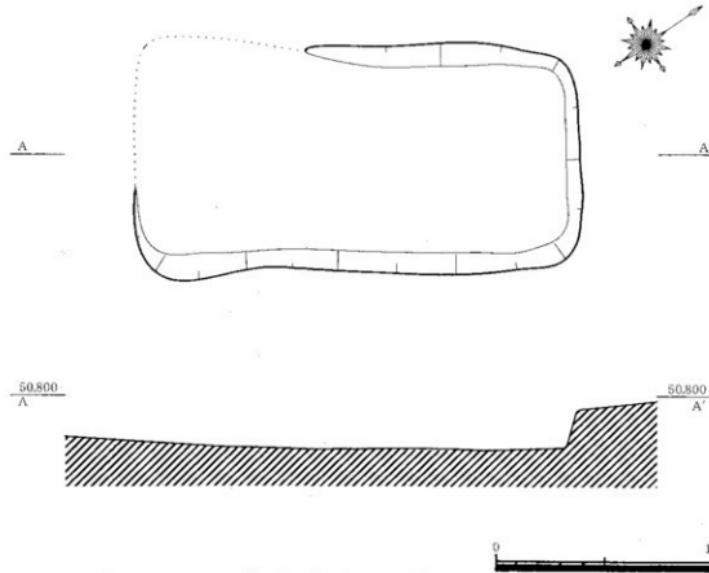
0 1m



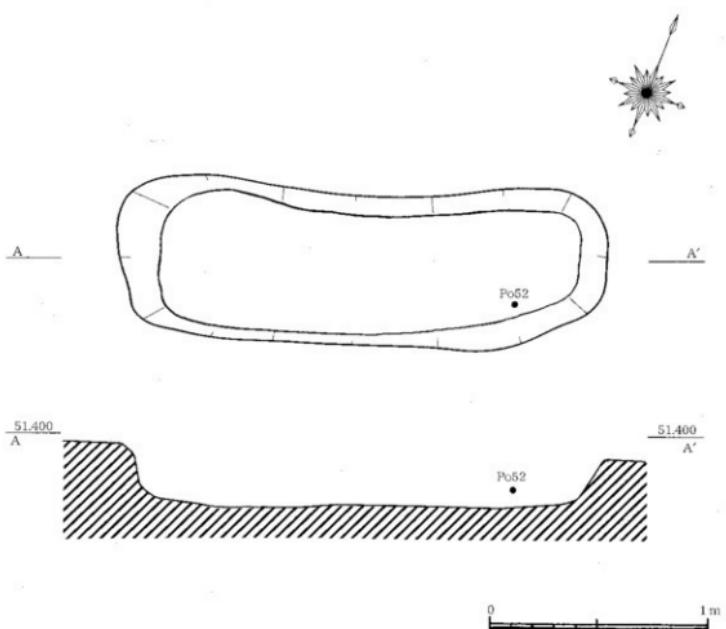
第35図 SK-14~17・19~21造構図



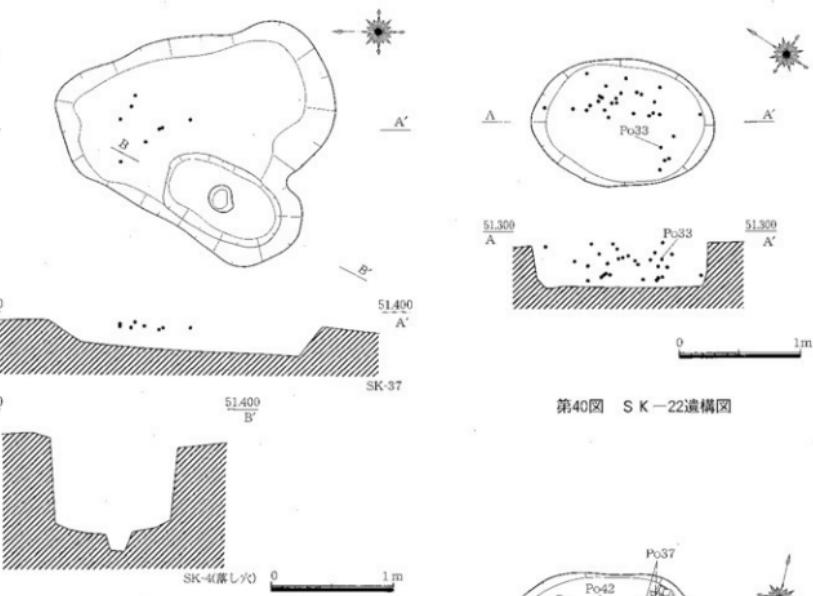
第36図 SK-26~28・30・31・35・36構造図



第37図 落ち込みNo.1遺構図

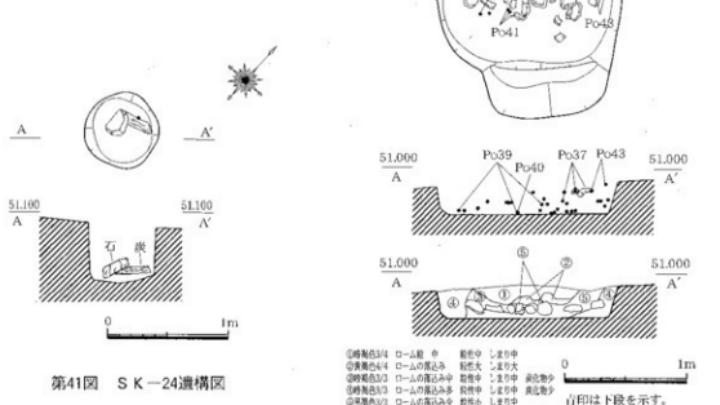


第38図 落ち込みNo.2遺構図



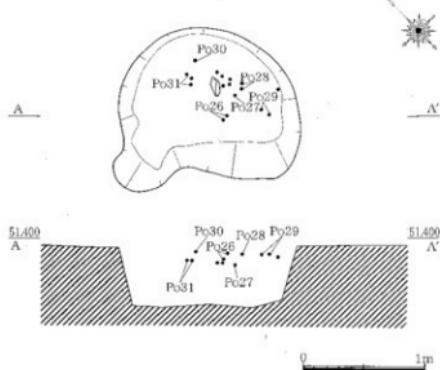
第40図 SK-22遺構図

第39図 SK-4・37遺構図

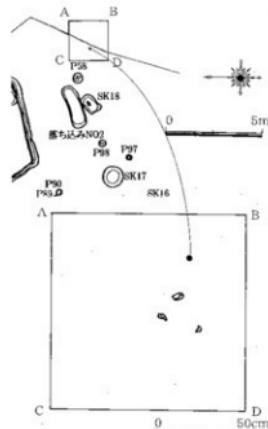


第41図 SK-24遺構図

第42図 SK-33遺構図



第43図 SK-3 造構図



第44図 Q-4 G 造物集中部平面図

第V章 小 結

今回の調査で得られた所見を以下にまとめ、若干の検討をくわえてみた。

本調査地は地理的環境でも記したが、沢田山古墳群・御建山古墳群・久能寺古墳群・万代寺遺跡(弥生～奈良)、八上都衝跡等に囲まれた所である。

特に、県立八頭高等学校(旧 県立女子師範学校)が所在する久能寺字御藏屋敷は、「天保地統絵図」によると、御藏屋敷ではなく、「御建山」となっている。という事は、現小字「御建山」の他に、八頭高等学校の校地も包含していた事になる。

…御建とは、鳥取藩直轄林の敬称で、藩主の狩獵場でもあった。麓地帯には、古墳が円錐小丘に遠望されたので、俗称小山とも呼んだ。かつて盜掘された古墳であったが、昭和32年の本格的な調査で、県内最初に発見された「はにわ列古墳」であった。…といわれるよう、本調査地の西側真近に「はにわ」をめぐらせた古墳群が存在していた事が伺える。

上記の事から考えると本調査区に古墳跡が考えられるが、一基も検出されなかったという事は、このあたりが住居地帯であり、墳墓は山麓にという不文律が当時の住民の間にあったのかも知れない。

調査の結果、A調査区では、住居跡10棟、土壙墓4基、落し穴4基、土坑21基、ビット180穴を検出している。

住居は遺物等から、弥生後期ごろ3棟(S I-2・9・10)、古墳中期ごろ7棟(S I-1・3・4・5・6・7・8)となっている。

住居・土壙墓・ビットは西側半分(低い地帯)に集中しており、落し穴は、東側半分の低い地帯に集中していたのも一つの特徴である。

出土土器はほとんどが土師器であり、復元可能な出土状況にあったものは少なかった。

石材関係では、包丁ではないが、「物を剥ぐ」作業に使用したと思われる、手の中へすっぽりとはいる石器を検出している。

石材を専門に研究している人に聞くと、この用具作成の手法は、山陰地方では見られない手法であり、瀬戸内地方でよく使っている方法で作られたものという事であった。

では、誰が、どこから、今後調査研究をまたなければならない課題である。

B調査区では、弥生後期中葉ごろの住居跡1棟(S I-1)、古墳中期ごろの住居跡2棟(S I-2・3)が検出されている。

土器では、大型器台とか大型の高杯の杯部等が出土している。特に器台は破損度が少なく、ほぼ原形を保って検出されており、弥生後期中葉ごろのものと推定される。

いずれにしても本調査区は、沢田山・御建山・久能寺古墳群をひかえ、弥生時代後期から古墳時代にかけて、古代人の生活の場であった事はまちがいないと考えられる。

本調査区は、度重なる開発・削平によって保存状態は良好であったとはいえないが、所期の目的は十分達成されたものと考えられる。

調査に際し、表土除去から報告書作成に至るまで多くの方々の御協力を得た。

記して、謝意をあらわしたいと思う。

土器・石器觀察表

表1 A区出土土器観察表(1)

出土 遺構	遺物番号 図版	器種	法量(cm) ①口徑 ②高さ	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-1	1 4 5 1 2	壺	①15.0※ ②6.4△	内向しながら外方へ開いて立ち上がる口縁で、端部は丸くおさめる。よく張る肩部をもつ。	外面、ヨコナデ。 内面、口縁部・颈部ヨコナデ。肩部指押し成形。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、赤茶色	
SI-1	2 4 5	(口唇部)	①15.0※ ②3.2△	外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、黄褐色	内外面に赤の彩色を施す
SI-1	3 4 5 1 2	壺	①17.0※ ②3.5△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。	内外面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、黄褐色	内外面に赤の彩色を施す
SI-1	4 4 5	(体部)	①— ②6.3△	張りの少ない体部。	外面、ハケメ。 内面、指押し成形。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、淡橙色 外面、灰白色	
SI-1	5 4 5	(体部)	①— ②15.7△	張りのある体部。	外面、ハケメ。 内面、風化の為調整不明。	砂れき含む	軟質	内外面、にじ い橙色～褐色	外面に一部 風化物付着
SI-2	6 4 5 1 2	高杯	①22.0※ (粘部付) ②2.7△	ほんとく縦斜をもたず、大きく広がる輪部で、脚輪部は、ほほ輪麻に切り立たせる。底部上方に2つの円孔を穿つ。	内外面、風化が激しいが、一部ハケ目が残る。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、淡黃褐色	
SI-2	7 4 5 1 2	高杯	①20.0※ (粘部付) ②3.8△	ゆるやかに「八」字状に広がる輪部で輪部は、鋭く切り立たせる。輪部上方に1つの円孔を穿つ。	外面、ハケメ。 内面、ナデのちハケメ。風化著しい。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、淡黃褐色	
SI-2	8 4 5 1 2	器台	①20.0※ ②5.5△	強く外傾し上端で大きく外反する受部で、端部は大きく外方に突出して丸くおさめる。縁は水平方向に大きく張出す。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、褐褐色	
SI-2	9 4 5 1 2	器台	①21.0※ ②6.5△	強く外傾し上端で大きく外反する受部で、端部は大きく外方に突出しやや角ぼり気味に丸くおさめる。縁は水平方向に張出す。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、明褐色	
SI-2	1 0 4 5 1 2	壺	①16.0※ ②5.2△	やや外傾し、上端で外反する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の後は水平方向に強く張出す。	外面、ヨコナデ 内面、口縁部～颈部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰白色 外面、灰白色	外面に一部 風化物付着
SI-2	1 1 4 5 1 2	器台	①21.0※ ②6.0△	強く外傾し、上端で外反する受部で輪部は外方に突出し、平面でおさめる。縁は水平方向に張出す。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内外面、灰褐色	
SI-2	1 2 4 6 1 2	高杯	①30.0※ ②7.4△	強く外傾し、上端で外反する口縁で、輪部は外方に開き、やや角ぼり気味に丸くおさめる。下端の縁は水平方向に強く張出す。	外面、ヨコナデ。 内面、口縁部ヨコナデ。以下ヘラミガキ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、橙色 ～淡褐色	
SI-2	1 3 4 6	壺	①16.0※ ④.9△	外傾し、やや外反する口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部5本(總数不明)の平行沈線をめぐらす。 輪部風化の為調整不明。 内面、風化の為調整不明。	砂粒含む	軟質	内外面、褐色 ～灰褐色	
SI-2	1 4 4 6 1 2	瓶	①50.0※ ②11.8△	やや外傾する口縁で、口縁端は巾広い面をもつ。	外面、ヨコナデ。 内面、下半ヨコナデ。上半ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、灰褐色 ～黒色	
SI-2	1 5 4 6 1 3	壺	①16.0※ ④.4△	外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縁は水平方向に強く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内外面、灰褐色	

※ △印は、それぞれ復元径、残存高を示す。

胎土：砂れき(φ4.0mm以上)、砂粒(φ2.0～3.0mm)

輪形(φ1.0～2.0mm)のものを示す。

A区出土土器観察表（2）

出土 遺構	遺物番号 種類	器種	汎量(cm) ①口徑 ②容積	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-2	1 6 4 6 1 3	高杯	①11.0※ ②2.2△	器底下平はゆるやかに「八」字状に広がり、下部で角度を急にし外反する。端部は丸くおさめる。	内外面、風化の為調査不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色	
SI-2	1 7 4 6	壺	①13.0※ ②4.8△	外傾し、上部でわずかに外反する口縁で、端部は丸くおさめる。	内外面、風化の為調査不明。	細砂含む	軟質	内面、灰白色 外面、淡橙色	
SI-2	1 8 4 6 1 3	壺	①14.0※ ②3.8△	外傾する口縁で、端部は丸みをもつ平面でおさめる。下縁の様は水平方向に強く張出す。	外面、ヨコナデ。 内面、山線部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、灰褐色	
SI-2	1 9 4 6 1 3	壺	①12.0※ ②4.8△	外傾し、上部に向って強く外反する口縁で、端部はやや外方を向き丸くおさめる。下端の棱は水平方向に強く張出す。	外面、口縁部7条以上(能数不規)のクシ描平行沈織をめぐらす。 内面、ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。 肩部ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、褐色 外面、褐色～黒色	
SI-2	2 0 4 6 1 3	壺	①14.0※ ②4.9△	外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部13条のクシ描平行沈織をめぐらす。頸部ナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、暗褐色	
SI-2	2 1 4 6 1 3	壺	①14.0※ ②5.1△	わずかに外傾し、外反する口縁で、端部は丸くおさめる。下縁の棱はわずかに水平方向に張出す。	外面、口縁部10条のクシ描平行沈織をめぐらす。頭部ナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、淡褐色	
SI-3	2 2 4 6 1 3	高杯	①24.0※ ②7.3△	外傾し、上部で外反する山線部で、端部の方に開き丸くおさめる。杯底部は半底。	外面、口縁半ヨコナデ。 トキタケハケメのちヨコナデ。 杯底部放射狀にハケメをめぐらす。 内面、ヨコナデ。	砂れき含む	やや軟質 (良)	内外面、赤褐色	
SI-3	2 3 4 6 1 3	壺	①8.0※ ②10.6△	外傾し、わずかに内向する口縁で、端部は平面でおさめる。張りのある肩部。	外面、口縁部～頸部ヨコナデ。肩部タキキ。 内面、山線部～頸部ヨコナデ肩部ヘラケズリ。	砂れき含む	やや軟質 (良)	内面、暗褐色 外囲、暗褐色～黒色	
SI-3	2 4 4 7 1 3	高杯	①— ②3.3△	ゆるやかに「八」字状に広がる杯底部で、わずかに段をもつ。	外面、放射狀にハケメをめぐらす。 内面、ナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、淡褐色の彩色を施す	
SI-3.4	2 5 4 7	(体部)	①— ②10.3△	張りのある体部。	外面、ハケメ。 内面、ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、黑褐色 外面、全面に灰化物付着	
SI-3.4	2 6 4 7 1 3	壺	①18.0※ ②5.7△	ほぼ直立し、上部でわずかに外反する口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部8条以上(能数不明)のクシ描平行沈織をめぐらす。頸部ヨコナデのちへらけズリ。内面、山線部～頸部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、灰白色 外囲、赤褐色	外面に一部灰化物付着
SI-3.4	2 7 4 7	(体部)	①— ②3.1△	ほぼ球形の体部	内外面、手捻り成形。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、赤褐色	
SI-3.4	2 8 4 7 1 3	蓋	①3.6(つ まみ付) ②2.2△	わずかに外反する柱状のつまみ	内外面、ナデ	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、灰褐色	
SI-3.4	2 9 4 7 1 3	壺	①24.0※ ②5.7△	やや外傾し、強く外反する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の棱は水平方向に張出す。	外面、口縁部13条のクシ描平行沈織をめぐらす。頸部ヨコナデ。 内面、風化の為調査不明。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、褐色	
SI-3.4	3 0 4 7 1 4	瓶	①— ②11.6△	ほぼ直立する板状の体部。内側にわずかに丸みをもつ。	外面、タテハケメ。 内面、斜交するハケメ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、灰褐色	

A区出土土器観察表 (3)

出土 遺構	遺物番号 種類 図版	器種	法量(cm) ①口 径 ②基 高	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-3.4	3 1 4 7 1 4	高杯	①— ②6.2△	中空で短い脚柱部。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色	外面に一部赤色の彩色が残る。
SI-5	3 2 4 7 1 4	壺	①— ②32.1△	かまどの一部。断面はゆがんだ三角形状を呈す。	外面、ハケメのちナデ。縫部に指圧痕。	砂れき含む	堅緻	褐色～黒色	
SI-5	3 3 4 8 1 4	壺	①14.0※ ③4.3△	外輪に、わずかに外反する口縁で縫部は丸くおさめる。下端の棱は斜め下方外向きに強く張出す。	外面、口縁部10条のクシ抜平行沈痕をめぐらす。縫部ナデ。内面、口縁部～縫部ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	砂粒含む	軟質	内外面、灰白色	
SI-5	3 4 4 8 1 4	壺	①21.0※ ②5.8△	外輪し、外反する口縁で縫部は平面でおさめる。下端の棱は斜め下方外向きに強く張出す。	外面、口縁部9条のクシ抜平行沈痕をめぐらす。縫部ヨコナデ。内面、口縁部～縫部ヨコナデ。縫部ヘラケズリ。	砂砂含む	やや軟質(良)	内外面、淡褐色	
SI-5	3 5 4 8 1 4	壺	①21.0※ ②5.0△	外傾し、外反する口縁で、縫部は丸くおさめる。	外面、口縁部12条のクシ抜平行沈痕をめぐらす。縫部ヨコナデ。内面、口縁部～縫部ヨコナデ。縫部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質(良)	内外面、黒褐色	
SI-6	3 6 4 8 1 4	蓋	①3.4(つ まみ伴) ②1.5△	わずかに内向する柱状のつまみ。	外面、たて方向のヘラケズリ。内面、頭部ヘラミガキ。内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質(良)	内外面、にぶい褐色	
SI-7	3 7 4 8 1 4	壺	①3.9(底 部径) ②17.3△	張りの少ない底部をもち、同様の制部につく。底面は平底。	外面、タテハケメ。内面、風化の為調整不明。	砂れき含む	やや軟質(不良)	内外面、淡赤色～黄褐色	
SI-7	3 8 4 8 1 4	壺	①4.8(底 部径) ②12.6△	大きき外傾して立ち上がる底部でふくらみはほとんどない。底面は半底。	外面、ハケメ。内面、風化の為調整不明。	砂れき含む	軟質	内外面、赤褐色 外面、灰白色	
SI-7	3 9 4 8	(体部)	①— ②13.7△	張りのある体部。	外面、ヨコハケメ。内面、風化の為調整不明。	砂粒含む	やや軟質(不良)	内外面、褐灰色 外面、赤褐色	
SI-7	7 0 4 8	(体部)	①— ②9.7△	張りのない体部。	内外面、風化の為調整不明。	砂粒含む	軟質	内外面、黒褐色 外面、黄褐色	
SI-7	4 1 4 8 1 4	壺	①10.0※ ②7.1△	外傾する口縁で、縫部は平面でおさめる。張りのある肩部をもつ。	内外面、風化の為調整不明。	精良	軟質	内外面、灰白色	
SI-7	4 2 4 8 1 5	壺	①16.4※ ②4.8△	外傾し、やや外反する口縁で、縫部は丸くおさめる。下端の棱は水平方向に強く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	砂砂含む	やや軟質(不良)	内外面、赤褐色	
SI-8	4 3 4 8	高杯	①14.0※ ②5.3△	深い輪状の环部をもち、口縁縫部は丸みをもつ平面でおさめる。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質(良)	内外面、赤色	外面に赤色の彩色を残す。
SI-8	4 4 4 8	高杯	①— ②3.8△	中空で開きの大きい脚柱部。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	軟質	内外面、にぶい褐色	
SI-8	4 5 4 8 1 5	壺	①15.6 ②26.5	外傾する口縁で縫部は丸くおさめる。なだらかな肩部から、最大径を上平面上にもつ胴部に至る。底部は丸底。ほぼ完形。	外面、口縁部～縫部ヨコナデ。体部～底部ハケメ。内面、口縁部ヨコナデ。頭部～体部ヘラケズリ。底部指圧痕が残る。	精良	やや軟質(良)	内外面、褐色	

A区出土土器観察表（4）

出土 遺構	遺物番号 神戸 国 版	器種	法量(cm) ①口 径 高 さ ②器 高	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-8	4 6 4 9 1 5	碗	①10.6 ②4.3	ゆるやかに立ち上がる杯部で、端部は丸くおさめる。底面は高台状のものを強付けるが、完形。	外面、杯部上半ヨコナデ。 下半ナテ。 内面、杯部上半ヨコナデ。 下半ナテ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、赤褐色	
SK-1	4 7 4 9	甕	①22.0cm ②6.5△	わずかに外傾し、やや外反する口縁で、端部は丸くおさまる。下端の棲は、水平方向に強く張出す。	外面、風化の為調整不明。 内面、口縁部ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内面、灰褐色 外面、赤褐色	外面に一部 炭化物付着
SK-3	4 8 4 9	土玉	①1.6 ②-	ほぼ球形を呈す。完形。	手捻り成形。	精良	やや軟質 (良)	黒色	
SK-19	4 9 4 9 1 5	(体部)	①- ②10.0△	裏りのある肩部をもち、強く張りをもつ肩部につづく。	外面、肩部ヨコナデ。以下 ヨコナデ一部タキ日。 内面、肩部～朝上半船へラ ケズリ。下半部ナテ。	細砂含む	堅織	内外面、淡褐色	
SK-19	5 0 4 9 1 5	高杯	①14.2 (底部僅) ②2.5	ゆるやかに「八」字状に広がる底をもち、脚部は垂直に立ち、やや中央部にくぼみをもつ。	外面、風化の為調整不明。 内面、底部ヘラケズリ。脚 部ナテ。	砂粒含む	堅織	内外面、赤褐色	
P-7	5 1 4 9	壺	①- ②6.6△	強い張りのある肩部をもつ。	外面、頸部ナデ。肩部ハケ メ。 内面、頸部ヨコナデ。肩部 ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、暗褐色	
P-7	5 2 4 9	壺	①- ②6.0△	強い張りのある肩部をもつ。	外面、頸部ナデ。肩部ヨコ ハケメ一部ヘラミガタ。 内面、頸部ナデ。肩部ヘラ ケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、暗褐色	
P-55	5 3 4 9	甕	①16.4cm ②4.1△	わずかに外傾する口縁で、端部は内向きに平面をもつ、丸形でおさめる。	外面、口縁部9条のクシ横 平行弦線をめぐらす。頸部 ナテ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、にぶ い黄褐色	
P-65	5 4 5 0	円筒 埴輪	①30.8cm (底部僅) ②8.5△	わずかに外傾して立ち上がる底部で、くづらみをもたない。下端は水平平面をもつ。	外面、頸、太のタテハケメ。 内面、ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、にぶ い橙褐色	
P-65	5 5 4 9	鉢	①16.2cm ②6.3△	外傾し、わずかに内向し、くづらみは少ない。口縁端部はやや角ばった丸でおさめる。	外面、ナデ。 内面、布目窓が全面に残る。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内面、赤褐色 外面、棕色～暗赤褐色	
P-65	5 6 4 9	鉢	①16.8cm ②5.5△	外傾し、わずかに内向し、くづらみは少ない。外面に段をもつ。口縁端部は平面でおさめる。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内外面、暗褐色	
遺構外 F-11G 遺物集 中部	5 7 4 9	(体部)	①- ②11.0△	張りのある体部。	外面、ハケメ。 内面、ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、暗褐色 外面、茶褐色	外面に一部 炭化物付着
遺構外 F-11G 遺物集 中部	5 8 4 9	甕	①13.6cm ②3.9△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の棲は、わずかに水平方向に張出す。	外面、口縁部3条の弦線をめぐらす。頸部～肩部ヨコナデ。一部 ヨコナデをもつ複合状態が残る。 内面、口縁部～頸部ヨコナデ。 以下ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、明灰褐色	外面に一部 炭化物付着
遺構外 D-8G	5 9 4 9	(不明) (厚芯部)	①8.2cm (内径) ②10.4cm (外径) ②2.0△	円形の台座状で、断面は長方形を呈す。	ナテ。	精良	堅織	にぶい赤褐色	
遺構外 E-8G	6 0 4 9	甕	①21.2cm ②4.5△	わずかに外傾する口縁で、端部は平滑でおさめる。下端の棲は、わずかに斜め下方外向に強く張出す。	外面、口縁部14条以上のタ シ横平行弦線をめぐらす後、上半部ヨコナデ。頸部 1列の刺突文をめぐらす。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、淡灰褐色 外面、茶褐色～黑色	外面に一部 炭化物付着

A区出土土器観察表 (5)

出土 遺構	遺物番号 部品 固版	器種	法量(cm) ①口径 ②器高	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
遺構外 E-8G	6 1 5 0 1 5	不明 (復原)	①— ②3.7△	体部の破片。	外面ハケメ、タタキ目。 内面、タタキ目。	精良	堅緻	青褐色	
遺構外 E-9G	6 2 5 0 1 5	不明 (復原)	①5.1△ ②1.1△	ほぼ円形で、中央裏面に0.6cmの円形のくぼみをもつ台座状のもの。底面は長方形を呈する。脚1本残存。	内外面、回転ナデ。	精良	堅緻	灰褐色	
遺構外 E-9G	6 3 5 0 1 5	不明 (復原)	①4.4△ (外径) 1.8△ (内径) ②1.3△	ほぼ円形で、中央に1.8cmの孔を穿つ台座状のもの。新面は長方形を呈する。脚2本残存。	内外面、回転ナデ。	精良	堅緻	淡灰褐色	
遺構外 E-9G	6 4 5 0 1 5	把手 (復原)	①— ②5.8△	やや唐袖状を呈する把手で断面は指円形を呈す。	手捻り成形。	砂れき含む	やや軟質 (良)	淡赤褐色	
遺構外 F-7G	6 5 5 0 1 5	甕	①14.2△ ②6.5△	外縁し、強く内向する口縁で、端部は角ばった丸形でおさめる。張りのある肩部をもつ。	外面、口縁部ヨコナデ。頂部～肩部ナデ。 内面、口縁部～頸部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、褐色 外面、褐色～灰褐色	
遺構外 F-8G 遺物集 中部	6 6 5 0 1 5	甕	①35.0△ ②6.9△	大きく外反し、外方に聞く口縁で、端部は丸くおさめる。張りの少ない肩部をもつ。	外面、口縁部ヨコナデ。肩部上半下ハケメのちヨコナデ。下半タタキ目。 内面、口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、暗褐色 外面、灰褐色～暗褐色	
遺構外 G-10G 遺物集 中部	6 7 5 0 1 5	甕	①16.2△ ②6.9△	外縁し、わずかに外反する口縁で、端部は丸くおさめる。下縁の様は水平方向に強く張出す。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、褐色	外面に一部 風化物付着
遺構外 G-10G 遺物集 中部	6 8 5 0 1 5	甕	①19.4△ ②5.3△	大きく外縁する口縁で、端部は丸くおさめる。下縁の後は水平方向に強く張出す。	内外面、風化の為調査不明。	砂粒含む	軟質	内外面、黄褐色	
遺構外 G-10G 遺物集 中部	6 9 5 0	甕	①18.6△ ②4.5△	外縁し、上部でわずかに外反する口縁で、端部は丸くおさめる。	内外面、ヨコナデ	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、水褐色	外面に一部 風化物付着
遺構外 G-10G 遺物集 中部	7 0 5 0	甕	①18.8△ ②6.6△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部18条のクシ指平行沈線をめぐらす。頂部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂れき含む	やや軟質 (良)	内面、灰茶褐色 外面、淡褐色	
遺構外	7 1 5 0	甕	①14.8△ ②4.8△	外縁し、2段につくる口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部上半ヨコナデ。 下半タタキ目平行沈線(總数不明)をめぐらす。 内面、口縁部～頸部ナデ。 のち上縁上半部ハケメ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰茶褐色 外面、赤褐色～黒色	

表2 B区出土土器観察表(1)

出土 遺構	遺物番号 拂 岡 版	器種	法量(cm) ①口徑 ②器高	形態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-1	1 5 1 1 6	器台	①上20.4 下17.6 ②17.1	外方に、わずかに外反して立ち上がる複合口縁状の輪部。受槽をもち、口縁端は丸い。輪部はやや太い。	外面、受部、輪部ヨコナデ。複合部ヨコアラミガキ。 内面、受部～複合部ヨコナデ。輪部4～7条のクシジ工具によるケズリ。	細砂含む	軟質	内外面、褐色	
SI-1	2 5 1 1 6	甕	①14.6△ ②6.2△	外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。縫はなし。	外面、口縁部ヨコナデ。肩部～頸部上方にタテハゲメ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質(良)	内外面、茶褐色	外向に炭化物付着
SI-1	3 5 1 1 6	甕	①15.0△ ②4.4△	外傾する口縁で、複合口縁状を呈する。端部は丸くおさめる。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄茶褐色	
SI-1	4 5 1 1 6	器台	①15.8△ ②8.2△	外反して立ちあがる口縁で輪部はやや角ぼった丸味をもつ。下端の縫はよく水平に張出す。	外面、ヨコナデ。中央部に10条のクシジ平行沈線をめぐらす。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色 外面、茶褐色	
SI-1	5 5 1 1 6	甕	①20.8△ ②4.4△	強く外反し口縁端部で大きく開き、端部は丸くおさめる。下端の縫はほぼ真下に張出す。	外面、口縁部13条のクシジ平行沈線をめぐらす。 内面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色	
SI-1	6 5 1 1 6	甕	①13.8△ ②6.2△	やや外傾し、口縁上部でやや内反する口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縁部ヨコナデ。肩部ヘラミガキ。 内面、口縁部～頸部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質(良)	内外面、黄茶褐色 外面、茶褐色 外面、黄茶褐色	
SI-1	7 5 1 1 6	甕	①19.3△ ②6.5△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫は、頗る横向方に張出す。	外面、口縁部4条1単位のクシジ平行沈線を2回めぐらす。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質(良)	内外面、黄褐色 外向、黄褐色	
SI-1	8 5 1 1 6	甕	①14.0△ ②6.4△	やや外傾する口縁で、下端の縫は水平に強く張出す。	外面、口縁部、径部、底盤、風化の為調整不明。肩部ヨコハゲメ。 内面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色	
SI-1	9 5 1 1 6	甕	①16.2△ ②4.5△	外傾する口縁で上端部でわずかに外反し、端部は丸くおさめる。下端の縫は下方に強く張出す。	外面、口縁部に6条のクシジ平行沈線が残る。(底数不明)。 内面、風化の為調整不明。	砂粒含む	軟質	内外面、黄褐色	
SI-1	10 5 1 1 6	甕	①12.0△ ②5.5△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫はよく水平に強く張出す。	外面、ヨコナデ 内面、口縁部～頸部ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質(良)	内外面、茶褐色 外向、茶褐色	
SI-1	11 5 2 1 7	甕	①19.6△ ②6.6△	やや外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫は頗る水平に張出す。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄褐色	
SI-1	12 5 2 1 6	甕	①15.2△ ③3.5△	わずかに外傾する口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫は頗るやや下方に張出す。	外面、口縁部5条の平行沈線をめぐらす。頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質(良)	内外面、淡褐色	
SI-1	13 5 2 1 7	甕	①17.0△ ③3.8△	やや内傾し上端部に向かってやや外反する短い口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫は、外向き斜め下方に強く張出す。	外面、口縁部ヨコナデ。頸部下部タテハゲメ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質(良)	内外面、茶褐色	
SI-1	14 5 2 1 7	甕	①17.0△ ③3.5△	内傾し上端部に向かってやや外反する短い口縁で、端部は丸くおさめる。下端の縫は、水平に強く張出す。	外面、口縁部ヨコナデ。頸部タテハゲメ。 内面、口縁部頸部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	砂粒含む	軟質	内外面、暗茶褐色	
SI-1	15 5 2	不明	①21.0△ (網底) ②12.2△	肩部は張り気味で、肩部はよく張っている。最大肩径は、肩部上方。	外面、ヨコナデ。肩部上方に4条の平行沈線が残る。(底数不明)。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質(良)	内外面、灰褐色 外向、黄褐色～黒色	外向下部に炭化物付着

B区出土土器観察表（2）

出土 遺構	遺物番号 捕獲 回数	器種	法華(cm) ①口 ②器 高	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SI-2	1 6 5 2	不明	①17.0△ ②(脚残) ③12.0△	張りのある脚部で、ほぼ球形を呈する。	外面、ハケメ。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、褐色～灰褐色 外側、褐色	
SI-3	1 7 5 2 1 7	高杯	①19.2 ②6.9△	やや浅い鉢状の杯部で、口縁上部でやや外反する。口縁底部はわずかに角ぼる。	外面、ヨコナデ。脚部下方 ハケメ。 内面、ヨコハケのちに中心より放射状にき余り7条1單位のタガメをめぐらす。	細砂含む	軟質	内面、黄褐色 外側、灰白色～茶褐色	
SI-3	1 8 5 2 1 7	高杯	①16.4 ②6.5△	やや浅井盤状の杯部で、縁部は丸くおさめる。	外面、底部へ口縁部に向かってタガメ。 内面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、乳白色	内外面に暗赤色の彩色を施す。
SI-3	1 9 5 2 1 7	甕	①15.6△ ②9.9△	外傾し、口縁上方でゆるやかに内向する口縁で、縁部は内向きの平底をもつ。	外面、ヨコナデ。肩部タハケン、肩部ハケメ。 内面、口縁部～頸部ヨコナデ。肩部ナデ～一部指痕压痕。縁部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、黄褐色	外面に一部灰化物付着
SI-3	2 0 5 2 1 7	高杯	①9.8△ (底部残) ②7.7△	長くやや縦身で中空。脚部に向かって大きく開き、低い「八」字形を呈する。縁部はやや角ぼり半圓底をもつ。	外面、脚部ヘラケズリ。 縁部ナデ。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、茶褐色 外側、暗赤色	
SI-3	2 1 5 2	高杯	①14.4△ (底部残) ②6.0△	中空の脚柱部より縦部に向かって大きく開き、低い「八」字形を呈する。縁部はやや角ぼり最和部で外反する。	外面、脚柱部ナデ。瓶部タハケメ。 内面、瓶部ヨコハケメ。	細砂含む	軟質	内外面、淡灰褐色	
SI-3	2 2 5 3	(杯部)	①19.0△ ②6.1△	浅い皿状の杯部で、口縁底部は、やや角ぼる。	内外面、風化の為調整不明。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、茶褐色～暗赤色	内外面に暗赤色の彩色を施す。
SI-3	2 3 5 3	高杯	①— ②2.1△	やや浅い皿状の杯部で、杯底部外側は2段につくる。	外面、タテハケメ。 内面、ナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、暗赤色 外側、淡赤色～黒色	
SI-3	2 4 5 3 1 7	甕	①16.4△ ②3.3△	やや外傾する口縁で、縁部はとがり味でよく張る。下縁の稜は下方に強く突出する。	外面、ヨコナデ。 内面、ヨコハケメ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、茶褐色	
SI-3	2 5 5 3	甕	①9.4△ (脚残) ②5.4△	肩部は張り気味で、よく張る。縁部へ続き底は平底気味。	外面、ヨコナデ。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、灰褐色	
SK-3	2 6 5 3 1 7	甕	①18.4△ ②3.9△	やや外反する口縁で、縁部は丸くおさめる。下縁の稜は、水平に近く張り出す。	外面、口縁部5条の平行沈線をめぐらす。頸部、風化の為調整不明。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内面、淡褐色 外側、暗赤褐色	
SK-3	2 7 5 3 1 7	甕	①18.2△ ②2.7△	やや外反気味に外傾する口縁で、縁部は外向きにやや丸みをもつ平面でおさめる。	外面、ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内面、暗黃褐色 外側、黃褐色	
SK-3	2 8 5 3 1 7	甕	①21.8△ ②3.3△	わざかに外傾斜する口縁で、縁部は丸くおさめる。下縁の稜は斜め下方向外向きに強く張り出す。	外面、ヨコナデ4条(底数不明)の平行沈線が残る。頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内面、黄白色 外側、灰褐色	
SK-3	2 9 5 3 1 7	(脚部)	①4.0△ (底部残) ②5.7△	「八」字形に開き、脚部はやや角ぼった丸におさめる。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、にぶい橙色	
SK-3	3 0 5 3	(底部)	①5.2△ (底部残) ②3.6△	底部の立ち上がりは、ややふくらみをもつ。底面は平底。	内外面、ナデ。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内面、淡褐色 外側、茶褐色	

B区出土土器観察表（3）

出土 遺構	遺物番号 種類 図版	器種	法量(cm) ①口径 ②器高	形 態	技 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
SK-3	3 1 5 3	甕	①1- ②5.8△	肩部は張り気味で大きく張りだす。 肩上部につづく。	外面、底部タテハケメ。 内面、風化の為調整不明。	砂れき含む	やや軟質 (良)	内面、淡灰 色～灰褐色 外面、灰白色 ～茶褐色	
SK-19	3 2 5 3	鉢	①13.6△ ②3.4△	内傾する口縁で、端部は内向きに平 坦面をもつ。	外面、口縁部ヨコナデ。以 下タテハケメ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、黒褐色	
SK-22	3 3 5 3	甕	①24.8△ ②6.3△	外傾し、上部でわずかに外反する口 縁で、端部は丸くおさめる。下端の 後は斜め下方に強く張出す。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	軟質	内外面、茶褐色	
SK-22	3 4 5 3	(底部)	①5.0△ (底部邊) ②2.1△	わずかにふくらみをもつ底部で底面 は水平に使上げる平底。	外面、底部タテハケメ。底 部ヨコナデ。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、淡灰褐色 外面、淡黒褐色	
SK-30	3 5 5 4	甕	①21.6△ ②3.0△	わずかに外傾する口縁で、端部は丸 くおさめる。下端の稜は斜め下方に 大きく張出す。	外面、口縁部6条の平行沈 線をめぐらす。 内面、風化の為調整不明。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内外面、灰白色	外面に一部 炭化物付着
SK-30	3 6 5 4	甕	①20.8△ ④3.5△	わずかに外反する口縁で、端部は丸 くおさめる。下端の稜は斜め下方に 強く張出す。	外面、口縁部9条のクシ播 平行沈線をめぐらす。底部 ヨコナデ。 内面、風化の為調整不明。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、灰白色 外面、暗褐色	
SK-33	3 7 5 4 1 8	甕	①17.0△ ②12.0△	外傾し、わずかに外反する口縁で端 部は丸みをもつ平面でおさめる。 下端の稜は水平方向にわずかに張出 す。	外面、口縁部一箇部ヨコナデ。 底部タテハケメ。(肩 部、肩部楕) 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、淡灰褐色 外面、茶褐色	外面に一部 炭化物付着
SK-33	3 8 5 4 1 8	甕	①12.6△ ②8.5△	外傾する口縁で、端部は丸みをもつ 平面でおさめる。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、茶褐色	
SK-33	3 9 5 4 1 8	鉢	①19.0△ ②9.4△	外傾し、上部に向かい強く外反する 部をもち、口縁端は丸くおさめる。	外面、口縁部ヨコナデのち 2本の平行沈線をめぐらす。 体部タテハケメ。底部 ナデ。内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、淡橙色 外面、灰白色 ～淡橙色	
SK-33	4 0 5 4 1 8	甕	①20.2△ ②6.1△	外傾し、上部に向かい強く外反する 口縁で端部は丸くおさめる。下端の 稜は水平方向に強く張出す。	内外面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、淡黄褐色 外面、灰白色	
SK-33	4 1 5 4	甕	①15.2△ ②6.0△	外傾し、上部でわずかに外反する口 縁で端部は丸くおさめる。下端の稜 は斜め下方に強く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	砂粒含む	軟質	内外面、淡黃褐色	
SK-33	4 2 5 4	甕	①14.4△ ②3.7△	外傾する口縁で、端部はやや角ばつ た丸形でおさめる。下端の稜は真下 に強く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、淡桃 灰色	
SK-33	4 3 5 4	甕	①11.4△ ②4.7△	外傾し、上部に向かい強く外反する 口縁で端部は丸くおさめる。下端の 稜は水平方向に強く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、暗灰 褐色	
SK-35	4 4 5 4	甕	①14.8△ ②4.2△	外傾し、やや外反気味に立ちあがる 口縁で端部はやや角ばつた丸形でおさ める。下端の稜は斜め下方に強く張 出す。	外面、口縁部10条以上のク シ播平行沈線をめぐらす。 (底敷不明) 内面、風化の為調整不明。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内面、褐色 外面、灰褐色	
SK-35	4 5 5 4	甕	①19.0△ ②4.0△	外傾する口縁で端部はやや角ばつた 丸形でおさめる。下端の稜は水平方 向にわずかに張出す。	外面、口縁部6条単位のク シ播沈線を2回めぐらす。 底部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (不良)	内面、淡褐色 外面、灰白色 ～黒色	

B区出土土器観察表(4)

出土 遺構	遺物番号 拂図 国版	器種	法量(cm) ①口徑 ②器高	形態	技法	胎土	焼成	色調	備考
SK-35	46 55	甕	①22.0※ ②3.3△	外縁し、やや外反する口縁で、端部は丸味をもつ平底でおさめる。	外面、口縁部ヨコナデのち 4条1半位のクシ描平行沈 4条を2回めぐらす。頸部ヨ コナデのもじ混に刻文。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内外面、黄茶 褐色	
SK-35	47 55	(底部)	①4.4※ (底部怪) ②3.0△	底部はややふくらみをもち立ち上がる。底面は平底でわずかにへこませる。	外南、底部-底面ナデ。 内南、底部ヨコナデ。底面 ナデ。	砂粒含む	やや軟質 (不良)	内面、黒褐色 外面、橙色～ 褐色	
落ち込 みN01	48 55	甕	①15.6※ ②6.1△	外縁し、わざかに外反する口縁で端部は丸くおさめる。下縁の稜は水平方向に短く張出す。	内外面、風化の為調整不明。	砂粒含む	軟質	内外面、淡茶 褐色	外面に一部 灰化物付着
落ち込 みN01	49 55	甕	①13.8※ ②20.1△	外縁する口縁で、端部は丸くおさめる。下縁の稜は下方に強く張出す。	外面、口縁部4条の平行沈 縫をめぐらす。頸部ヨコナ デ。内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、淡茶色 外面、暗茶色	
落ち込 みN01	50 55	(底部)	①7.6※ (底部怪) ②2.4△	底部は外反して立ち上がり、ふくらみはもない。底面は平底。	外面、底部タテハケメ。底 面ナデ。 内面、ナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、淡灰褐 色 外面、暗灰褐 色	
落ち込 みN01	51 55	(体部)	①- ②5.5△	張りの少ない体部。	外面、タテハケメ。 内面、ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、灰褐色 外面、灰褐色 ～茶褐色	外面に一部 灰化物付着
落ち込 みN02	52 55 18	高杯	①- ②7.9△	中空で太い脚柱部をもち、脚部へ「八」字状へ広がりをみせる。	外面、タテハケメ。一部ヘ ラミガキ。 内面、脚柱部ナデ。裾部ヘ ラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内外面、黄褐色 ～茶褐色	
落ち込 みN02	53 55	碗	①9.0※ ②4.6△	外縁する杯部で、口縁端は丸くおさめる。	内外面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	内外面、黄茶 褐色	
落ち込 みN02	54 55	壺	①12.8※ ②3.5△	外縁し、上部でわずかに外反する口 縁で、端部は丸くおさめる。下縁の 稜は下方に短く張出す。	外面、口縁部7条以上(能数 不明)のクシ描平行沈縫を めぐらす。頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	軟質	内外面、茶褐色	
落ち込 みN02	55 55	壺	①10.0※ (脚怪) ②6.2△	肩部は張り気味で、最大径を上半部 にも多く張る胴部につづく。	外面、ヨコハケメ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、茶褐色 外面、灰白色 ～墨褐色	
P-56	56 55	高杯	①11.4※ ②2.4△	ゆるやかに「八」字状に広がり、脚 部は内向し、上方へ短く張出す稜 をもつ。	外面、器部ナデ。脚部ヨ コナデ。 内面、ヨコナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、灰白色 外面、淡褐色	
P-59	57 55 18	蓋	①5.6※ (つまみ 怪) ②7.9	外縁するつまみをもつ。体部はやや 外反し、端部は平面でおさめる。	外面、体部タテハケメ。体 部下部ヨコハケメ。 内面、体部下部ヨコハケメ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内外面、茶褐色	
P-148	58 55	(底部)	①3.0※ (底部怪) ②2.7△	ふくらみをもたない底部で平底の底 面をもつ。	外面、底部タテハケメ。底 面ナデ。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、茶褐色 外面、黑褐色 ～紫褐色	
遺構外 N0-4-5C	59 56	把手 (復原品)		半円状の把手で、断面は椭円形を呈 す。	ナデ。指頭圧痕が残る。	細砂含む	堅微	灰褐色	
遺構外 N0-4-5G	60 56 18	把手 (復原品)		半円状の把手で、断面は並んだ三角 形状を呈す。	ナデ。指頭圧痕が残る。	細砂含む	堅微	灰褐色～赤褐色	

B区出土土器観察表（5）

出土 遺構 番号 器種 法量(cm) ①口徑 ②器高	形態	技法	胎土	焼成	色調	備考
遺構外 NO-4-5G 手把 圓盤	6 1 5 6 1 8 (須器)	半円状の把手で、上部断面は丸んだ 横円、下部は長方形を呈す。	ナデ。指捺压痕が残る。	細砂含む	堅緻	灰褐色
遺構外 NO-4-5G 手把 (土器)	6 2 5 6 1 8	半円状の把手で、上部断面は丸んだ 横円、下部は長方形を呈す。	ナデ。	細砂含む	堅緻	橙色~棕褐色
遺構外 P-4G 甕	6 3 5 6	外模する口縁で、端部は丸みをもつ 平面でおさめる。	外模、口縁部ヨコナデのち その平行沈継をめぐらす。 内面、口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、淡 褐色~墨褐色 外面、淡 褐褐色
遺構外 P-4G 高杯	6 4 5 6	肩端部に向って3段をなし、「八」 字状に広がる。	外面、ヨコナデ。頸部上部 に斜突文を1列めぐらす。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、暗赤 色 内面に暗 赤色の彩色 を施す。
遺構外 P-4G 甕	6 5 5 6	内模する口縁で、端部はとがり気味 に丸くおさめる。	外面、口縁部5条のクシ描 平行沈継をめぐらす。頸部 ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、赤褐色
遺構外 P- 6,7,8G 高杯	6 6 5 6	やや浅い皿状の杯底部で、外面部は脚 柱部に向かい段をもち、ゆるやかに 広がる。	外面、8条1單位のクシ描 平行沈継を放射状に15回め ぐらす。 内面、ナデ。	細砂含む	やや軟質 (良)	内面、明赤色 外面、赤褐色 内面に赤色 の彩色を施す。
遺構外 P- 6,7,8G 甕	6 7 5 6	わずかに内模する口縁で、端部は平 面気味の丸さをおさめる。下端の棱 は水平方向へわざかに強出す。	外面、口縁部3条の平行沈 継をめぐらす。頸部ヨコナ デ。 内面、口縁部~頸部ヨコナ デ。頸部ヘラケズリ。	細砂含む	やや軟質 (良)	外面、淡茶 色
遺構外 Q-3G 甕	6 8 5 6	外傾し、やや外反する口縁で、端部 は丸くおさめる。下端の棱は水平方 向に強く強出す。	外面、ヨコナデ。 内面、風化の為調整不明。	細砂含む	軟質	外面、黄褐 色
遺構外 Q-3G 壺	6 9 5 6	外傾し、I部でやや外反する口縁で、端部 は丸くおさめる。下端の棱は水平方 向に強く強出す。	外面、ヨコナデ。 肩部ヨコハケメ。 内面、ヨコハケメ。 内面、ヨコナデ。 肩部ヘラケズリ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、暗褐色
遺構外 Q-3G (底部)	7 0 5 7	内向気味でわずかにふくらみをもつ 底部。底面は平底。	外面、タテハケメ。底面ヨ コナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、茶褐色
遺構外 Q-4G 遺物集 中部	7 1 5 7 1 8	外傾し、I部でやや外反する口縁で、端部 は丸くおさめる。下端の棱は水平方 向に強く強出す。	外面、口縁部ヨコナデのち その平行沈継をめぐらす。 頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (小良)	内面、淡褐色 外面、暗褐色
遺構外 表探 甕	7 2 5 7	外傾し、I部でやや外反する口縁で、端部 は丸くおさめる。下端の棱は斜め下方に 強く強出す。	外面、口縁部ヨコナデのち その平行沈継をめぐらす。 頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	内面、暗褐色 外面、無褐色
遺構外 表探 甕	7 3 5 7	外模する口縁で、端部は平面でおさ める。	外面、口縁部ヨコナデのち 5~6条(絶算小町)のクシ 描平行沈継をめぐらす。頸 部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、淡黃 褐色
遺構外 表探 甕	7 4 5 7	外傾し、上部でわざかに内向する口 縁で、端部は丸くおさめる。下端の 棱は斜め下方に強出す。	外面、口縫部5条(絶算不 明)の平行沈継をめぐらす。 頸部ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。	砂粒含む	やや軟質 (良)	外面、灰白色
遺構外 表探 鉢	7 5 5 7	わざかに外傾し、上部でやや外反す る口縁で、端部は丸くおさめる。	外面、口縫部~頸部ヨコナ デ。以降タテハケメ。 頸部に削出しの突宍を1条めぐ らす。 内面、ヨコナデ。	砂れき合 む	やや軟質 (良)	内面、灰白色 外面、暗褐色
遺構外 表探 (底部)	7 6 5 7	内向気味に立ち上がり、ふくらみを ほどど持たない底部。底面は平底。	外面、底部タテハケメ。 内面、底部ヘラケズリ。	砂れき合 む	やや軟質 (不良)	内面、褐色 外面、暗褐色~ 灰褐色
遺構外 表探 把手	7 7 5 7 1 8	半円状を呈し、わざかにひねりが加 わる。ほぼ円形断面。	ナデ…部タキ目が残る。	細砂含む	やや軟質 (良)	明灰褐色

表3 A・B区出土石器観察表

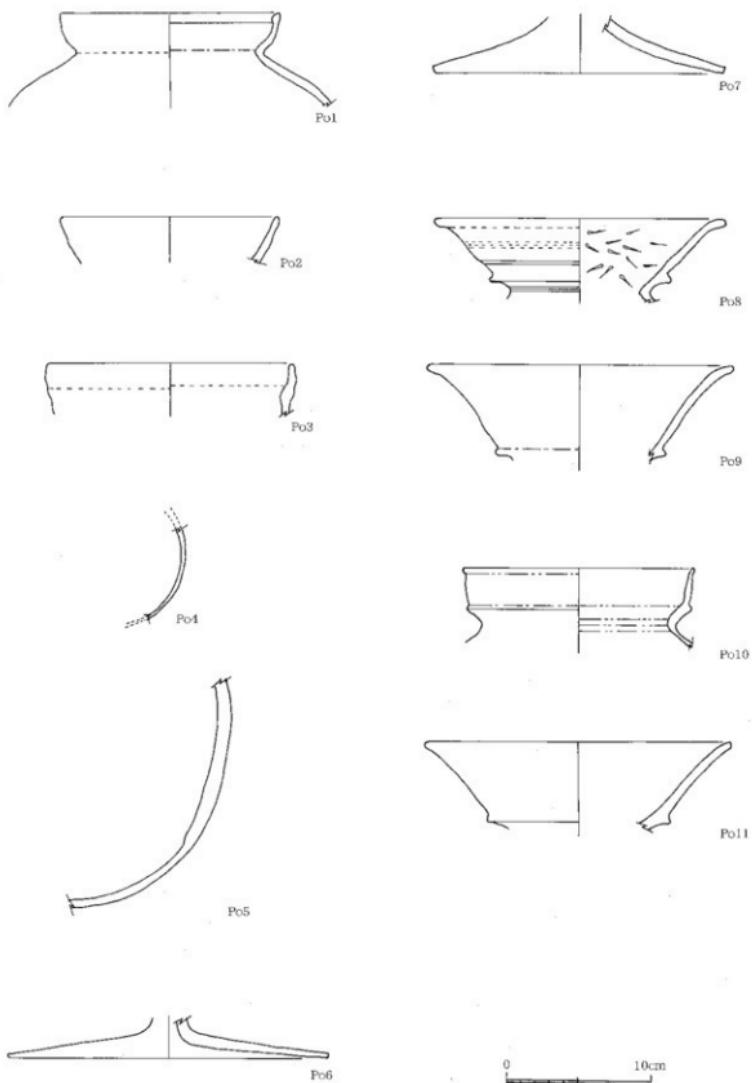
出 土 標	遺 物 番 号 図 版	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形 態	備 考
A区 SI-2	S-1 5 8 1 9	剥片	4.5	2.3	0.3		
A区 SI-3.4	S-2 5 8 1 9	剥片	4.6	2.7	0.5		
A区 SI-3.4	S-3 5 8 1 9	剥片	4.0	1.7	0.7		
A区 SI-3.4	S-4 5 8 1 9	剥片	2.0	2.7	0.6		
A区 SI-3.4	S-5 5 8 1 9	剥片	1.7	1.1	0.6		
A区 SK-19	S-6 5 8 1 9	敲石	10.5	9.2	9.1	長持円形を呈し、断面は球形。両端に敲打痕あり。	
A区 SI-3.4	S-7 5 8 1 9	剥片	8.8	6.2	2.1		
A区 P-35	S-8 5 8 1 9	剥片	10.4	6.2	4.7		
A区 F-11G 遺物集中部	S-9 5 8 1 9	打製石 包丁	9.2	5.6	1.2	刃部は細かな剥離によって作る。両端部を背面から打ち欠く。風化はほとんどない。	
B区 Q-5G	S-10 5 9 1 9	剥片	6.0	3.9	0.8		
B区表様	S-11 5 9 1 9	石錐	5.1	1.5	0.8	断面不定な四角形を呈す。全面がかなり風化している。 錐先端は磨耗が見られる。	サヌカイト製
B区 Q4+7.0G 表様	S-12 5 9 1 9	石鉤	10.2 (底部溝)	8.9 (深さ)	-	内向して立ち上がり、ややふくらみをもつ。	表面白色彩色?

遺物実測図

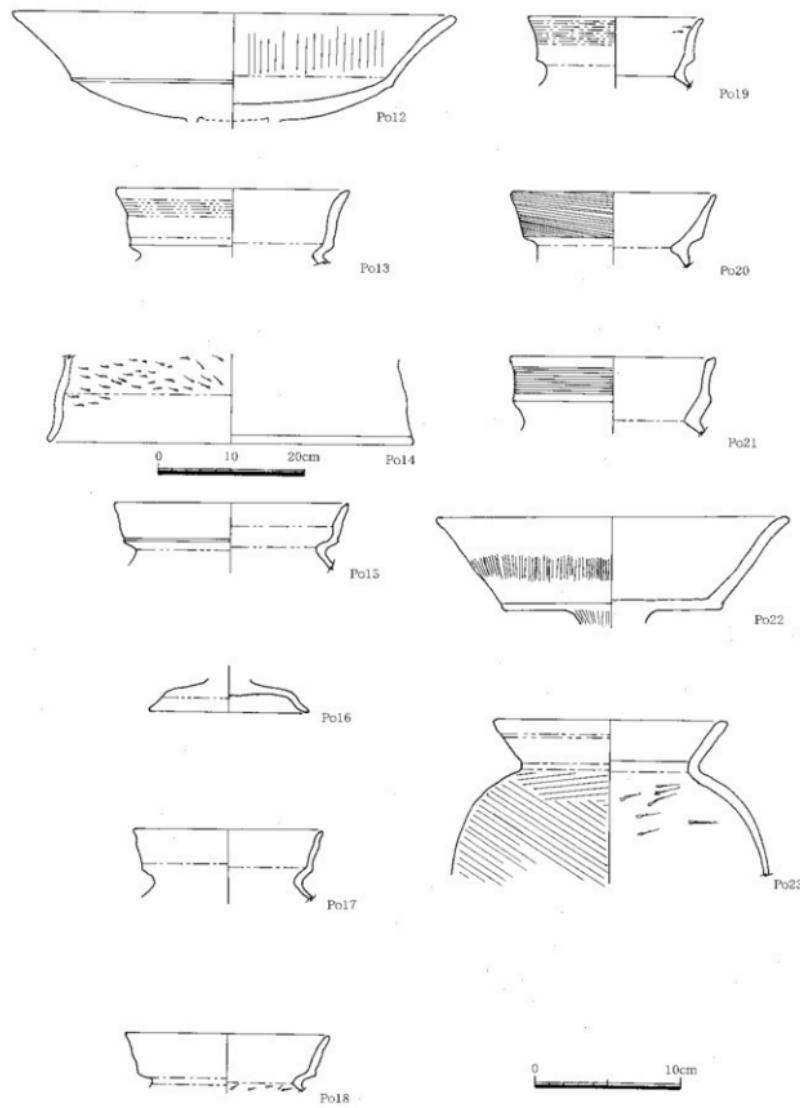
第45～50図 A区出土遺物

第51～57図 B区出土遺物

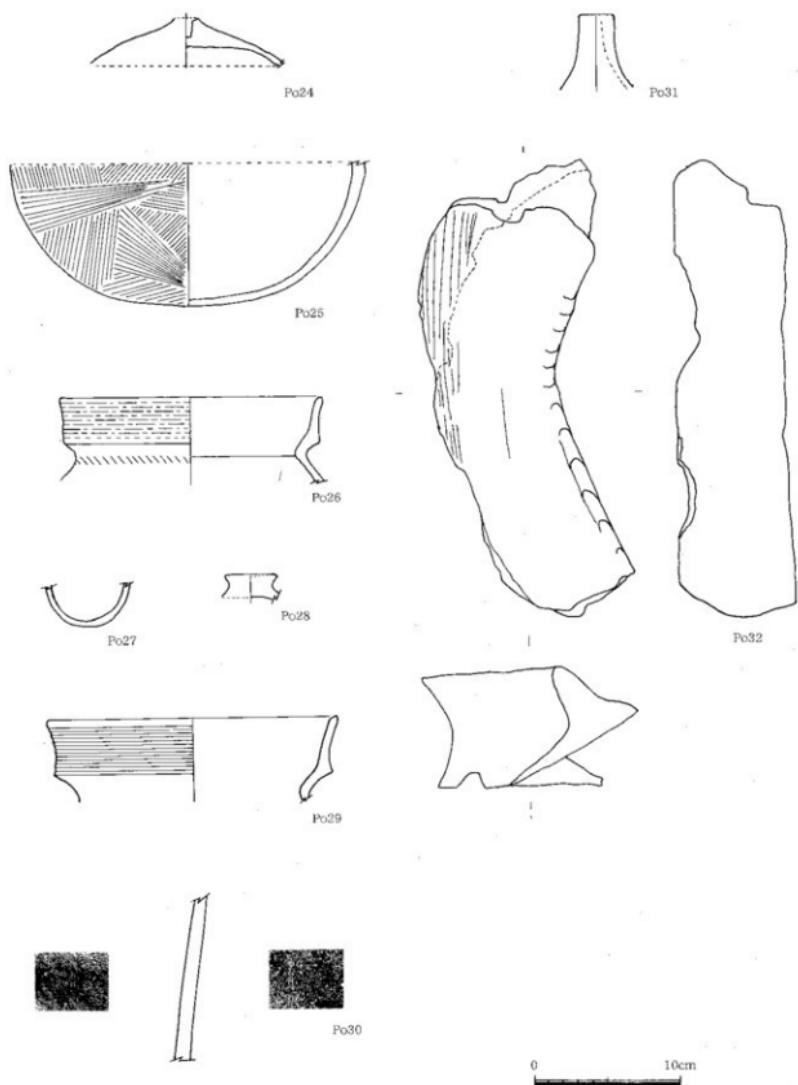
第58～59図 A・B区出土石製品



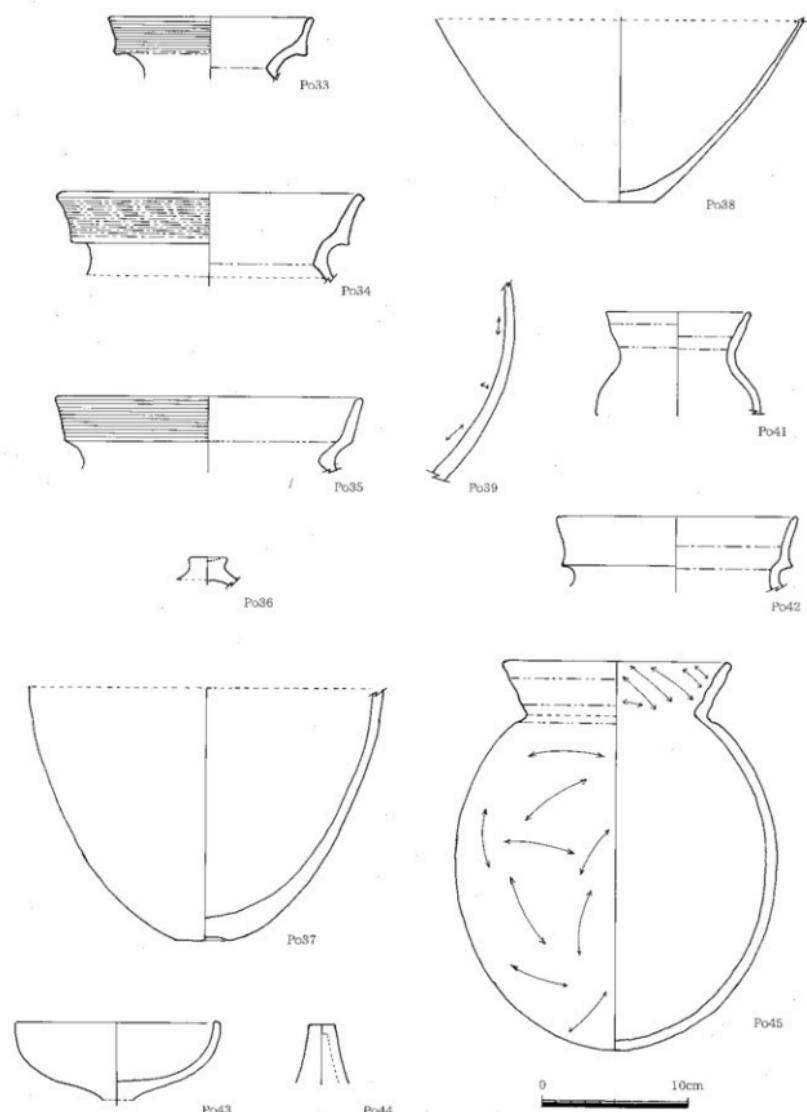
第45図 A区出土遺物実測図 (1)



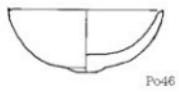
第46図 A区出土遺物実測図 (2)



第47図 A区出土遺物実測図 (3)



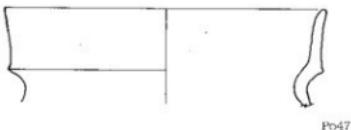
第48図 A区出土遺物実測図 (4)



Po46



Po53



Po47



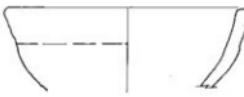
Po55



Po48



Po49



Po56



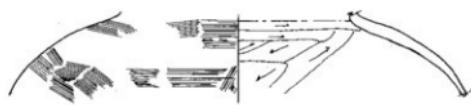
Po50



Po67



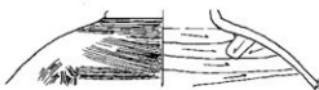
Po58



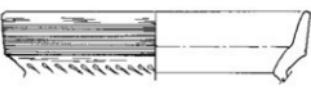
Po51



Po59



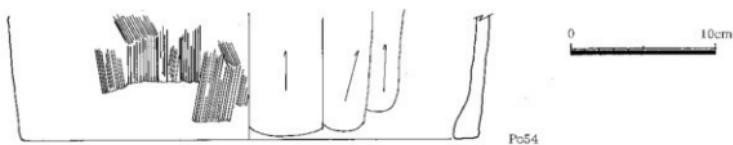
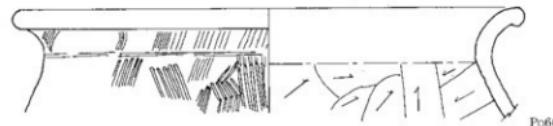
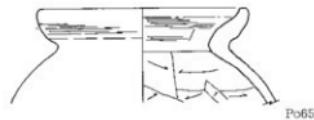
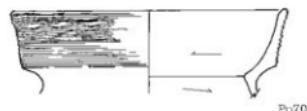
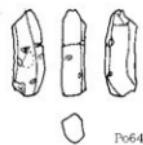
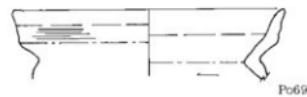
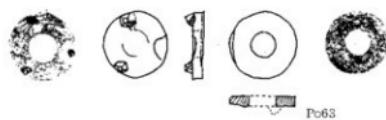
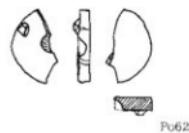
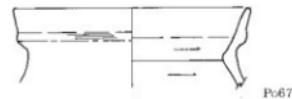
Po52



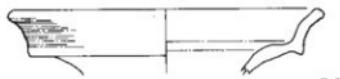
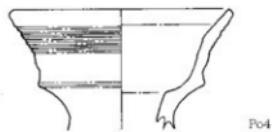
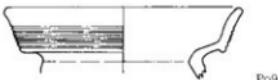
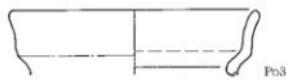
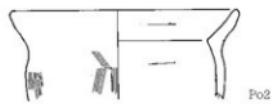
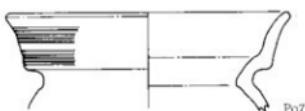
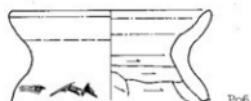
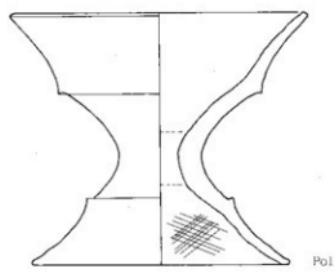
Po60



第49図 A区出土遺物実測図 (5)

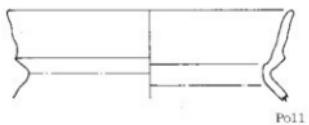


第50図 A区出土遺物実測図 (6)

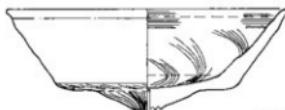


0 10cm

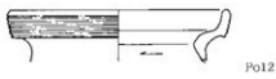
第51図 B区出土遺物実測図 (1)



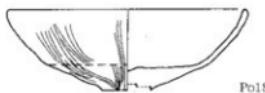
Po11



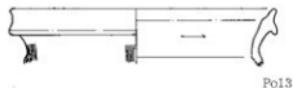
Po17



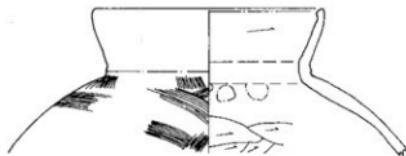
Po12



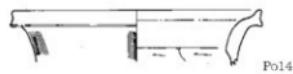
Po18



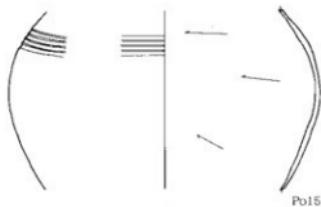
Po13



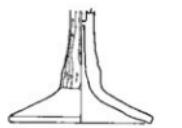
Po19



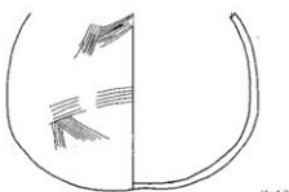
Po14



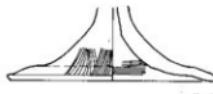
Po15



Po20



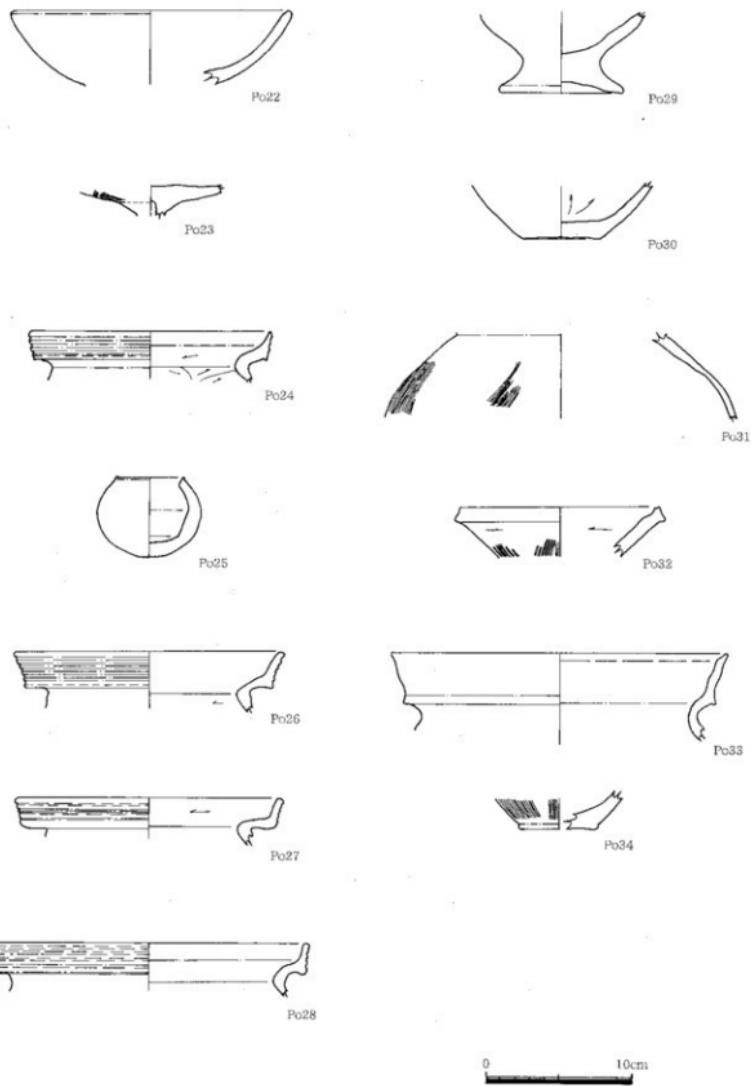
Po16



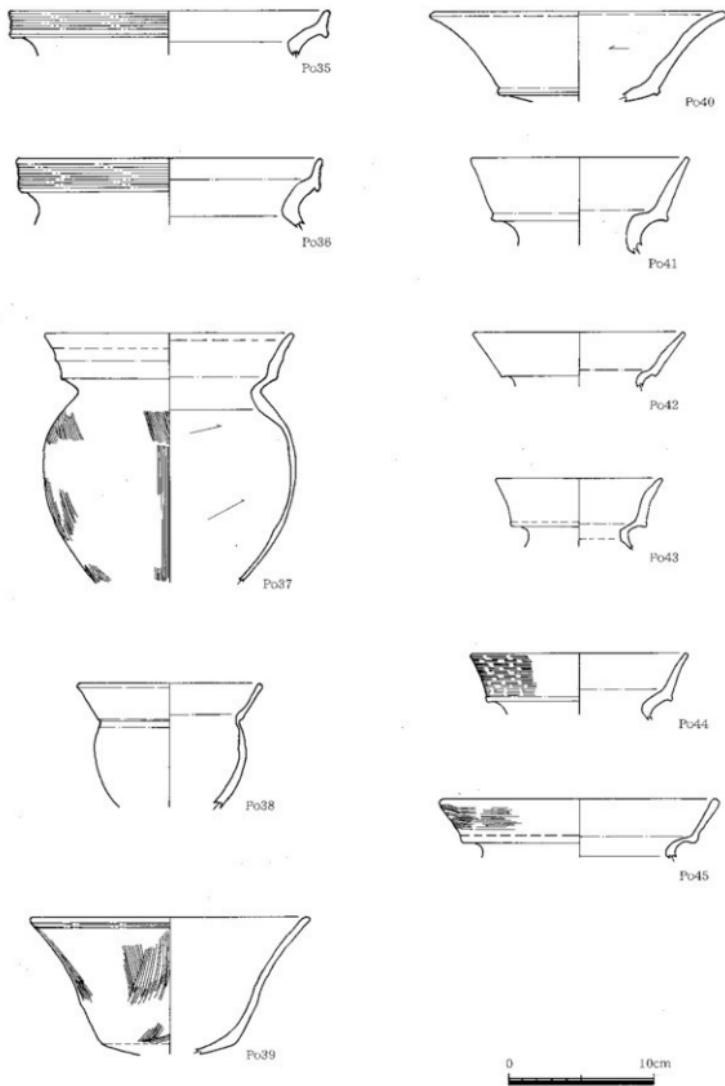
Po21



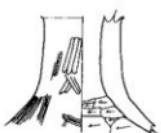
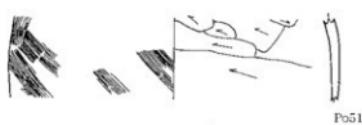
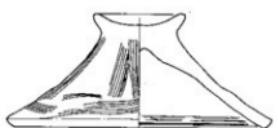
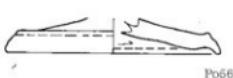
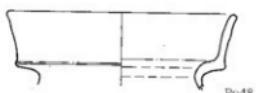
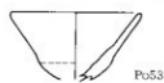
第52図 B区出土遺物実測図 (2)



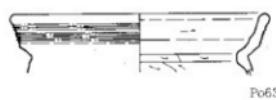
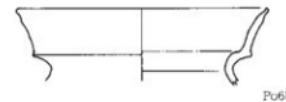
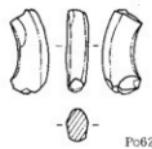
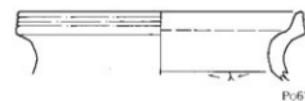
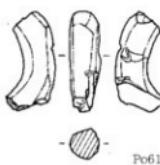
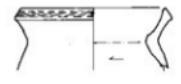
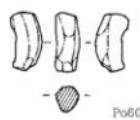
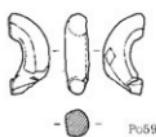
第53図 B区出土遺物実測図 (3)



第54図 B区出土遺物実測図 (4)

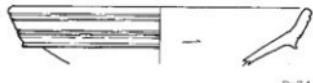
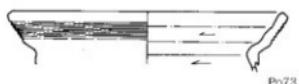
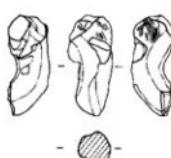
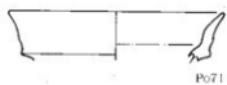
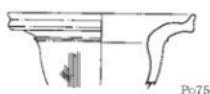


第55図 B区出土遺物実測図 (5)

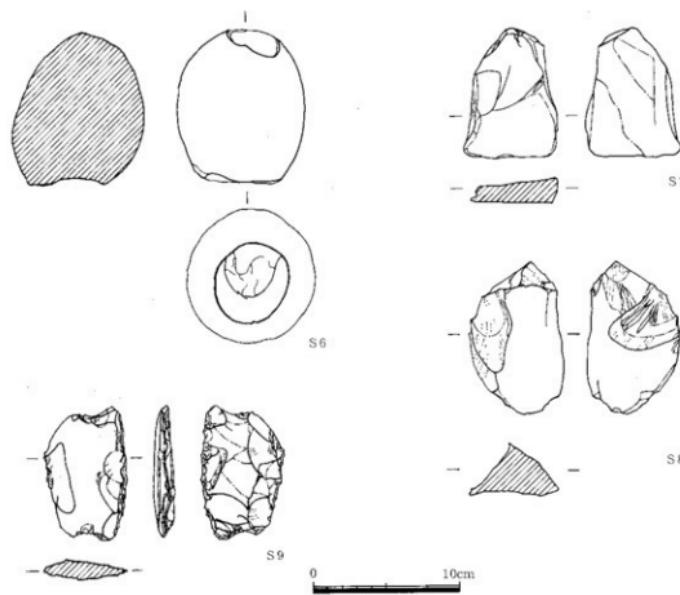
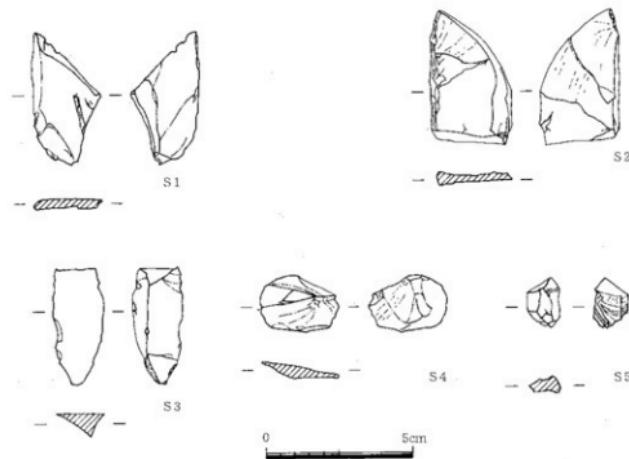


0 10cm

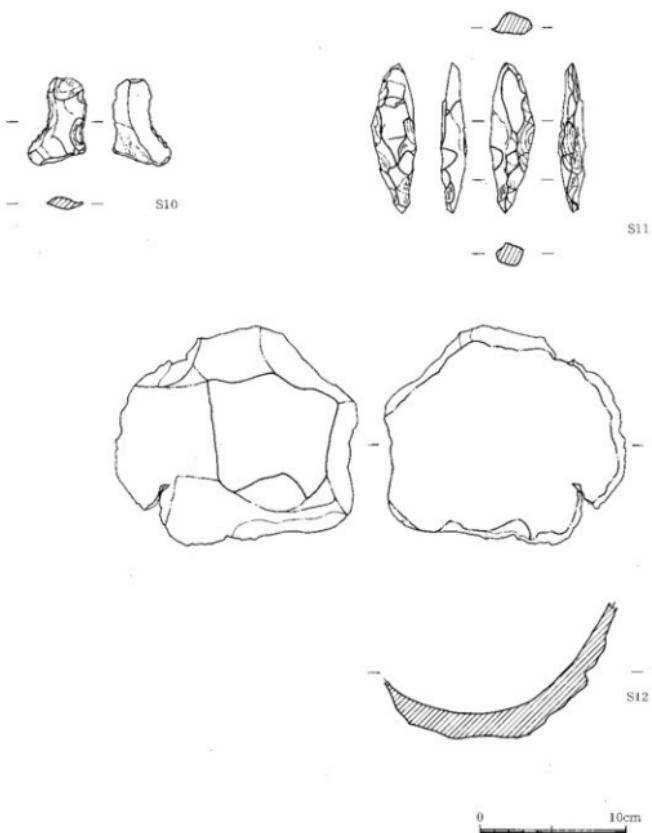
第56図 B区出土遺物実測図 (6)



第57図 B区出土遺物実測図 (7)



第58図 A区・B区出土石製品実測図 (1)



第59図 A区・B区出土石製品実測図 (2)

図 版

- 1 調査後全景
- 2 調査後A区全景
- 3 調査後B区全景
- 4 (1) A区調査前全景
(2) A区表土除去後全景
- 5~7 A調査区
- 8 (1) B区調査前全景
(2) B区S I - 1 検出状況
- 9~11 B調査区
- 12~15 A区出土遺物
- 16~18 B区出土遺物
- 19 A・B区出土石製品



調査後全景（南東より）

図版 2



A区調査後全景（南東より）



B区調査後全景（南より）

図版4

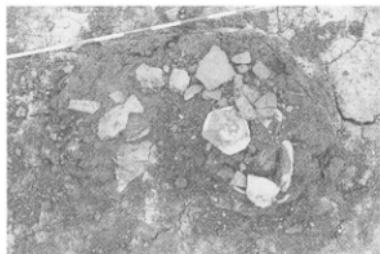


(1) A区遺跡調査前全景（南東より）



(2) A区表土除去後全景（東より）

図版 5



(1) A区S I - 1 遺物出土状況（南より）



(2) A区S I - 1 完掘状況（東より）



(3) A区S I - 2 南北sec南側断面（東より）



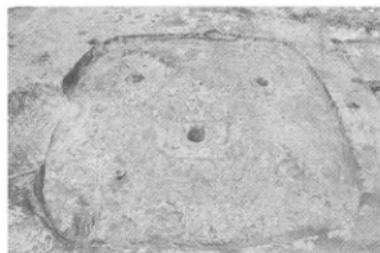
(4) A区S I - 2 東西sec西側断面（北より）



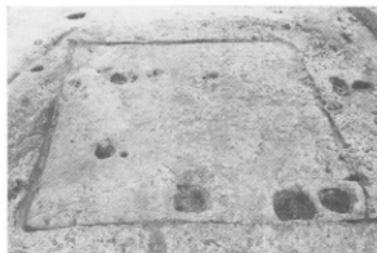
(5) A区S I - 2 南東隅遺物出土状況（南より）



(6) A区S I - 2 遺物出土状況（北東より）



(7) A区S I - 2 完掘状況（東より）

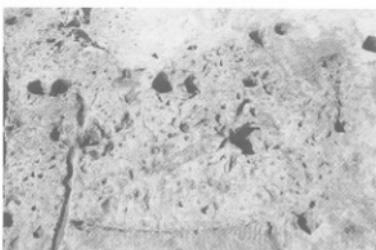


(8) A区S I - 3 完掘状況（南西より）

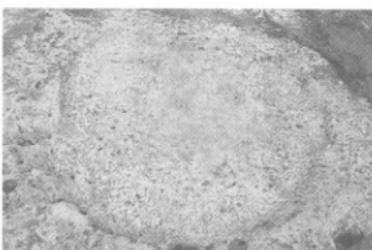
図版 6



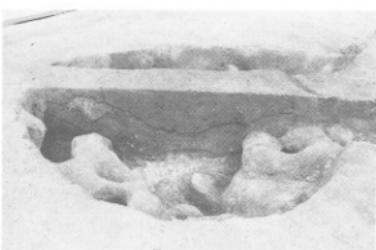
(1) A区S I - 3・4・5重複状況（東より）



(2) A区S I - 5完掘状況（南西より）



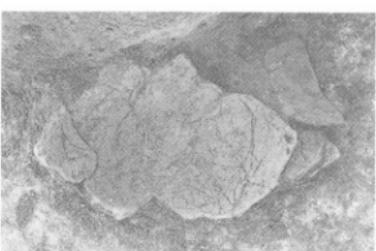
(3) A区S I - 6完掘状況（南西より）



(4) A区S I - 7北西土壤断面（南西より）



(5) A区S I - 7北西土壤遺物出土状況（南西より）



(6) A区S I - 7北西土壤遺物出土状況（北より）



(7) A区S I - 7完掘状況（南東より）



(8) A区S I - 8全景（北西より）



(1) A区 S I - 8 遺物出土状況（北東より）



(2) A区 S I - 8 完掘状況（南東より）



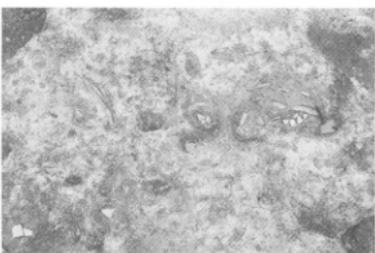
(3) A区 S I - 9 完掘状況（北東より）



(4) A区 S I - 10 完掘状況（南東より）



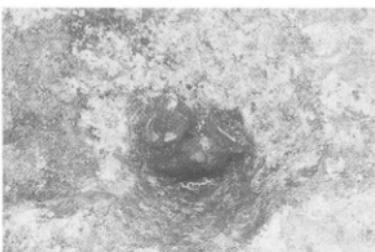
(5) A区 S K - 19 遺物出土状況（南より）



(6) A区 E - 9 G 遺物出土状況（西より）



(7) A区 G - 9 G 遺物出土状況（西より）



(8) A区 F - 11 G 遺物出土状況（南東より）

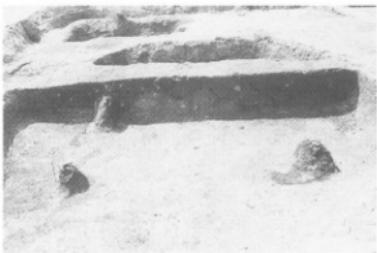
図版 8



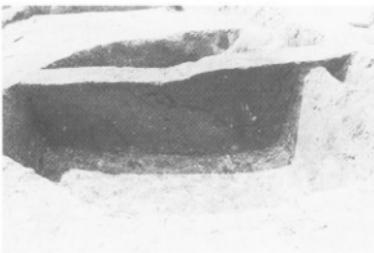
(1) B区遺跡調査前全景（南東より）



(2) B区S I - 1 検出状況（南より）



(1) B区S I - 1 東西sec東側断面 (北より)



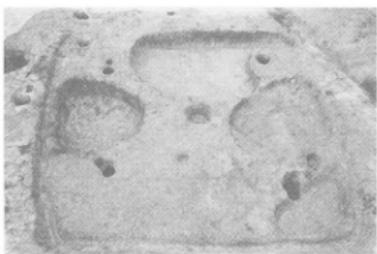
(2) B区S I - 1 東西sec西側断面 (北より)



(3) B区S I - 1 南北sec北側断面 (東より)



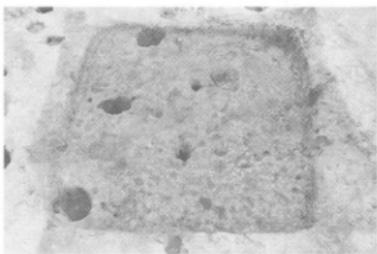
(4) B区S I - 1 西側土壙遺物出土状況 (北より)



(5) B区S I - 1 完掘状況 (南より)



(6) B区S I - 2 全景 (南より)

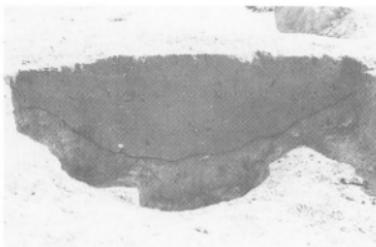


(7) B区S I - 2 完掘状況 (西より)

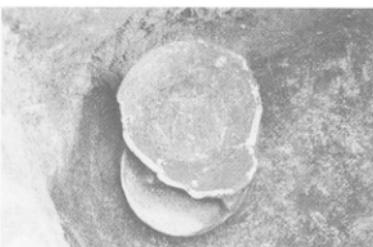


(8) B区S I - 3 全景 (北西より)

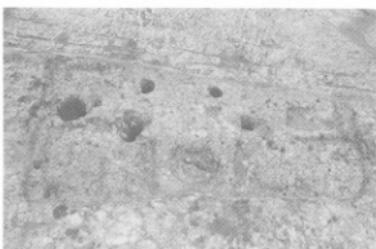
図版10



(1) B区S I - 3 東西sec 東側断面 (南より)



(2) B区S I - 3 P 6 内遺物出土状況 (北より)



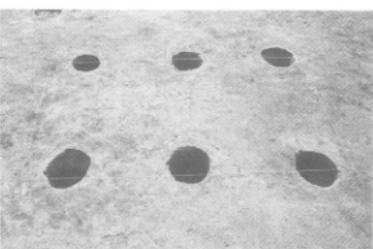
(3) B区S I - 3 完掘状況 (南東より)



(4) B区S B - 1 完掘状況 (北より)



(5) B区S B - 2 完掘状況 (北東より)



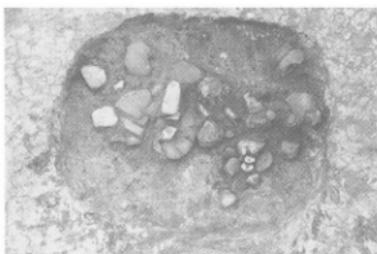
(6) B区S B - 3 完掘状況 (東より)



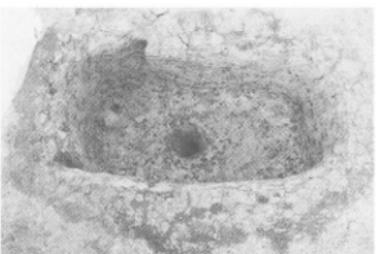
(7) B区S K - 3 遺物出土状況 (北西より)



(8) B区S K - 33 土層断面 (南より)



(1) B区SK-33遺物出土状況（南より）



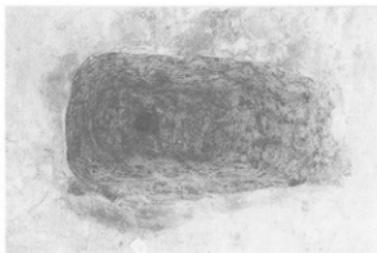
(2) B区SK-1完掘状況（北より）



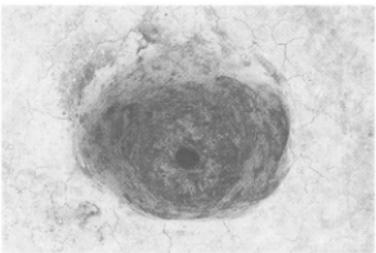
(3) B区SK-2完掘状況（北より）



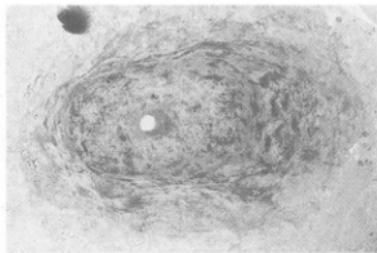
(4) B区SK-7完掘状況（北より）



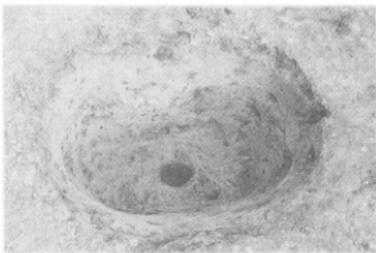
(5) B区SK-23完掘状況（南より）



(6) B区SK-25完掘状況（北より）

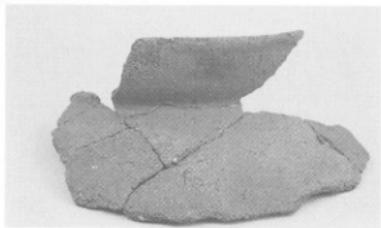


(7) B区SK-29完掘状況（北より）

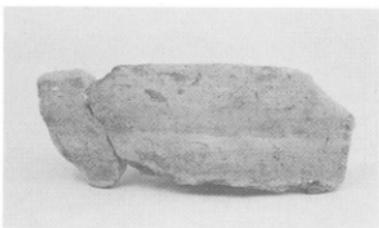


(8) B区SK-32完掘状況（北より）

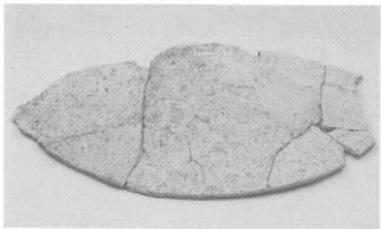
図版12



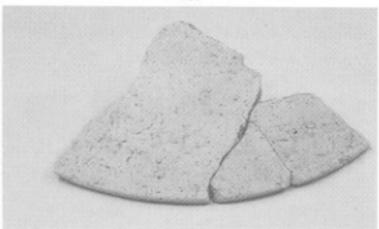
Po1



Po3



Po6



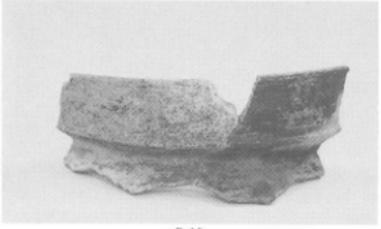
Po7



Po8



Po9



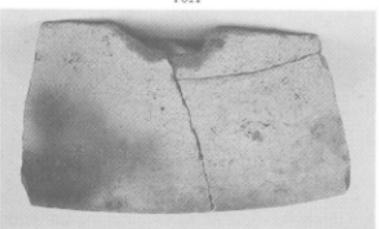
Po10



Po11



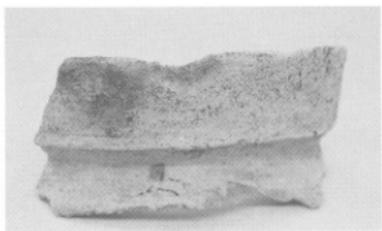
Po12



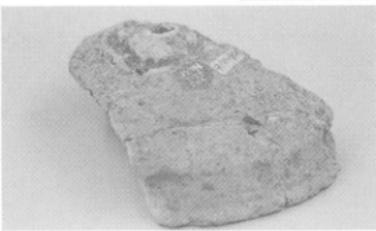
Po14

A区出土遺物 S I - 1 (Po 1、3)、S I - 2 (Po 6 ~ 14)

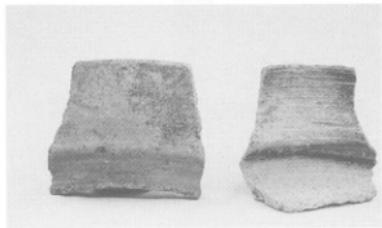
図版13



Po15

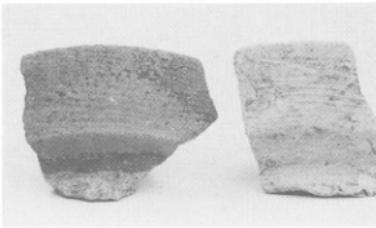


Po16



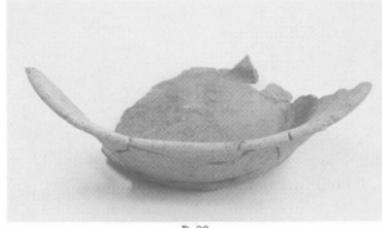
Po18

Po19



Po20

Po21



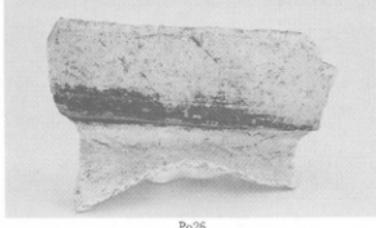
Po22



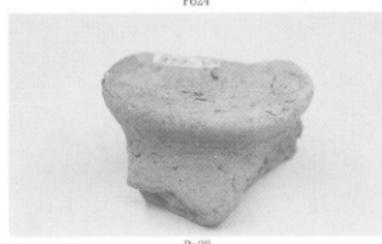
Po23



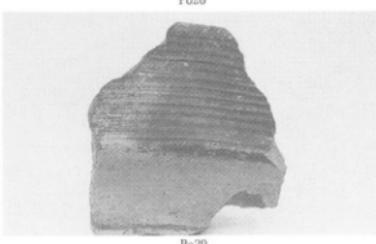
Po24



Po26



Po28



Po29

A区出土遺物 S I - 2 (Po15~21)、S I - 3・4 (Po22~29)

図版14



Po30 (表)



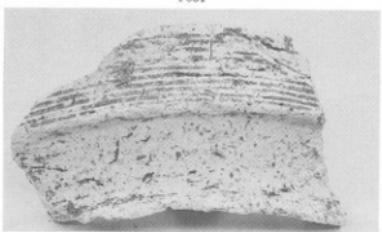
Po30 (裏)



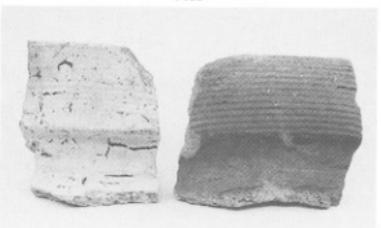
Po31



Po32



Po33



Po34

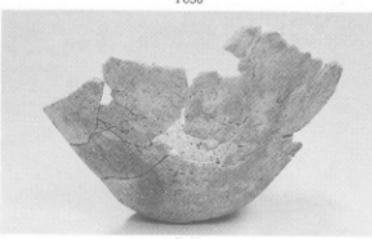
Po35



Po36



Po37



Po38

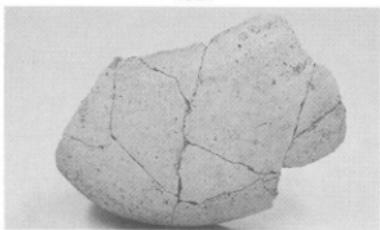


Po41

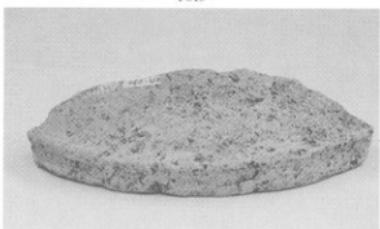
A区出土遺物 S I - 3・4 (Po30・31)、S I - 5 (Po32-35)、S I - 6 (Po36)、S I - 7 (Po37~41)



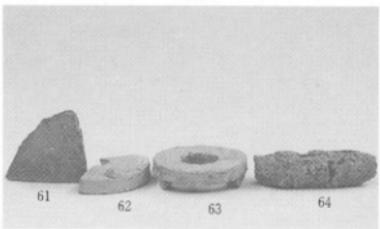
Po42



Po49

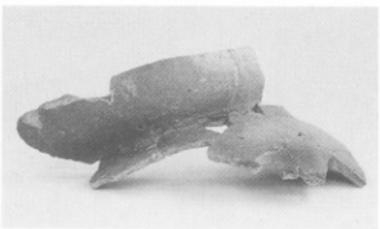


Po50



61 62 63 64

Po61~64



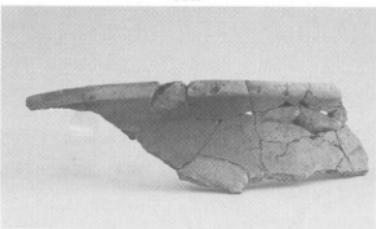
Po65



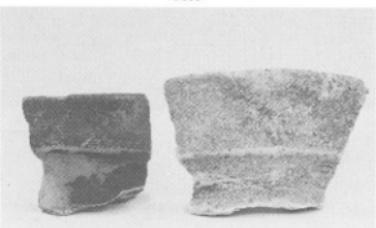
Po45



Po46



Po66



Po67

Po68

A区出土遺物 S I - 7 (Po42)、S I - 8 (Po45・46)、S K - 19 (Po49・50)、遺構外 (Po61~68)

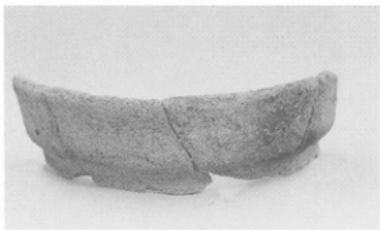
図版16



Po1



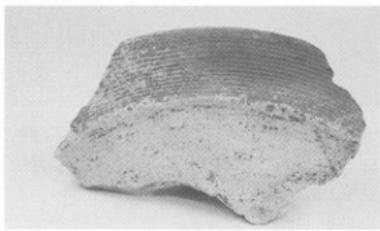
Po2



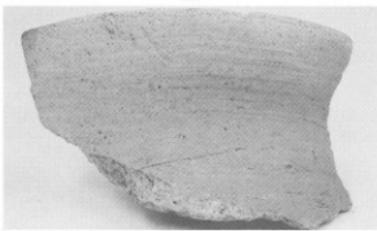
Po3



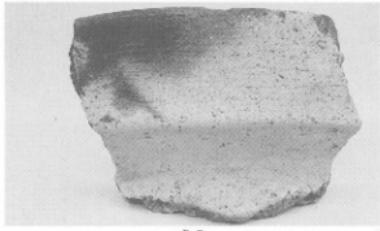
Po4



Po5



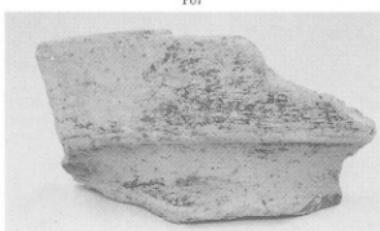
Po6



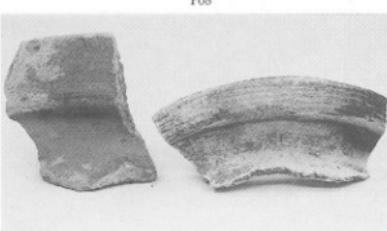
Po7



Po8



Po9



Po10

Po12

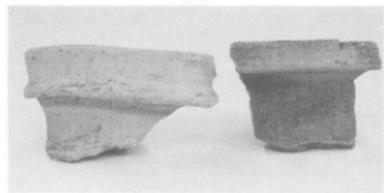
B区出土遺物 S I - 1 (Po 1 ~10・12)



Po11

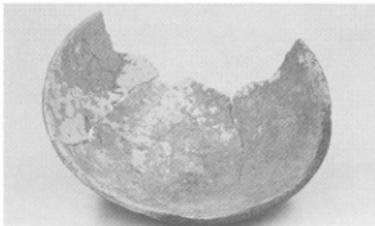


Po17



Po13

Po14



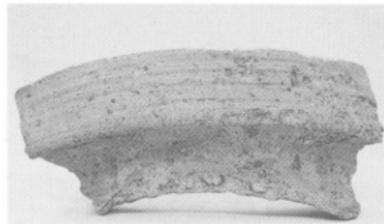
Po18



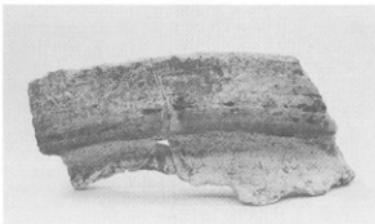
Po19



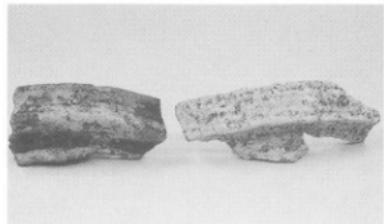
Po20



Po24



Po26



Po27

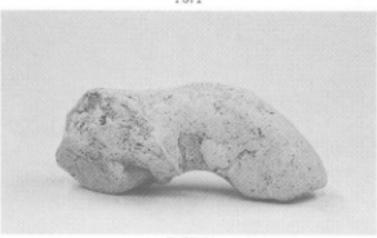
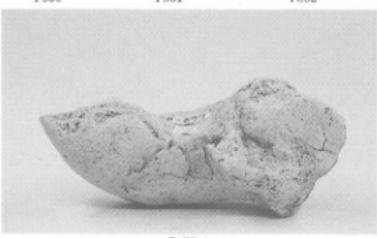
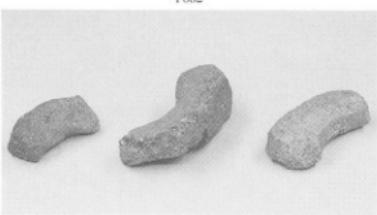
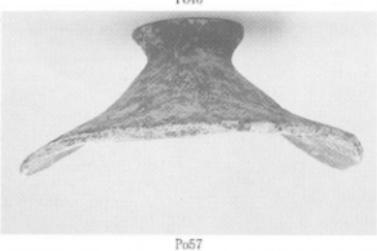
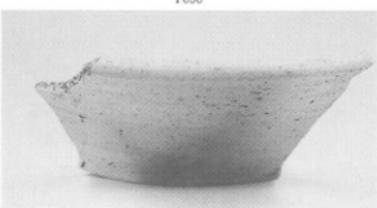
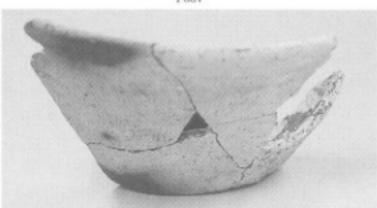
Po28



Po29

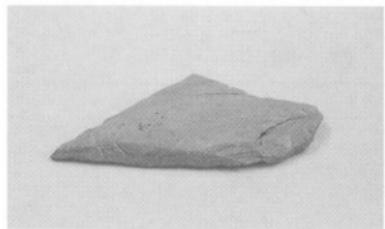
B区出土遺物 S I - 1 (Po11・13・14)、S I - 3 (Po17~20・24)、S K - 3 (Po26~29)

図版18



B区出土遺物 S K-33(Po37~40)、おちこみNo2 (Po52)、P-59(Po57)、遺構外(Po60~77)

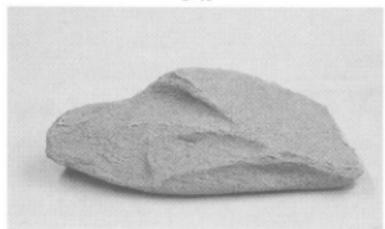
図版19



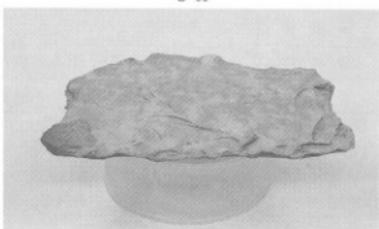
S-01



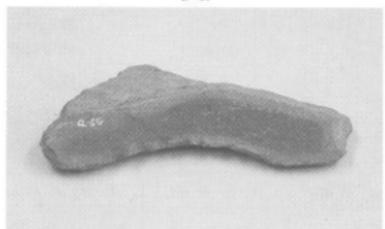
S-06



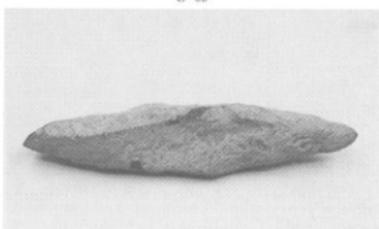
S-07



S-09



S-10



S-11



S-12

A区

S I - 2 (S-01)

S I - 3.4 (S-07)

S K - 19 (S-06)

遺構外 (S-09)

B区

遺構外 (S-10~12)

報 告 書 抄 錄

ふりがな		くのうじきねづかいせきはくつちょうさ						
書名		久能寺狐塚遺跡発掘調査						
副書名		八頭高等学校運動場造成工事に伴なう埋蔵文化財事前調査						
シリーズ名		郡家町文化財報告書						
シリーズ番号		25						
編集者名		道谷富士夫						
編集機関		鳥取県八頭郡 郡家町教育委員会						
所在地		〒680-0463 鳥取県八頭郡郡家町大字宮谷80						
発行年月日		西暦2002年3月						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久能寺狐塚 遺跡	鳥取県八頭郡郡家 町大字久能寺字狐 塚・糠塚	31321	730	35° 24'	134° 14' 50"	20010401 /	4979.15	運動場造 成工事に 伴う事前 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久能寺狐塚遺跡	住居跡	弥生時代後期 古墳時代後期	A調査区 住居跡-10棟 土坑墓-180穴 (含 落し穴)		土師器 壺・甕・高杯 楕・器台 石器等		落し穴と思われ る土坑が多くあ った。	
			B調査区 住居跡-3棟 土坑墓-120穴 (含 落し穴) 掘立柱建物跡- 4棟 落ち込み-2か 所					

郡家町文化財報告書25

久能寺狐塚遺跡

八頭高等学校運動場造成工事に伴なう
埋蔵文化財事前調査報告書

発行 2002.3

発行者 郡家町教育委員会

〒680-0463 TEL (0858) 76-0001

鳥取県八頭郡郡家町宮谷80番地

(郡家中央公民館内)

印刷 中央印刷株式会社